

569-14



1200501516546



~~3-2109~~

10.25

569
14

岩波文庫

1510—1511

フランクレン自傳

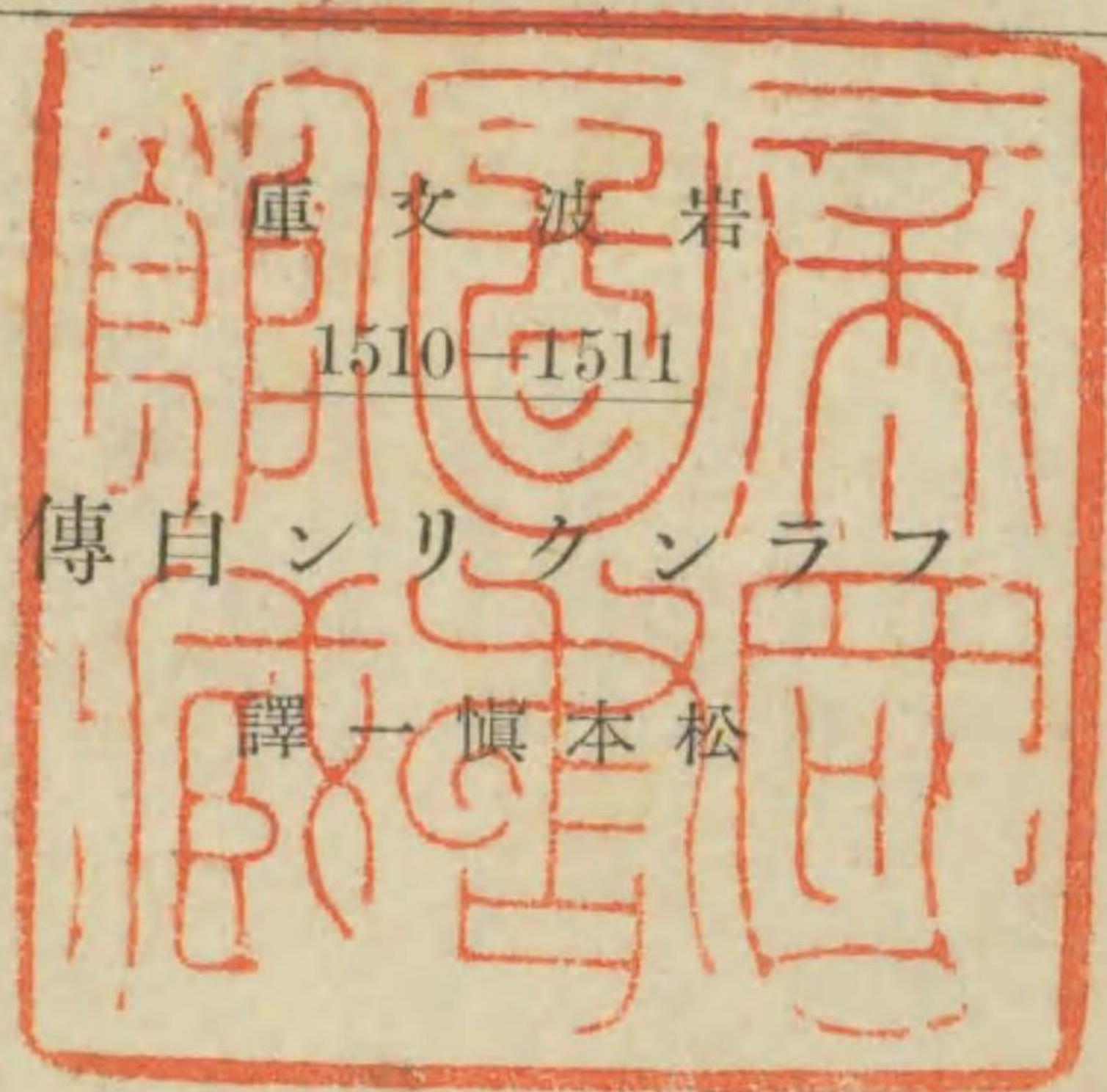
松本慎一譯

岩波書店

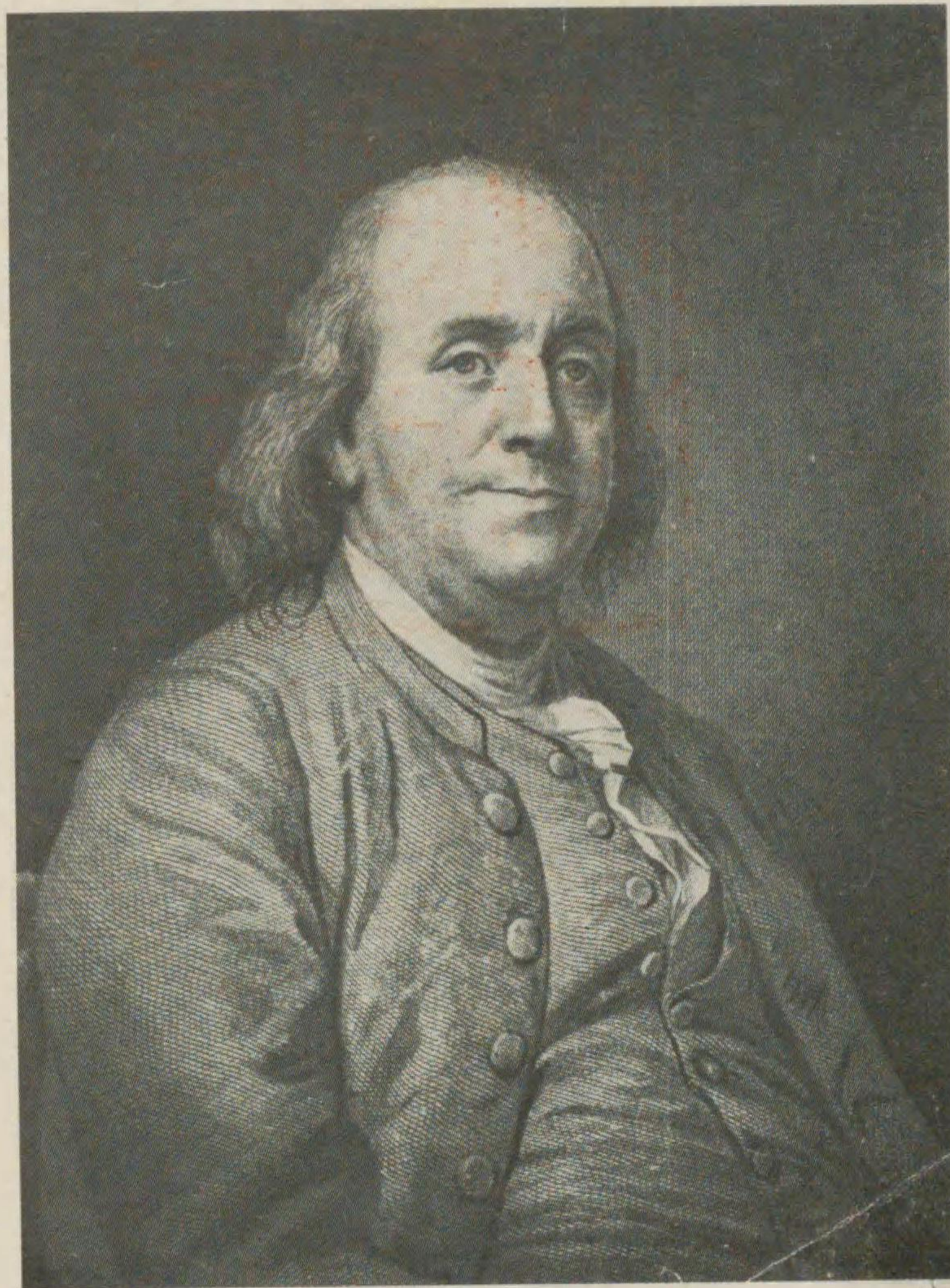
743



8



店書波岩



ンリケンラフ・ンミヤジンベ
(りよ繪口卷一第集全版ーロクビ)

569
14

目次

第一章	少年時代……………	五
第二章	フィラデルフィヤに入る……………	三三
第三章	ロンドンの一年半……………	六三
第四章	印刷屋を開業す……………	八一
第五章	勤儉力行時代……………	九五
第六章	十三徳樹立……………	一一二
第七章	成功の道を歩む……………	一三六
第八章	社會的活動(一)……………	一五三
第九章	社會的活動(二)……………	一七三
第十章	軍事に活躍す(一)……………	一九一
第十一章	軍事に活躍す(二)……………	二一四
第十二章	州民を代表して再び英國へ……………	二三二

フランクリン年表 二五三

フランクリン著作年表 二五九

あとがき 二六五

第一章 少年時代

奥のこころを
語りしこと
お前も
はなす

先祖達の逸話を集めるのは、どんな小さい事でも、いつでも私には楽しいことだつた。お前も覚えてゐるだらうが、お前が私と一緒にイングランドにゐた時分、親類たちの書残した書類に就いて調べたり、旅行したりなどしたのもそのためであつた。同じやうにお前にとつては、私のこれまでを知るのが、嬉しいだらうと思ふ。その大部分はまだお前は知らないのだから。幸ひ、ここ数週間はずつと暇なはずだから、一つそれを書いてみようと思ふ。私は机に向つてゐるのである。もつとも、この仕事をやつてみたいと思ふ理由は他にもあるのだ。私は貧しい賤しい家に生れて少年時代を過したが、次第に身を起して富裕の人となり、今では一かど世間に名の知れた人間になつてゐる。この年になるまで私はいつも幸運に恵まれてきたのである。だから、私の子孫にしてみれば、私の處世術——それが神様のお蔭でたいそう成功したのだが——を知りたいだらうし、私と同じやうな環境にある場合には、私の眞似をすればよいとも考へるだらうと思ふ。

私はこの幸運な生涯を振り返つてみるのが度々あるが、すると私はかう言ひたくなる。一できるることなら、生涯を初めから終りまでそのまま繰返しても結構だ。たゞ初版の間違ひを再版で訂正する著述家と同じやうな権利だけを與へて貰へば。」もちろんもつと好都合なものに變へるこ

誤記!!

とができたらと思ふやうな出来事も幾つかあるにはある。しかし、この條件が駄目にしても、尙私は同じ生涯を繰返せと云はれたら、承知するつもりである。ところが、この繰返しは出来ぬ相談だが、一つの生涯を生き直すのに頗る似てゐることはある。生涯の事をこまごまと思ひ出して、その追憶を永久のものにするために筆録することがそれである。

かうして書いてゆくうちに、老人に有勝ちの、身の上話、手柄話ばかりする癖がついて来るだらう。けれどもそんな癖が出るにしろ、老人のいふことだから耳を傾けなくてはと考へるやうな讀者には別段うるさくもあるまい。讀まうと讀むまいと勝手なのだから。それから最後にも一つ白状すると(否定してみたところで誰も信じるものはあるまいから)、私は多分大いに自分の自惚れをも満足させることだらう。よく序言には「自分は少しも自惚れることなくいふが」などとあるのを見聞きするが、直ぐその後には、きまつて自惚れたつぷりの言葉が続いてゐるやうである。大抵の人は、自分はどんなに自惚屋でも、他人の自惚れは嫌ふものである。しかし、場合にもよりけりだが、自惚れにもそれ相應の値打はあると私は信じてゐる。自惚れといふものは、その當人にとつても、また彼の關係者にとつても、屢々利益を齎すものである。人生の他のさまざまの愉樂と共に、自惚れを與へ給うたことに對しても、神に感謝しなければならぬと主張しても、強ちいはれないことではないのである。

神への感謝に就いて述べたついでに云ふのだが、上述のやうなこれまでの私の幸運は、全く神の助けによるもので、私は神に導かれて自分の處世術を見出し、成功を贏ち得たのである。このことを私はうや／＼しく言つておきたい。そしてこの信念の故に、今までの幸福が將來も續くやうに、または他の人々と同様に私も運命の逆轉に逢ふやうな場合には、これに堪へることのできるやうに、神の好意が今後私の上に働くであらうと——神の意志を推し測つてはならぬけれども——信じるのである。今後の運命の轉變は、神のみの知り給ふところであるが、その神の御手にあつては、我等に苦難を下し給うたときでさへ、そは我等への祝福なのである。

私と同じやうに同族の逸話を集めることの好きな伯父がゐて、私にノートをくれたことがあつたが、私はそれを讀んでいろ／＼と先祖達の事を知つた。それによると私の先祖はノーサンプトンシヤのエクトンといふ村に、三十エーカーばかりの自由地フリーホルド(英法上の借地の一種で、期日の制限がない)をのの特長とする。我が永小作地に類する。持つて、少くとも三百年間は住んでゐたらしい。それ以前どのくらゐ居たものかは、はつきりしない。

この僅かばかりの地所では暮しを立てるに足りないので、傍ら鍛冶屋を仕事にしてゐた。この職業はずつと我が家に傳はつて伯父の代まで續き、長男は必ずこの商賣を仕込まれた。伯父も私の父も、その長男に關してはこの習慣を受け継いだのである。私はエクトンへ行つて戸籍簿を調べてみたが、一五五五年以後の結婚や埋葬の記録があるだけで、その以前の記録は保存されてゐ

なかつた。それでも私はそれによつて、自分がその五代後の末子の末子だといふことが分つた。私の祖父トマスは一五九八年の生れでエクトンに住んでゐたが、年をとつて家業ができなくなつてから、オックスフォードシャのバンベリにゐた二番目の息子ジョンの家に隠居した。このジョンの處で私の父は年期奉公をしたのである。ジョン伯父はこの地で死んでこの地に葬られてゐる。私達は一七五八年にその墓に詣でたことがある。祖父の長男のトマスはエクトンの家に住んでゐたが、地所とともにこれを一人娘に残した。この娘はウェリンバロのフィッシュヤといふ男を夫に迎へてゐたが、後、家も土地も現在の領主アイステッド氏に賣却してしまつた。祖父には四人の息子があつてそれ／＼成人した、即ちトマス、ジョン、ベンジャミン及びジョサイアである。書類が手許にないから、覚えてゐるだけ話すことにしよう。私の留守中に書類が無くなつてゐなければ、それを讀むともつといろ／＼分るはずだ。

一番年上の伯父トマスは父の手許で鍛冶を仕込まれたが、利發な性質で、當時同教區きつての有力者だつた郷士パーマーといふ人に弟たちともども勵まされて學問をしたので、辯護士の資格をとることができ、郡中でもなか／＼の人物になつた。彼はいつでもノーサンプトンの郡及び町、並に自分の居村の公共事業の主唱者で、これに就いてはいろ／＼話が傳はつてゐる。彼はまたハリファックス卿にたいそう目をかけられ、ひいきにしてもらつた。一七〇二年一月六日、私の生れるきつかり四年前に伯父は死んだ。老人達の話してくれたこの伯父の性格が、お前の見た私の

性格にそつくりだといふので、非常に奇妙なことのやうにお前が驚いたことがあつたね。

「もしも伯父さんが四年後の同じ日に亡くなつたのなら、」とお前は言つたものだ。「人はそれこそ生れ變りだと思ふでせう。」

次の伯父のジョンは羊毛だかの染物屋になつた。ベンジャミンはロンドンで年期奉公をして絹染職人になつたが、なか／＼器用な人だつた。私の子供の頃ボストンの父の家に来て數年間一緒に暮したことがある。父とは殊のほか仲が好かつた。私の名はこの伯父から貰つたのである。彼は非常に長命であつた。死んだ時には友達に宛てた即興風の詩の原稿を四折判で二冊も遺してゐた。彼はまた我流の速記術を案出して、私にも教へてくれたものだ。練習をしないので、今では私は忘れてしまつたが、また大變信心深い人で、立派な牧師の説教には熱心に出席し、例の速記術でこれを筆記し、それがたまつて數卷の説教集ができてゐた。

彼はまた大の政治ファンで彼の地位としては度を越してゐるほどであつた。私は先頃ロンドンで、この伯父が蒐集した、一六四一年から一七一七年に至る公共問題に關する主要な政治上のパンフレットのコレクションを手に入れた。番號を調べてみると脱落したものも多いはずなのだが、それでも二折判で八冊、四折判と八折判で二十冊も残つてゐる。これはある古本屋が見つけて、私のところへ持ちこんだもので、私はこの本屋から本を買ひつけてゐたものだから本屋には私の名前が分つてゐたのだ。五十年ばかり前アメリカへ渡る時に伯父はこのコレクションをロンドン

へ残して行つたものらしい。欄外には所々に伯父の書入れがある。この伯父の孫サミュエル・フランクリンは現にボストンに住んでゐる。

先祖達の一家は早くから新教を奉じてゐた。メリー女王の治世中は新教徒はカトリック教に反對するといふかどで、屢々弾壓を受ける危険があつたのだが、祖先達は新教徒で通して來た。家には英語の聖書が一冊あつたが、安全に隠しておくために、開いたまゝ、組合せ床几の下側のカヴァーの中へ紐で結びつけてあつた。曾祖父が家族のものに讀んでやらうとする時には、その床几を膝の上へ載せて、紐の下で頁をめくるのである。子供達のうち一人が戸口に立つて、送達吏(Anaportor, 宗)の見張りをする。さあ來たと言へば、椅子はもとのやうにひつくり返され、聖書は(教裁判所の役人)の通しの下に隠れてしまふといふ仕組みである。私はこの話をベンジャミン伯父から聞いた。家族の者はチャールズ二世朝の末頃まではみんなイングランド教會に屬してゐたが、その頃數名の牧師が非國教主義のため放逐された事件があり、彼等はノーサンプトンシャで祕密集會を開いてゐたが、ベンジャミン伯父と私の父ジョサイアは彼等に歸依して、終生變らなかつた。家族中の他の者は依然監督教會に残つた。

私の父は若くして結婚し、一六八五年頃妻と三兒とを携へてニュー・イングランドに移住した。その頃は祕密集會は法律で禁止せられ、また集會中妨害をうける事も度々だつたので、父の知人中の重立つた人々がニュー・イングランドへ移住することに決め、父も説得されて一緒に行くこ

とにしたのである。向ふへ行けば禮拜も自由に出来るといふ考へだつたのだ。移住後父の最初の妻の腹から更に四人、二度目の妻の腹からまた十人——總計十七人の子が出来た。その中の十三人が、成人して結婚した後、父をめぐつて食卓に向つてゐたのを私は覚えてゐる。私は男の子のうちでは一番の末つ子で、妹二人を除けば子供の中の末つ子でもあつた。私はニュー・イングランドのボストンに生れた。母は父の後妻で、アバイア・フォルジャーと言ひ、ピーター・フォルジャーの娘である。この人はニュー・イングランドの最初の移住者の一人で「Magnalia Christi Americana」(アメリカに於けるキリストの奇蹟の義、アメ)と題するニュー・イングランド宗敎史の中に、著者 Cotton Mather (Text-1733, ボストンのピューリタン派牧師、ハーヴァード大學を出て) が「篤信にして學識ある英人」——言葉は違つてゐたかも知れないが——と讃辭を述べてゐる人である。彼は數冊の小隨感録を物したさうであるが、印刷されたものはそのうちの一つだけで、それは數年前私も見た覚えがある。一六七五年に書かれたもので、當時の人々の趣味に従つて流行唄風に作られ、州政府に宛ててあり、再浸禮派やクエーカー教徒や、その他迫害を蒙つてゐる諸宗派のために信敎の自由を主張してゐる。彼は同州を襲つたインディアン戦争その他の災禍はこの迫害のために起つたもので、かやうな非道な罪を罰するために下された神の裁きの手であるから、あまりにも仁慈の念に反するこれらの法律は直ちに廢止すべきであると勸告してゐる。この一篇は雄々しい自由の精神と快い眞率さをもつて書かれてゐると思ふ。前の節は忘れてしまつたが、六行だけ

は覚えてゐる。その意味は、自分の論難は善意から出づるものであるから、自分が筆者であることを知られてもかまはぬといふのであつた。

誹謗の徒と呼ぶるゝは

まことに我がいとふところ

されば我が住まふシャーボンの町ゆ

我が名をこゝに記さんとす

悪意なき君がまことの友

そはピーター・フォルジャー

私の兄達はみんないろ／＼の職業の年期奉公に出された。私は八歳の時古文を教へる學校へ上つた。父は私を自分の息子の十分の一税(教會、僧侶の費用に當てるための物税、收穫の十分の一を納めるもの。フランクリンは恰も十人の息子の末子であつた。)として、神に仕へさせる考へだつたのである。私は字を覺えることがとても早くて、字の讀めなかつた時の覺えがないほど小さい時から讀むことが出来たし、父の友人達も皆この子はきつと立派な學者になるだらうと云つてゐたので、父も意氣込んでこんな目的をたてたのである。これにはベンジャミン伯父も賛成で、もし速記術が習ひたいなら自分が速記した説教集をやるから練習するがよいと云つてくれた。併し私がこの學校に通つたのは一年足らずの間であつた。その間に私はクラス

の中ほどから首席に進み、更に上のクラスに移され、その年の終りには第三年級にあげられることになつてゐた。

併し父は大勢の家族を抱へてゐたので、やすやすと高等教育の費用を出すことはできなかつた。それに、これは私のあるところで友達にも話したことだが、牧師になる教育をしてみても牧師といふものが大して望みのある職業ではないとも父は考へたので、最初の考へを捨て私に古文學校を退學させて、當時名高かつたジョージ・ブラウンウエルの讀み書き算術の學校へ入れた。この人は有能な先生で、學校は榮えてゐたし、教へ方はいかにも平易で勵みのつく遣り方だつた。おかげで字を書くことは間もなく大分上達したが、算術の方は一向うまくならなかつた。十の歳とには私は學校を退いて父の商賣を手傳ふことになつた。その商賣といふのは蠟燭と石鹼の製造で、これは父の本職ではなく、ニュー・イングランドへ來てから、もとからの染物屋では需要が少くて家族が養へないので、新しく始めたのであつた。従つて私のする仕事は、蠟燭の芯を切つたり、蠟燭の型に蠟を溶かしこんだり、店番をしたり、使ひ走りに行つたりなどであつた。

私はこの商賣が嫌ひで、船乗りになりたくて仕方がなかつたのだが、これには父が反對だつた。併し家が海邊なので、私は始終海へ出て遊んでゐた。泳ぐことも上手になり、ボートを操ることも覺えた。他の少年達と一緒に乗つたりする時は大抵私が指圖をするやうになり、とりわけ何か冒険でもやる時はさうだつた。その他の時でも大方私がお山の大将で、時にはみんなをひどい目

に逢はせることもあつた。その一例を述べよう。それを見ると、當時はまだ正しくはやれなかつたが、小さい時から私には公共的な企業精神があつたことが分るのである。水車池に續いて潮沼があつて、潮が差してくると、私達はその岸へ行つて鱒魚を釣つたものだが、始終渡り歩いてゐるうちに其處がまるで泥沼のやうになつた。そこで私はお臺場を築いてその上に立つやうにしようぢやないかと言ひ出して、山のやうに積んであつた石材を仲間の者に指し示した。それは沼の傍に家を新築するために積んであつたのだが、私達の目的には詭向きだつた。そこで夕方大工達が歸ると、私は遊び仲間を大勢呼び集めた。私達は澤山の蟻のやうに熱心に働いた。時には一つの石に二人も三人もかゝつて、とう／＼みんな運んでしまつて、小さなお臺場が出来上つた。次の朝になると大工達は石が無くなつてしまつて、お臺場が出来てゐるのを見てびっくりした。誰が運んだのだといふ詮議になり、私達だといふことが分つた。みんな小言をいはれ、めい／＼父親に叱られた。私は自分等のしたことは役に立つことだと言ひ張つたが、父は正直にしたことでなければほんとに役に立つものではないと諭した。

父がどんな人柄だつたか話さねばなるまい。父は立派な體格の人で、背は中背、よく均齊がとれて、とても逞ましかつた。なか／＼畫が上手で、音楽も多少はやれた。朗々と氣持のよい聲だつたので、一日の仕事が終つて、よくヴァイオリンを弾きながら歌ふ時などは、聽いてゐて惚々する位だつた。機械類の知識もいくらかあり、時に應じてずるぶん器用にひとの商賣道具もいぢつたものだ。併し一番優れた點は、個人的な問題でも或は公共の問題でも、何か面倒なことが起つた場合に、健全な理解力を持ち堅實な判断を下すといふことだつた。なるほど父は公共の仕事に携はつたことはなかつた。大勢の家族を教育しなければならぬし、暮し向は樂ではなかつたから、いつも自分の商賣にかゝりきりだつたのである。けれども町の有力者達が度々やつて来て、公共の問題や父の屬してゐる教會の事などに就いて父の意見を求め、その判断と勸告に大いに敬意を拂つてゐたのを私はよく記憶してゐる。

父はまた個人の問題で面倒な事が起つた場合にも相談を受けることが多かつた。争つてゐる兩當事者の仲裁役に引張り出されることも度々だつた。また食事の時はできるだけ賢い友達や近所の人を招いて話すことが好きで、さういふ時には、いつも子供達の心を高めるやうな賢い有益な話題を選んで話し始めるやうに氣をつけてゐた。かういふ方法で父は私達の注意を善い、正しい、また分別のある處世の道はどういふものかといふ點に向け、卓上の食物のことは、料理の上手下手、味の良し悪し、旬しゆんのものであるかどうか、同じ種類の他のあれやこれやに比べて優つてゐるか劣つてゐるか、そんな事は殆ど氣にしないやうにしたのである。かういふ風にこんなことには全く氣を使はずに育つたので、私はどんな食物が眼の前に並べられよつとどうでもよいやうになつた。實際今でも食事をして二三時間も経てば何を食つたのやら覺えがないくらゐだ。旅行に出て、連れの方達が、平生の美食のために奢つた味覺と食慾を満足させるやうな食物がな

いので、すつかりしよげてゐるやうな場合に、この習慣は大そう好都合だつた。

母も同様に立派な體格で、十人の子供はみんな自分の乳で育てた。死ぬ時の病氣の外は、父も母も病氣で臥つたといふことがなかつた。父は八十九歳で、母は八十五歳で亡くなつた。二人はポストーンに合葬されてゐるが、私は數年前その墓に大理石の碑を建て、次のやうに銘を刻ませた。

ジョサイア・フランクリンと
その妻アバイア　ここに眠る

彼等はいと睦まじき夫婦として

五十五年をともに送りぬ

財産もなく収入よき仕事もなかりしかど

不斷の勞働と誠實なる勤勉もて

(神のみ恵によりて)

數多き家族を安らかに過ぎしめき

十三人の子、七人の孫を育てては

人の憂むるところとなれり

下巻 40頁 - 17頁



小仕事をあげるやうにしよう。」

老紳士はその新しい印刷屋へ一緒に行つてあげようと言ひ出した。そしてその主人に會つた時、ブラッドフォードは言つた。

「今日は。あなたに引合せようと思つて、あなたの商賣の若い人を連れて來ましたよ。きつとそんな人がいると思つてね。」

主人は二三質問したり、ステッキ（植字架）を渡して仕事振りを見たりしてから、今は別段して貰ふこともないが、すぐに雇ふやうにしようと言つた。彼は老ブラッドフォードには會つたことがないので、自分に好意を持つてゐる町の人だらうと考へ、現在の計畫や將來の見込みなどを話し始めた。やがては印刷の仕事の大部分は自分の手に收めるつもりだとキーマーがいふのを聞くと、ブラッドフォードは（自分も一軒の印刷屋の父親であることは嘸氣にも出さず）、巧みに質問したり、一寸した疑問を挿んだりなどして、彼の計畫や、頼りにしてゐる後援者のことや、又どんな風によつて行くつもりかなど、すつかり喋らせてしまつた。傍に立つて始終を聞いてゐた私は、一方は老獪な古強者で、片方は全くの新米だとすぐに見てとつた。ブラッドフォードは私をキーマーの處に残して辭去したが、後であの老人が誰だか話してやつたら、キーマーはすつかり仰天してゐた。

この印刷所には、古びた傷んだ印刷機と、小さな磨り減らした活字の一揃ひがあるだけだった。その活字を主人自身が使つて、先に述べたアーキーラ・ローズの挽歌を組んでゐた。ローズは聰明な青年で、人柄も立派だったし町中で大層尊敬され、州會の書記を勤めてゐた。詩もなかなか上手だった。キーマーも亦詩を作つたが、頗る面白くない詩であつた。彼は詩を書いたとは言へない。といふのは、彼のやり方は、頭の中で詩ができると、直ちに活字に組んでしまふのだつたから。草稿はないし、ケースも一對あるだけだし、それにその挽歌には多分活字はみんないるのだから、誰も彼をすけるわけにはゆかなかつた。私は印刷機を調整して動くやうにした。キーマーはこの印刷機を使つたことがなく、また印刷機のことは何も知らなかつた。私は彼がその挽歌を組み終りさへすれば、来て印刷しようとして約束してブラッドフォードの家に歸つた。ブラッドフォードは當座の小さな仕事をあてがつてくれ、私は彼の家に寝泊りし、賄もしてもらつた。數日後にはキーマーは挽歌を印刷するために私を呼びよこした。その時にはケースももう一對出來てをり、鑿刻するパンフレットもあつたので、キーマーは私にその仕事をさせたのである。

この二人の印刷屋の仕事の腕前は、頗る怪しいものだつた。ブラッドフォードは印刷屋の修業をしたのではなかつたし、非常に無學でもあつた。キーマーの方は、いくらか學問はあつたが、ただ植字が出来るだけで、印刷のことはちつとも知らなかつた。彼は例のフランスの豫言者の一人で、(その時)には彼はどれか特定の宗教を信じるやうなことは言はず、時に應じてさまざまの宗教のことを言ひ出すのであつた。非常に世情に疎く、後で氣づいたことだが、その性質には大分無頼なところもあつた。彼は私が彼のところで働いてゐる癖に、ブラッドフォードの家に寝起きしてゐるのが、氣にいらなかつた。彼は實際一戸を構へてはゐるが、家具がなくて私を置くわけにゆかないので、先に述べたリード氏の家に私の下宿を見つけてくれた。この人は彼の家主だつたのである。私の衣類のトランクはこの頃にはもう届いてゐたから、リード嬢の目にも、最初に通りを歩きながら巻パンを頬張つてゐるのを見つけた時よりは、私の身形も幾分立派に映つたはずである。

やがて讀書好きの町の若者達の間にいくらか知人が出來、彼等と私は頗る愉快に夜の時間を過した。私は勤勉と節儉とで金を残した。私は自分の生活に頗る満足し、ボストンのことは出來るだけ忘れて暮した。友達のコリンズの外には自分の居所を知らさうとも思はなかつた。コリンズは祕密を知つてゐるが、忠實にそれを守つてくれた。ところがとうとう或る事件が起つて、意外に早く私は家へ歸らねばならぬ仕儀になつた。私にはロバート・ホームズといふ義兄があつた。彼はボストン、デラウェア間の交易に従つてゐる一帆船の船長で、フィラデルフィヤの下流四十哩のニュー・キャッスルに住んでゐるが、私のことを聞いて手紙をよこし、突然に私が出奔したのでボストンの親類や友達が悲しんでゐることを述べ、みんな私に好意をもつてゐると保證し、もし私が歸りさへすれば萬事氣にいるやうになるに違ひないからと、熱心に歸郷を勧めて來た。

私は彼の手紙に返事を書いてその忠告を謝したが、同時にポストンを去つたのも彼が思つてゐるほど私が悪かつたからではないことがよく呑みこめるやうに、事細かに理由を述べてやつた。

この州の知事サー・ウィリアム・キースはこの時ニュー・キャッスルにゐて、私の手紙が届いた時にたま／＼ホームズ船長と一緒にゐたので、船長は私のことを知事に話して手紙を見せた。知事はそれを読み、私の年齢を聞いてびっくりしたさうである。見込みのある青年のやうだから、激勵してやらなければならぬ。フィラデルフィアの印刷屋は貧弱極まるものだから、もし此處で開業すれば必ず成功するだらう。彼としても官公署の仕事をとつてやつたり、その他出来るだけ引立ててやるつもりだ。彼はかういふ風に言つたさうだ。これは後にポストンで義兄のホームズに聞いたことで、その時はまだ私は何も知るはずはなかつた。さて或る日キーマーと二人で窓際で働いてゐると、立派な身なりをした知事と今一人の紳士(それはデラウェア州ニュー・キャッスルのフレンチ大佐であつた)が、通りを眞直ぐに横ぎつて我々の家へやつて来るのが見えた。やがて戸口で訪ふ聲が聞えた。

キーマーは自分のお客だと思ひ、すぐさま馳け下りた。ところが知事は私の在否を訊ね、二階へ上つて来て、私がすつかり面喰つたほど、慇懃鄭重な調子でいろ／＼挨拶の言葉を並べ、私と知合ひになりたいといふ希望を述べた。そして最初にこの土地へ来た時、どうして知らしてくれなかつたのかと親切に私を非難し、自分はフレンチ大佐と上等のマデイラ酒(白葡萄酒の一種)を一ぱいやりに行くところであるが、その料理屋まで附合つてくれまいかと言つた。私は少からず驚いた。キーマーもびつくりして眼をぱちくりさせてみた。とにかく私は知事とフレンチ大佐に連れられて三丁目の角にある一料理店へ行つた。マデイラ酒を飲みながら、知事は開業するやうに勧めた。彼は成功の見込みの多いことを述べ、自分もフレンチ大佐も、兩州の州廳の仕事のとれるやうに、力も添へ便宜も計らうと言つてくれた。開業する場合、父が援助してくれるかどうか怪しいと私が述べると、サー・ウィリアムは、お父さん宛に手紙を書いて、開業の利益をいろいろ説明してあげよう、さうすればお父さんもきつと同意されるだらうと言つた。かういふわけで、私は便船があり次第父宛の知事の手紙を貰つて、ポストンへ歸ることに話がきまつた。尤もこの事は當分秘密にするはずで、私は今まで通り、キーマーのところでは働いてゐた。知事は時々一緒に飯を食べようといつて呼びによこした。私はこれを頗る光榮に感じたものである。殊に知事が非常に愛想よく、心安く、また親しげな調子で話してくれたので。

一七二四年の四月の末頃ポストン行きの一隻の小船があつた。私は友達に會ひに行くからと言つて、キーマーに暇乞ひをした。知事は長い手紙を書いてくれて、いろ／＼私のことを父に譽めそやし、フィラデルフィアで開業すれば、きつと財産を拵へることができると極力開業計畫を勧めてくれた。灣を下つてゐる途中、船は淺瀬に觸れて漏口が出来た。そのため航海中大騒ぎになり、私達は殆ど間なしにポンプで水を汲み出さねばならなかつた。私も順番でその仕事をした。

併し二週間ぐらゐかゝつて、どうやら無事にポストンへ着いた。これまで私は七箇月間ポストンを離れ、その間友人達も私の便りは何も聞いてゐなかつた。といふのは、兄のホームズはまだ歸つてゐなかつたし、別に私のことでも手紙を出してゐなかつたから。私がひよつくり姿を見せたので家の者はびつくりしてゐたが、兄のほかは、みんな私に會つたのを大そう喜んで歓迎してくれた。私は兄に會ひに印刷所へ行つた。私は兄のところへ奉公してゐた頃に比べると立派な服装をしてゐた。頭から足の先まで上品な新しいものづくめで、懐中時計を下げ、ポケットには銀貨で五ポンドぐらゐはいつてゐた。兄は一向打ち解けてくれず、じろく私を見上げ見下ろしてから、また仕事に取り掛つた。

日傭職人達は、私が何處へ行つてゐたのか、それはどんな國で、私の氣にいつたかどうかなどといろく聞きたがつた。私はその土地柄や、そこで過した幸福な生活を褒めたて、是非ともまた歸るつもりだと話した。職人の一人があちらではどんな金が使はれてゐるかと言つたので、私は一つかみの銀貨をとり出してみんなの前へ並べて見せた。ポストンの金は紙幣だつたから、それは彼等の見馴れぬ珍しい見世物のやうなものであつた。この機會に懐中時計も見せてやつた。そして最後に彼等に一ドルの飲み代をやつてから暇を告げた。兄は相變らずむつつりと佛頂面をしてゐた。私のこの訪問は兄をひどく怒らせた。といふのは、暫く經つてからのことだが、母が仲直りの話を持ち出して、兄弟仲のいゝところを見せて欲しい、そして今後は兄弟らしく暮してくれるやうにと兄に頼んだ時に、兄は、みんなのゐる前で、あんなやり方で侮辱したものを、許すことも忘れることも出来るものかと答へたのであつた。しかし、この點では兄の方が誤解したのである。

父は知事の手紙を受取つてかなり驚いてゐたが、暫くはその事に就いては何も言はなかつた。ホームズ船長が歸つて來た時に、父は手紙を見せて、サー・ウィリアム・キースといふ人を知つてゐるかどうか、どんな人物かと訊ねた。成年に達するのにまだ三年もある若者が開業したらいいなどと考へるのだから、きつと分別の足りない人に違ひないと附け加へながら。ホームズはこの計畫の成立するやう精々執り成してくれたが、父は斷然反對で、とう／＼きつぱりと斷つてしまつた。父はサー・ウィリアムに鄭重な返事を書いて、私が誠に懇切な愛顧を受けたことに對して謝辭を述べ、併しながら、父の意見としては、準備のために相當な費用を必要とするそんな重大な事業の經營を委ねるには、私はまだ若過ぎるから、今のところ、援助して獨立させる氣はないと認めたのである。

古い仲間のコリンズは郵便局の事務員であつたが、私から新しい州の話聞いてすつかり氣に入り、自分も出掛けようと心を決めた。そして私が父の決斷を待つてゐるうちに、一足先に陸路ロード・アイランドへ出發した。藏書は残して行つた。それは數學と物理學の書物のかなりなコレクションで、私の藏書と一緒に、彼が待つてゐるはずのニュー・ヨークへ、後から私が持つてゆ

く約束だつた。

父はサー・ウィリアムの提議には賛成しなかつたけれども、それでも、私の住んでゐる土地のこんな名士から、こんなに立派な推薦状を貰ふことが出来たことや、またよく働きお金の遣ひ方に氣をつけて、ほんの僅かの期間に、ずるぶん立派に身形を整へたりしたことは喜んでくれた。それに、兄との間は仲直りの見込みもなかつたので、父も私がフィラデルフィヤに歸ることに同意した。そして、その土地の人々に慇懃に振舞つて一般の尊敬を集めるやうに努め、人を譏つたり皮肉つたりするのが私の悪い癖だから、慎むやうにと戒めた。絶えず勤勉に働き、よく分別して節約すれば、二十一歳になるまでには、開業するだけのものは残せるだらうし、もう少しで開業が出来るといふところまで漕ぎつければ、残りわしが助けてやらうとも言つた。今度は父母の同意と祝福を得て、再びニュー・ヨーク行きの船に乗つた時に、私が父母から得たものは、これだけだつたわけである。父や母の愛情の印しとしての幾つかの小さな贈り物を除けば。

船はロード・アイランドのニュー・ポートに寄航したので、私は兄のジョンを訪ねた。兄は結婚して數年來こゝに住んでゐた。彼は何時も私を可愛がつてゐたので、大喜びで私を迎へてくれた。兄の友達でヴァーノンといふ人がゐたが、この人はペンシルヴェニアに三十五ポンド位の貸金を持つてゐた。その金を代りに受取つてくれるやうに、そして何に使ふか指圖をするまで預つてゐてくれるやうにと私は頼まれた。そして彼はその金を受取るために指圖書を渡した。このことが後にいろ／＼心配の種となつた。

ニュー・ポートで幾人かの客が乗り込んだが、その中に連だつて旅をしてゐる二人の若い女と、召使を二三人連れた刀自風のよく氣のつくクェーカー教の婦人がゐた。多分私が少しばかり彼女の世話をして親切な氣立を見せたので、彼女は私に好感を抱いたのだらう。といふのは、私と二人連れの女とが日毎に親しくなり、それも女の方から進んで近づいてくるらしいのを見ると、彼女は私を物蔭へ呼んで言つた。

「若い方、あなたはお連れの友達もいらつしやらないやうですし、まだ世の中のことや、若い者を取り巻いてゐる様々の危険なわなのことなどはあまり御存知ないやうですから、わたしは心配なのです。請合つてもよいことですが、あの人達は大変よくない婦人ですよ。あの人達の振舞ひを見れば分ることです。御用心遊ばさぬと、あの人達はあなたを何かひどい目に會はせませう。あなたはあの人達の素性を御存知ありません。わたしはあなたのお仕合せが誠に氣遣はしいので申上げるのですが、あの人達とはお附合ひならぬ方がよろしうございませう。」

女たちのことを、彼女が思つてゐるほど私が悪く思つてゐないのを見ると、彼女は自分で見たり聞いたりした幾つかの例を擧げた。それらは私の氣がつかかなかつたことであつた。そして私も今は彼女の言葉はほんたうだと信じた。私は彼女の親切な忠告に感謝し、それに従はうと約束した。ニュー・ヨークに着くと女達は住居を教へ、會ひに来るやうに誘つたが、私は行くことを止

めた。これは仕合せなことであつた。といふのは、翌る日船長は一本の銀の匙と、そのほか二三の物が船長室から盗みとられてゐることを發見したが、女達が淫賣婦だといふことを知つてゐたので、その住居を搜索する許可を受け、盗まれた品々を見つけ出し、どろぼうを處罰して貰つたのである。この航海の途中、船は暗礁に觸れながら難破を免れたのであつたが、この婦人達の難を免れたことは、私にとつてはいつそう重大なことであつた。

ニュー・ヨークには私よりも少し前に着いた友人のコリンズがゐた。私達は子供の時から仲好しで、同じ本を一緒になつて讀んだものだ。彼の方は讀書や研究の時間をたつぷり持つてゐたし、數學には驚くべき才能を持つてもゐたので、この方面ではずつと私より優れてゐた。私がボストンにゐた間は、人と喋つたりする暇な時間は、殆ど彼と一緒に過したのであつた。彼は酒を飲まない眞面目な、また勤勉な青年で、學問があるので牧師達や、その他の紳士連からも大變尊重せられ、世間に立つて一廉の人物になるだらうと思はれてゐた。ところが私の留守の間に、彼はブランデーを飲む癖がついて、ニュー・ヨークへ到着してからも毎日酔つぱらひ、大層贅澤な眞似をしてゐたことが、彼自身の話からも、他の人の話からも分つたのである。彼はまた博奕をやつて金をすつたので、私は彼の宿料を始末し、途中の旅費やフィラデルフィアの滞在費も支拂はねばならなくなつた。これは私には大きな重荷となつた。

當時ニュー・ヨーク州の知事だつたパーネット(パーネット監督の子)は、船長から乗客の一人が大部の書物を積んで來たと聞いて、私を連れて來てくれるやうに船長に頼んだ。私は彼のところに伺候した。もしコリンズが酔つてゐなかつたら彼も連れて行つただらう。知事は大變鄭重にもてなし、自分の書庫を見せてくれたが、それは立派なものであつた。私達は書物や作家のことを、ずるぶんと話し合つた。この人が私に知遇を與へてくれた第二の知事である。それは私のやうな貧乏な少年にとつては非常に嬉しいことであつた。

私達はフィラデルフィアに進んだ。途中私はヴァーノンの金を受取つたが、これがなかつたら、私達は旅を終へることも出来なかつたらう。コリンズはどこかの帳場に勤めようと思つてゐたが、息が酒臭いためか、或は擧動のためか、酒飲みと分ると見え、推薦状は何通か持つてゐたのだが、どの求職にも成功しないで、相變らず私と同じ家に、私の費用でころ／＼して飯を食つてゐた。私がヴァーノンの金を持つてると知つてゐるので、いつも勤めさへしたら直ぐ返すからと約束しては、私から金を借りてゐた。しまひには、あんまり澤山借りられたので、もしヴァーノンから送つてくれと言はれたらどうしようかと私は思ひ悩んだのであつた。

彼は相變らず飲み續け、そのために二人の間に爭論が起ることもあつた。少し飲むと彼は怒りつぽくなつたからだ。ある時數人の若者達とデラウエヤ川 (Delaware, 米國東部にある河。ニュー・ジャージー州の西境を流れ、フィラデルフィア、トレントン等の都會を過ぎて同名の灣に注ぐ。流程四百九十浬。) にボートを浮べてゐると、順番が來たのに、彼は漕ぐのは厭だと言ひ出した。「僕は漕いで貰つて歸るんだ。」と彼は言つた。

「君のために誰が漕ぐものか。」と私は言った。
 「君達は漕がなくちやいけないよ、」彼は言った、「でなければ、お氣にいるまで夜つびて水上にゐるんだね。」

「漕がうよ、漕いだつていゝぢやないか。」他の者達は、かう言ったが、私は彼の舉動に對しては他にも氣持を悪くしてゐたので、飽くまでも反對した。すると彼は私に漕がせるか、でなければ水の中へ放りこむと毒づいて、腰掛梁を踏んで私に近づいて來た。彼が私に迫つて打ちかゝつて來た時、私はいきなり頭を彼の股の間へ突っこみ、ぐつと體を起して、眞逆様に河の中へ投げ飛ばした。私は彼が泳ぎの達者なことはよく知つてゐたから、ちつとも心配はしなかつた。それどころかボートに手をかけようと彼が向き直つて來る前に、私達は二三本漕いでは彼の届かぬところへボートを廻した。そして彼がボートに近づいてくる度に、何本か漕いではボートを引離し、どうだこれでも漕がぬか、と訊ねた。彼はじれて息もつまりさうになつてゐたが、頑固に漕ぐとは言はなかつた。とう／＼疲れ始めた様子なので、私達は彼をボートに引き上げ、びしよびしよに濡れたまゝ連れ歸つた。この事あつて以來、私達は殆ど一言も優しい言葉は交さなかつた。最後に、西印度のある船長で、バーベードーズ島の一紳士の息子たちのために家庭教師を探すことを頼まれてゐた人が彼に會つて、一緒にあちらへ行つて家庭教師にならないかと言つてくれた。彼は承諾した。私には、昔の金は最初の船料がけり次第送つてよと約束した。だが、私

はその後彼の便りは少しも聞かなかつた。

ヴァーノンの金について私が信義を破つたことは生涯の最初の大きな過ちの一つであつた。私はまだ若過ぎるから商賣をやるのは無理だといふ父の判断がそれほど間違つてゐないことはこれでも分るのである。併しサー・ウィリアムは父の手紙を讀むと、お父さんはあまり用心深すぎる、人間といふものは非常に違ひがあるもので、分別は必ずしも年とともに加はるものではなく、また若いからと言つて分別がないとも限らないと言つた。

「だが、お父さんが獨立させてくれる氣がないなら、私がさせてあげよう。イングランドから取り寄せねばならぬものの品目を書いてよこさない。私から註文することにしよう。お金は拂へるやうになつた時拂へばいい。私はこの土地に立派な印刷屋が欲しいと思つてゐるのだ。君ならきつと成功するだらう。」

この言葉にはいかにも誠實がこもつてゐるので、私は彼の言つたことに少しの疑ひも懐かなかつた。これまで私は獨立の話はフィラデルフィヤでは祕密にして來たが、尙さうしておくことにした。もし私が知事を當にしてゐるといふことが知れたら、多分彼をよく知つてゐる友達の誰かが、當にしないやうに忠告してくれただらう。後に聞いたところでは、彼は約束は氣前よくするがさつぱり守るつもりはない、さういふ人物であることは知れ渡つてゐたのだから。けれども、私から頼んだわけではなく、知事の方から氣前よく言ひ出してくれたことが本氣でないなどと

うして思ひ及ばう。私は彼を世界中でも一番いゝ人だと思ひこんでゐた。

私は小さな印刷所を開くに必要な物品目録を彼に差し出した。金額は私の計算では百ポンドばかりになつてゐた。それは彼の氣に入つたのだが、私がイングランドへ行つてその場で活字を選んだり、その他のものも品のいゝのを探すが利益ではあるまいかと私に訊ねた。

「さうすれば、」と彼は云つた、「あちらで知合ひも出来るし、圖書の販賣や文房具の取引關係を設定することも出来るだらう。」

それは有益だらうと私も同意した。

「では、」と知事は言つた、「アニス號で行くやうに用意をなさい。」

この船は年一回の定期船で、その頃ロンドン・フィラデルフィヤ間を定期に往來してゐた唯一の船であつた。併しアニス號の出帆までにはまだ數箇月あつたので、私はキーマーのところへ働き續けた。私はコリンズに借りられた金のことで非常に氣を揉み、ヴァーノンに催促されはせぬかとびく／＼ものであつたが、數年間はそんなこともなくて過ぎた。

前に言ひ落したが、初めてポストンからフィラデルフィヤへ來た船の中のことである。ブロック島沖へかゝつた時、風がなくなつたので、水夫たちが鱈釣りを始めて、ずる／＼と釣り上げた。その時までは私は生命のあるものは何も食べないといふ決心を守つてゐた。この時にも私は先生のトライアン流に、どんな魚でも魚を捕るのは一種の理由なき殺生だと考へてゐた。何故なら、

魚といふものは、殺されるのも當然だと思はれるやうな害を人間に加へたこともなければ、加へ得るものでもないからだ。この理窟は全く尤ものやうに思はれた。ところで以前には私は魚は大好物だつたから、魚がフライパンから揚げられると、その匂がどうもたまらないのである。暫くは私は自分の主義と欲望との間を行きつ戻りつしてゐたが、とう／＼、魚の腸はらわたを開いた時胃の中から小さな魚が出て來たのを思ひ出した。そこで私は考へた。

「お前たちが互に食ひ合つてゐるなら、私達がお前達を食つていけないわけはあるまい。」

そこで私は腹一ぱい鱈を食べ、その後は、時たま思ひ出したやうに菜食にかへるだけで、世人同様魚食を續けるやうになつた。理性のある動物であることは誠に好都合なことである。したいと思ふ事なら何にだつて理由を見つけることも、理窟をつけることも出来るのだから。

キーマーと私とは割合に仲良く打解けて暮し、なか／＼調子も合つてゐた。といふのは、彼は私が獨立するなどは夢にも思つてゐなかつたのだから。彼は若い時の熱情をまだ多分に持つてをり、議論好きであつた。そのために私達の間に度々論争が起つた。私は彼に對しても例のソクラテス論争法を使用し、屢々當面の問題とはまるでかけ離れてゐるやうに見える質問を出して彼をわなにかけ、だん／＼に論争點におびき寄せ、かうして彼が返事に困り自家撞着に苦しむやうに仕向けたものだ。しまひには彼は滑稽なほど用心深くなつて、極くありふれた質問でも、「そんな事を聞いて、どう推論しようといふのかね。」と訊ねてからでなければ、返事もしない程にな

つた。併しこのために彼は私の論争の才能を非常に高く買つて、自分は一宗派を開かうと計畫してゐるのだが、是非仲間になつて欲しいと言ひだした。彼が教義を説教し、私が論敵を論破しようといふのである。彼がやつて来て教義を説明するのを聞くと、馬鹿げた難題が幾つかあるので、私は自分にも多少は自分の流儀があり、それも入れるのでなければ反對だと言つた。

キーマーは髯を伸ばしつきりにしてゐた。モーゼの立法のどこかに「爾等その髯の先を切ることなかれ」とあるからである。同じ理由で、彼は第七日（土曜日のこと、安息日は通常日曜日である。ユダヤ人の風習では土曜日である。）の安息日を守つた。この二つの點は彼の教義の主要な點であつた。私はこの兩方とも嫌ひだつたが、肉食してはならぬといふ教義の採用を條件にしてこれに賛成をした。

「私の體格では、」と彼は云つた、「我慢が出来るかどうかわからない。」

私は大丈夫だ、肉食をやめれば體はもつとよくなるだらうと保證した。彼はつねづね大食家だつたから、いゝ加減ひもじがる場所を見て慰みにしようと思つたのである。彼は私も一緒にやるならやつてもよいと言つた。私もさうすることに、二人で三箇月の間續けた。私達の食物は近所の一婦人が材料を買つて来て、料理をし、きちん／＼と運んでくれるのであつた。

私はこの婦人に四十種の獸立表を渡し、彼女はそれに従つて適宜に調理したのであるが、それは魚肉も獸肉も鳥肉もはいつてゐなかつた。この氣紛れは、安く済む點で當時の自分には頗る好都合であつた。それは一週十八ペンスを超えることはなかつた。私はその後幾年も四旬齋の戒律

を最も嚴格に守り、四旬齋が来ると突然普通食を止め、四旬齋が済むとまた突然普通食にかへつたりしたが、少しも苦痛を感じなかつた。そこで思ふのだが、かやうな變化を行ふ場合には一步徐々にやるがよいといふ考へには、大して意味はないのである。私は愉快に續けて行つたが、キーマーは可哀さうにひどく參つて、この企てに飽きてしまひ、しきりと御馳走を食べたがつて、とう／＼焼豚を註文した。彼は私と二人の女友達を食事に招待したが、料理が食卓に運ばれるのが早過ぎたので、食べたくて我慢ができず、私達が行かないうちにすつかり平げてしまつた。

私はこの頃折にふれリード嬢の氣を引いてみた。私は彼女に非常な尊敬と愛情を抱いてゐたが、彼女の方でも私に對してさうだと思はれるふしがあつた。けれども私は長い船旅に出ようとしてゐるところではあるし、二人とも十八歳を出たばかりの若い者同志であるから、當分はあまり深入りさせぬやうにするのが賢いことだ、結婚などは、假にさうなるにしたところで、私が歸つて来て、望み通りに獨立して商賣を始めてからにした方がよいと、彼女の母は考へたのである。それに恐らく彼女は私が當にしてゐることが私自身が思ふほど當にはならぬとも考へたのだらう。

當時の私の重立つた知合ひはチャールズ・オズバン、ジョセフ・ウォットソン、それにジェームズ・ラルフ等で、いづれも讀書家であつた。最初の二人は町でも有名な公證人即ち證書作製人チャールズ・ブロックデンの書記で、いま一人はある商店の店員であつた。ウォットソンは敬虔で常識に富んだ眞正直な青年であつた。他の二人は寧ろ宗教上の主義などはいゝ加減の方で、殊

にラルフはコリンズ同様私の影響で動搖し、そのために彼等二人は私を惱ましたのであつた。オズバンは才氣もあり、率直淡泊且つ眞率で友達思ひであつたが、文學上のことになるに無闇に理窟をこねたがつた。ラルフは才人で、態度は溫雅、恐ろしく辯が立つた。私はこれ以上の辯舌家には會つたことがないやうに思ふ。二人とも詩がとても好きで、短篇を試作し始めてゐた。日曜日には私たちは一緒にスクールキル(今のセントニコラス、フィラデルフィアでデラウェア河に合する河)河岸の森に愉しい散歩をして、そこで代る代る書を読み、讀んだものに就いて話し合ふのであつた。

ラルフは全く詩作に身を捧げたいと考へてゐた。彼は詩を作ることが上手になり、それによつて財産を作ることさへできると思ひこんでゐた。最も偉大な詩人達でも、最初に書き始めた時には、自分と同じやうに多くの間違ひをしたに相違ないと思ふのであつた。オズバンはそんな考へを改めさせようと骨を折り、君には詩才はないとはつきりしたことを言ひ、習ひ覺えた商賣以外の事は考へぬやうにするがよいと忠告した。商賣の道ならば、資本はなくとも、よく働きもするし几帳面でもあるのだから、代理商に選ばれるやうにもなり、さうしてゐるうちには自分で商賣を始めるだけの資本もたまらうとも言つた。私としては、時折詩を作つて楽しみにするのは、文章に上達する手段として賛成だが、それ以上はいけないと考へた。

このことに就いて、ある時、この次に集まる時にめい／＼自作の詩を一篇づゝ持ち寄つて、互に意見を述べたり、批評したり、直したりしてみようぢやないかといふ話が出た。目的は用語と表現にあるので、物語を創作することなどは頭から考へないで、天帝の降臨を描いた詩篇第八章の翻譯を宿題にすることに話が決つた。さて集りの時が近づいたある日、ラルフが先づ私を訪ねて自分の作は出来たと告げた。私は急がしがつたのと、一向氣が乗らぬため何にも出来てゐないと話した。すると彼は自分の作品を示して私の意見を求めた。それは私にはなか／＼の出来栄えだと思はれたので、大いに褒めてやつた。

「さて、」と彼は言つた、「オズバンは僕のものだつたら、いゝ處があつても決して認めはしない。そして全くの妬みからあれこれとあらさがしをやるんだ。彼は君のことはさう妬んでゐるな。だから、この作を持つて行つて、自分のだと言つて出して欲しいんだ。僕は暇がなかつたからといふことにして何も出さぬことにする。さうして彼がどう評するかを聞かう。」

私は同意して、自分のらしく見えるやうに早速書き換へた。私達は會合した。ウォットソンの作品が朗讀された。それにはいゝところもあつたが、多くの缺點があつた。オズバンののが朗讀された。それはずつと優れてゐた。ラルフは公平な批評をし、若干の誤りを指摘したが、その美點は賞讃した。彼自身は何にも提出しなかつた。さて私はわざとためらつて、時間が十分なくて直すことができなかつたのだから勘辨して欲しいと頼んだ。併し言譯は許されるはずもなく、私は出さなければならなかつた。それは繰返し朗讀された。ウォットソンとオズバンは競争を斷念して、一緒になつて褒めたてた。ラルフだけは若干の批評を試

み、幾箇所かの修正を提議したが、私は自分の原文を辯護した。オズバンはラルフに峻烈に反対し、ラルフは詩を作ることもだが、批評するのは尙ほ下手だと私に話した。此の二人が家へ歸る途々、オズバンは一層はげしい調子で彼が私の作だと考へたものを褒めたて、先刻はお世辭を云つてゐると私に思はれるのが厭なので控へ目にしたのだと言つたさうである。

「だがフランクリンにあんな仕事ができると誰が想像できよう。」と彼は言つた、「あの描寫、あの筆力、あの情熱！ 原文よりも良くさへなつてゐる。ふだん喋る時には彼は言葉を選ぶことなどは知らないやうに見える。訥辯だし、大間違ひもやる。それでゐて、あゝ、彼の書くものときたらどうだ！」

その次に集つた時、ラルフは私達の計略を打ち明け、オズバンは笑ひものにされた。

この事あつて以來、ラルフは詩人になる決心を固めた。私は思ひ切るやう百方説得したが、ポープが彼の野心を無くしてしまふまでは、彼は下手な詩を書きつゞけた。けれども彼は散文家としては相當なものになつた*。

* James Kalph は政治・歴史評論家としては相當な人物になり、政府から年金を貰つたりした。詩集「ソニー」中で彼はスウィフトやポープの悪口を云つたので、ポープは早速「ダンシアド」の中でラルフをやつつけた。(譯者)

彼については後に尙述べる。併しほかの二人については述べる機會がないかも知れないから、こゝで述べておかう。ウォットソンは數年後私の腕に抱かれて死んだ。私達の一團中一番いゝ人物であつたから私達は深く悼み歎いた。オズバンは西印度に渡航し、その地で著名の辯護士となつて財産を作つたが、若死した。私たちは、先に死んだ方が、できるならば、親しく他方を訪れて、死後の國の事情を告げ知らせるやうにしようと固い約束をしてゐたが、彼はその約束を實行しなかつた。

知事は私と會談するのが好きと見え、屢々自分の家に私を招き、その度に彼が私を獨立させることは決つたことのやうに話した。私は印刷機や活字や紙などを購入するに必要な資金を引出すための信用狀のほか、彼の知人宛の推薦狀を幾通も持つて行くはずであつた。これらの手紙はいづれ書いておくから、その都度取りに来るやうにと言はれた。併しやつて行くとまたこの次にと言はれるのであつた。さうかうしてゐるうちに、愈々何度も延期されてゐた船の出帆の時が來た。そこで暇乞ひをし手紙を受取るために私が訪ねて行くと、祕書のベアド博士がやつて來て云ふには、知事は書き物でも急がしい、併し船よりも先にニュー・キャッスルへ下つて行き、そこで手紙を私に渡さうとのことであつた。

ラルフは結婚して子供が一人あつたが、私とこの航海を共にしようと決心してゐた。彼は取引關係を設定して、委託販賣の品を持ち歸る考へのやうに思はれた。併し、後で分つたことだが、彼は細君の身内のものに快からぬことがあつたので、細君を彼等のところに殘し、二度とアメリカへは歸らぬ考へだつたのである。私は友達に別れを告げ、リード嬢と約束を交して後、船でフイ

ラデルフィヤを出發した。船はニュー・キャッスルに投錨した。知事はこの地にゐたが、私が彼の宿所を訪れると、祕書をよこして言ふには、まことに残念だが、極めて重大な事務に係つてゐるのでお會ひすることができない、併し手紙は船へお届けする、恙ない航海とお早い歸國を心から祈る云々との挨拶である。私は多少當惑して船へ歸つたが、尙ほ疑念を懷いてはゐなかつた。

第三章 ロンドンの一年半

フィラデルフィヤの著名な辯護士アンドルー・ハミルトン氏が息子と共に同じ船に乗つてゐた。クエーカー教徒の商人デナム氏、メーリランドの鐵工場主オニナム及びラッセル氏なども一緒に、彼等は大きな上等船室をとつてゐた。だからラルフと私とは、下等船室の釣床で我慢する外なく、また同船中には知る人もなかつたので、私達は平凡な人間だと思はれてゐた。ところがハミルトン氏は息子（名はジェームズ、後に知事となつた）と一緒にニュー・キャッスルからフィラデルフィヤへ引き返した。ある差押へられた船の辯護をするために莫大な報酬で呼び返されたのである。さて船がいよいよ出ようとしてゐるところへ、フレンチ大佐が來たが、大佐が大そう鄭重に私を取扱つたので、私は人々の目に留まるやうになり、今は部屋が空いたからラルフと一緒に、上等船室の方へ來ないかと招かれた。そこで私達はそちらへ移つた。

フレンチ大佐は知事の書面を船へ持つて來たとのことだつたので、私は船長に會つて、自分が保管すべき手紙だから渡して欲しいと求めた。船長が云ふには、何も彼も一緒に袋に詰めこんであるから、今は取り出すことができない、併しイングラントへ着く前に選り出す折を作つてあげようとのこと、さしあたり私も我慢しなければならなかつた。私達は航海を續けた。船室では

打解けた交際を楽しみ、ハミルトン氏がうんと仕入れてゐた食物がすつかりお負けにいたりしたので、大きに口に榮耀をさせることもできた。この航海中にデナム氏と私とは交誼を結んだが、それは彼の生涯中變らなかつた。天氣の悪い時が多かつたので、かういふことを除いては、航海は楽しいものではなかつた。

船がイギリス海峽へはいつた時、船長は約束を守つて、知事の手紙を探すために袋を調べる機會を與へてくれた。私に託するものとして封筒に私の名前の書いてあるのが幾通かあつた。私はその筆蹟から約束の手紙だと思はれるのを六七通選びだした。殊にその一通は王室御用の印刷屋バスケットに、他の一通はある文房具商に宛ててあつたから、約束の手紙と思つたのである。一七二四年十二月二十四日私達はロンドンに着いた。私は最初の道順にあたるその文房具商を訪ね、キース知事からだと言つて手紙を渡した。

「私はそんな人は知りませんね、」と彼は云つたが、手紙を開いてみて、「おや、これはリドルスデンからだ。あの男は全くのならず者だといふことが最近私に分つたんだ。私はあんな男と關はり合はうとは思はないし、手紙なんぞ貰ひたくもない。」

そして手紙を私の手の中におくと、くるりと踵を返して私の傍を離れ、他の客に應對するために行つてしまつた。私はこれらの手紙が知事でないと思つてびつくりした。それからいろ／＼事情を思ひ合せてみてゐるうちに、彼の誠實が疑はしくなつて來た。私は友人のデナム氏に會つて事情をすつかり打ち明けた。彼はキースの人物を話してくれ、彼が私のために手紙を書くなんてことは、全くあり得ない、彼を知つてゐる人なら一人だつて信用する人はないと言つた。そして、彼の言葉通りに云へば、與へるべき信用を持たない知事が信用状を書くといふ考へは素敵だと大笑ひした。私がどうしたものかと心配してゐることを話すと、習ひ覺えた商賣の方で仕事を見つけるやうに骨折るがよいと忠告してくれた。

「この印刷屋の間で揉まれれば、しつかりした腕前になり、アメリカへ歸つて開業する時ずゐぶん助けになるだらう。」と彼は云つた。

私達二人は、この文房具商と同様に、代言人のリドルスデンが全く無頼漢であることを偶然にも知つてゐた。彼はリード嬢の父を説きつけて自分の保證に立たせ、そのために半ば彼を破産させたのである。この手紙を見ると、この時私達と一緒に渡航してゐるはずだつたハミルトン氏の不利を計る目的で、何か陰謀が企まれてゐるらしく、キースはリドルスデンと共にそれに加擔してゐるやうであつた。デナムはハミルトンの友人であつたから、このことを知らしてやらねばならぬと考へた。そこで、間もなくハミルトンがイングラントへ着くや、一つはキースとリドルスデンに對する憤りと怨みから、一つはハミルトンに對する好意から、私はハミルトンを訪ねて、その手紙を渡した。彼は鄭重に謝辭を述べた。この知らせは彼には重要だつたのである。この時以來、彼は私の友人となり、その後いろ／＼の場合に少からず爲になつてくれた。

けれども、こんなに淺ましい策を弄して、何も知らぬ貧しい少年をかうも手ひどくだました知事のことを私達はどうか考へたらう。それは彼の場合、習ひ性となつてゐたのである。彼は誰にでも喜ばれようと思ひ、與へ得るものはないのに、その約束だけを與へたのである。この點を除けば彼は手腕あり才氣ある人物で、文章も相當に書けるし、彼の任命者たる領主達＊にとつてはさうでなかつたにせよ——といふのは彼は時には彼等の命令を無視したからだが——、民衆にとつてはよい知事でもあつた。我が州の立派な法律のうちには彼が立案し、彼の在任中に通過したのも數種あるのである。

＊ 當時アメリカの植民地には、英國王直屬のもの、國王の許可を得て自ら知事を選んだもの、土地の下付を受けた領主の派遣する知事を戴いたものの三種があつた。ペンシルヴェニア州はその最後の種類に屬して、所有權は開拓者ウイリアム・ペンの子トマス及びリチャードにあつた。領主達 Proprietaries とは彼等を指す。(譯者)

ラルフと私とは離れることのできぬ仲間で、週三シリング六ペンスの約束で、一緒にリッブルリテン(ロンドン中心部にある地域。アーウィングの「スケッチブック」に此處の描寫がある。)に下宿した。それが當時私達に出せる精一杯であつた。ラルフは幾人か親類にも會つたが、みんな貧乏で、助けにはならなかつた。ラルフは、かうなつてから初めて、自分はずつとロンドンにゐる積りで、フィラデルフィヤへ歸る氣はないのだと打ち明けた。掻き集めた金はみんな旅費に費つてしまつたので、彼は金はまるで持つてゐなかつた。私は十五ピストール(古金貨の名。諸國に於ては、銀貨に於ては、スペインの) 持つてゐたので、職探しに歩いてゐる間、

彼はたび／＼生活費を私に借りたものである。俳優の天分があると自惚れてゐたので、最初彼は劇場へはいらうと骨折つてゐた。ところが彼がその申込みをしたウィルクス(當時著名の) 喜劇俳優)は、俳優で成功する見込みはないから、そんな職業のことは思ひ切るがよいとあけすけに忠告した。そこで彼はパターノスタ・ロー(Paternoster Row、ロンドンの市街。出版業の中心地。)の出版者ロバーツに、しか／＼の條件で、スペクタータ誌のやうな週刊紙を書かうと申込んだが、ロバーツは賛成しなかつた。次には法學院附近の文房具商や辯護士などに雇はれて雑文書きにならうと努めたが、これも口がなかつた。

私自身はバーソロミュー境内にある有名なパーマーの印刷所に直ぐに働くやうになり、一年近くそこにゐた。私はかなり精出して働いたが、稼ぎは大方ラルフと二人で、芝居や演藝物に使つてしまつた。私の持つて來たピストールは殆どなくなつてしまひ、今ではその日の稼ぎでどうやらその日を過して行く有様であつた。ラルフは妻子のことはすつかり忘れたやうであつた。私もだん／＼リード嬢との約束を忘れてきた。私は彼女にたつた一通の手紙を書いたきりで、しかもその手紙といふのは、當分歸れさうもないと云つてやつたものであつた。このことは、もし生き直すことができたなら改めたいと思ふ私の生涯の第二の大きな過ちである。事實、二人の失費が嵩むので、私はいつまでたつても船賃を拂ふことが出来なかつたのである。

私はパーマーのところへ、ウォラストンの「自然の宗教」の第二版の組替へに従つてゐた。彼の理論づけには不充分だと思はれる點が幾箇所もあつたので、私は哲學的な小論文を草して、そ

これらの點を論じた。表題は「自由と必然、快樂と苦痛に就いての論」であつた。私はこれを我が友ラルフに捧げ、小部數印刷した。パーマー氏は私がパンフレット中で論じた諸原理を汚らはしいもののやうに考へ、嚴しく私を非難したが、それでもこのパンフレットのために、彼は私をなかなか才分のある青年だと思ふやうになつた。私がこのパンフレットを印刷したことも、また新たな過ちであつた。リッル・ブリテンに下宿してゐた頃、私はすぐ隣りに店を出してゐたウィルコックスといふ本屋と知合ひになつたが、彼の所にはとても澤山の古本が集めてあつた。この頃は巡回文庫は行はれてゐなかつたが、私達は然るべき條件をきめて——どんな條件だつたか今は忘れた——店の本はどれでも借りて讀んでよいといふ約束をした。私はこの約束を非常に有益だと考へ、できるだけ利用することに努めた。

私のパンフレットがどこをどう通つて行つたのか、外科醫で「人間判断無謬説」といふ書物の著者ライアンスの手に入つたことから、私達二人は近づきになるやうになつた。彼は大いに私を尊重し、屢々訪ねて来て、さういふ問題について談話を交換したり、又チープサイド(セント・ポール寺院からマリン・ハウスに走るロンドンで著名な大通り)のさる小路にある古ぼけた酒店のホーンズに連れて行つて、「蜜蜂物語」(蜜蜂の生活から例證をとつた奇警な道徳論。著者 Bernard Mandeville 1670—1733. はロンドンの開業醫であるが、又逆説的な論議家で、英國哲學に於けるデイオゲネスと呼ばれる。)の著者マンドヴィル博士に紹介したりした。こゝにはクラブがあつて、博士がその中心人物だつた。といふのは、彼が一番剽輕ペンバートン (1694—1771. 化學者、王立學會の會員で、著者ある。)にも引合せてくれたが、この人は、そのうちアイザーク・ニュートン卿に逢ふ機會を作つてあげようと約束してくれた。これは私には實に望ましいことであつたが、遂に實現しなかつた。

私は少しばかり骨董品を持つて來てゐた。その中で目ぼしいものは石綿製の財布で、これは火にあてると光澤がでるのである。ハンス・スローン卿がこの事を聞きこみ、私に會ひに來て、ブルームズベリ廣場にある自分の家へ私を招待し、所藏の骨董品をすつかり見せてくれ、私を説き伏せて、財布もその中へ加へさせてしまつた。尤も代價は十分にくれた。

私達の家には小間物屋の若い婦人が泊つてゐた。彼女はクロイスターズに店を持つてゐたと思ふ。上品な育ちで、氣轉も利き、生き生きしてゐて、殊のほか話の面白い婦人であつた。夜になるとラルフは彼女に脚本を朗讀して聞かした。二人は仲よくなり、女が他の宿へ移つた時にはラルフもくつついて行つた。暫くは二人で一緒に暮してゐたが、彼は相變らず仕事がないし、彼女には子供もあり、彼女の収入だけではやつて行けないので、彼はロンドンを出て田舎で塾をやらうと決心した。ラルフは字も上手だし、算術や計算は立派なものであつたから、結構この仕事はやれると考へたのである。けれども、これは彼の力量にふさはしからぬ下等な仕事で、いづれは運が向いてくるに違ひないのだが、その時になつて曾てはこんな下等な仕事をしてゐたと云はれるのは積だと考へたので、彼は名前を變へて、有難いことに、私の名前をつかつたのである。と

いふのは、間も無く彼から来た手紙には、彼がある小さな村に落ちついたこと（バークシャダつたと思ふ、そこで彼は一週六ペンスで十人乃至十二人の子供たちに読み書きを教へた）、T——夫人の面倒を頼むこと、これこれの場所の塾主フランクリン氏宛に手紙を書いてほしいこと、等々と認められてゐたのである。

彼は頻繁に手紙をよこしつづけ、當時作つてゐた敘事詩の部厚な見本を送つて批評と訂正を乞うて来た。時には私も批評や訂正を送つてやつたが、寧ろそんな所業には氣をなくさせるやうに努めたものである。たま／＼ヤング Edward Young (1681—1765, 英の詩人。その作中「夜の隨想」が知られてゐる) の諷刺詩が出

版された。私は詩神を追つかけ廻すことの愚かさを力強く描きだしたその詩の大部分を寫しとつて彼に送つてやつた。すべては無益であつた。詩稿は郵便毎に来つづけた。とかくするうちT——

夫人はラルフのお蔭で友達も仕事も失ひ、しよつちゆう金に詰つて、何とか凌いでゆくために、私を迎へによこしては私が融通できるだけの金を借りるのであつた。私は彼女の傍らにゐるのが嬉しくなり、その頃は宗教上の束縛も受けてゐなかつたし、彼女には大事な人間だと考へて圖太くもなつてゐたので、いかゞはしい振舞ひに出ようとした。これがまた私の過ちである。彼女はかなり手厳しい言葉ではねつけ、ラルフに手紙を書いて私のしたことを知らせた。これが我々の關係の破綻を惹き起した。自分は従來君に負つてゐた債務は凡て帳消しになつたものと考へる、ロンドンに歸つた時、彼はかう云つたのである。従つて私が彼に貸した金、

返つて來ないものと思ふべきであるといふことになる。けれどもこれは大して重大なことでは無い。何故なら彼は抑々返すことなんか出來なかつたのだから。そして彼の附合ひがなくなつたので、私は重荷を卸したやうに感じた。今や私も少しは溜めようと考へ始めた。そして割のいゝ仕事になると思つたので、パーマーの處を出て、もつと大きな印刷所、リンカンズ・イン・フィールズ (Lincoln's Inn Fields, ロンドン最大の廣場の名) 近くのウォッツのところへ働くことにした。その後のロンドン逗留中私はずつと此處にゐた。

最初この印刷所に採用された時、私は印刷の方へ廻して貰つた。アメリカでは印刷の仕事も植字の仕事も一緒にやるのでそんなことはなかつたのだが、此處では運動不足になると思つたからである。私の飲物は水だけだつたが、五十人足らずのほかの職工は、みんな大のビール黨であつた。私は時折片手に一つづつ大型の活版を持つて階段を昇つたり降りたりすることがあつたが、ほかの者は兩手で一つ運ぶだけだつた。かやうな例を幾つか見て、水飲みのアメリカ人（さう彼等は私を呼んでゐた）が強いビールを飲んで自分達より強いとは思議だと彼等は言ひ合つた。工場の中には職工達にビールを持つてくるためにビール店のボーイがいつも來てゐた。印刷所の私の朋輩は、朝食前に一ポイント (昨日の名。八分の一ガ、ロン我が三合一ガ餘)、朝食の時にパンとチーズと共に一ポイント、朝食と晝食の間に一ポイント、晝食に一ポイント、午後の六時頃に一ポイント、一日の仕事が濟んでからも一ポイント、毎日これだけ飲んだ。實に困つた習慣だと私は思つたのだが、彼はう

んと働くためにはうんとビールを飲む外ないと考へてゐるのであつた。ビールを飲むために生ずる精力は、ビールの成分たる水の中に溶けてゐる大麥の粒或は粉の量に比例するもので、一ペニーのパンの中にはもつと多量の粉があるから、もし一ペニーのパンを食べて一パイントの水を飲めば、一クオート(餅目の名。ニパイ。パイに於ける。)のビールを飲むより力が出てくる。私はかう信じさせようと骨を折つたのだが、彼は相變らず飲み続け、毎土曜の夜には、この有害な液體のために、四、五シリングも拂はねばならないのであつた。こんな費用は私には全く不要だつたわけである。かやうな工合で可哀さうに職工らはいつまでたつてもうだつが上らないのである。

數週間経つと、ウォッツは私を植字部屋へ廻さうと考へたので、私は印刷の連中と別れた。植字工等は新入りの酒手として五シリング私に要求した*。

* *Dien venu*. 英國では印刷は最初古き禮拜堂 *Chapel* の中で行はれたので、職工用語では印刷所のことを *Chapel* と云ふ。*Chapel* には主が棲んでゐるので、新米の職工はこの主に捧げ物をしなければならなかつた。これを *Dien venu* といひ、大抵ビール一ガロン以上の値段であつた。*Dien venu* は入會披露の意である。この習慣は十九世紀の中葉頃まで行はれた。(譯者)

私はこれはべてんだと考へた。何故かといへば、私は前に印刷工達に一度拂つたのだから。主人の考へも同様で、彼は私が拂ふことを禁じた。私は二三週間は頑張つたが、そのために仲間外れにされてしまひ、一步部屋を出さへすれば、活字をこちやませにしたり、組物を置き換へたり壊したり、その他さまざまのいたづらをされた。そしてそれらはみんな「印刷所の主」の仕業で、しきたりを破つてはいつて來た者はきつとこれに憑かれるのだと言ふのである。主人は庇つてくれたけれども、私はみんなの言ふことを聞いて金を拂はざるを得ないやうになつた。それに始終一緒にゐる者達と不仲でゐるのは馬鹿々々しいとも考へたので。

さてかうして私はみんなとも仲よくなり、やがて相當の勢力を得た。私は印刷所の規則に若干の合理的な變更を提議し、凡ての反對を押し切つて實行した。彼等の大多數は、私の例に習つて、頭を悪くするビールとパンとチーズの朝食を止めてしまつた。私と一緒にやれば、一パイントのビールの値段、即ち三ペンス半だけだせば、胡椒を散らし、パンをぼろ／＼にして入れ、少量のバターを加へた熱いお粥を大きなお皿に入れて隣の家から持つて來てくれることが分つたからである。この朝食の方がうまくもあり、安くもあり、その上頭をはつきりさせておくにもよかつた。相變らず終日ビールを飲んでる連中は、不拂ひのためにビール店の借がきかなくなり、連中の言葉で言へば、彼等の「明りが消える」と、私にビールを買つてくれるやうに頼んで來るのであつた。土曜の夜には私は勘定臺を見張つてゐて、彼等のために私が受合つた金を取立てた。時には彼等のために週に三十シリング近くも拂はねばならなかつたものである。このためと、一つにはかなり達者な諧謔家、つまり話の面白い皮肉屋と認められたのと、私は仲間の間に勢力があつた。また決して休まないの——私は聖月曜(月曜日は怠惰の日とする習慣がある。)だと云つて休んだりしたことはな

かつた——主人の氣にも入り、植字は並外れて速いので、急ぎの仕事といふと私に言ひつけられたものだ。急ぎの仕事はたいがい賃銀もいゝのである。かういふ風で、今は私も頗る愉快に暮してゐた。

リッル・ブリテンの下宿は遠過ぎるので、私はデューク通りに一軒見つけた。ローマ教會の禮拜堂の向ひ側で、イタリアの小間物店の三階の裏手にあつた。店をやつてゐるのはある未亡人で、娘が一人、女中が一人、それに店番の雇人が一人ゐたが、この男は通勤だつた。今までの下宿へ人をやつて私の人柄を聞かせてから、彼女は同じ下宿料——一週間三シリング六ペンスで私を置くことを承諾した。用心のために男の人に泊つて貰ひたいと思つてゐるので、割安にするのだと彼女は云つた。彼女はいゝ年配の寡婦で、ある牧師の娘に生れプロテスタントとして育つたのだが、夫に従つてカソリックに改宗したのであつた。その夫の思ひ出は、彼女には大そう尊いもののやうであつた。以前はたいい上流の人々と附合つて暮してきたので、遠くチャールズ二世の頃からの名士達の逸話を無數に知つてゐた。足痛風のため足が悪く、そのため滅多に部屋から出ることはなかつた。それだけに時々話相手を欲しがつたものである。彼女の話相手をするのはとても面白かつたので、彼女がゐて欲しいといふ晩は、私もきまつて彼女の相手をして過したものだ。私達の夕飯は薄いバター一片に、ひしが半分づつ、それとビールを半パイントづつに過ぎなかつた。しかし彼女の話が御馳走なのであつた。私は時間はきちんとしてゐたし、家の人

には殆ど面倒をかけなかつたので、彼女は私と別れるのを厭がつた。それである時、工場の近くに、週二シリングで（私は金を溜めるのに一生懸命だつたから、これだと大分違ひができるのである）賄つてくれる家があると聞いて彼女に話したら、これからは一週に二シリング負けてあげるから、そんなことは考へないでくれと彼女は頼むのであつた。で、私はロンドン滞在中は、一シリング六ペンスで、ずつと彼女のところにゐたのである。

この家の屋根裏には七十歳になる未婚の婦人がゐて、全く世間を離れた生活をしてゐた。宿の女主人はこの婦人について次のやうな話をした。彼女はローマ・カソリック教徒で、若い頃外國にやられ、尼になる考へで尼寺にはいつた。ところが、風土が體にあはぬので彼女はイングラントに歸つた。イングラントには尼寺がなかつたけれども、かういふ環境の中でもできるだけ尼らしい生活を送らうと彼女は誓つた。そこで彼女は全財産を慈善事業に寄附し、たゞ生活費として年に十二ポンドだけ残しておいた。この額の中からさへ、彼女は一部を施しに使ひ、自分は燕麥の水粥だけで生活し、その粥を煮るほかには火もつかはなかつた。彼女はもう長年この屋根裏に住まつてゐた。下の家を借りた代々のカソリック教徒達が、こんな婦人に屋根裏にゐて貰ふのは有難いことだと考へて、みんなたゞで彼女のゐるのを許したからである。一人の僧が毎日彼女の懺悔を聞きに來た。

「それでわたし聞いてみたんですよ、」と女主人は云つた、「あなたのやうな生活を送りながら、

どうして懺悔聽聞僧にそんなに御用がおありなのでせうかつて。」

「あゝ、」と彼女は答へたさうである、「妄想を免れることはできないことです。」

私も一度許されて彼女を訪ねた。彼女は快活で丁寧で樂しげに話した。部屋はきれいであつたが、家具といつては、一枚の敷蒲團と、十字架と一冊の書物との載つてるテーブルと、おかけなさいと云つて私に出してくれた椅子と、煙突の上にかゝつてゐる聖ヴェロニカ St. Veronica (聖者の名。十字架上のキリストの顔を布をもつて拭つたと云ふ。キリストの像がその布に印せられたと傳へられる。) がハンケチを擲げてゐる繪と、それだけであつた。ハンケチには血の流れてゐるキリストの顔の不思議な印象が現はれてゐて、彼女は非常に嚴かにそのいはれを説明するのであつた。

彼女は蒼白い顔をしてゐたが、決して病氣にはならなかつた。これは、いかに僅かの収入で生命と健康とを維持することができるかの一例證といふことができる。

ウォッツの印刷所で私はワイゲートといふ才氣のある青年と交誼を結んだ。彼には富裕な親戚があり、教育も普通の印刷工より高く、ラテン語が相當できるし、フランス語を話し、讀書好きであつた。私は二度テムズ河へ行つて、彼とその友達に水泳を教へたが、彼等は間もなく上手に泳ぐやうになつた。彼等は田舎から來た數人の紳士を私に引き合はせた。大學とドン・サルテロ (Don Saltero. テムズの北岸チエルシにある珈琲店。自然の奇物を陳列した博物館がある。) の奇物とを見に、この人達と一緒に船でチエルシへ行つた歸り途、ワイゲートが一行の好奇心を煽り立てたため、皆がしきりにやつて見せろといふので、私は

着物を脱いで河に飛びこみ、チエルシ近くからプラグ・フライアーズ (ロンドンにある地名。舊ロンドンの同名の僧院のあつたところ。) まで泳いだ。途々、水面や水中でさまざまの藝當を演じたが、それが珍しいので、彼等は驚いたり嬉しがつたりした。

私は子供の時から水泳が好きで、テューヴナーの泳法を學んで練習し、これに、見た目にきれいで、泳ぎ易く、また役にも立つやうに自分の工夫を加へてゐた。それらをみんなこの機會に一行に見せてやると、彼等はしきりに褒めそやすのであつた。ワイゲートは、水泳に熟達しようと思つてゐたので、そのために益々私に親しんだのである。一つは二人の研究が同一だつたからでもあるが。しまひには、費用は自分たちの職業で働き出すことにして、二人でヨーロッパ中を旅行しようぢやないかと云ひ出した。私も一度はその氣になつたが、敬愛する友人のデナム氏(私は暇な時には、よく一時間位この人と一緒に過したものだ)に打明けると、彼は私を止めて、ペンシルヴェニアに歸る以外のことは何にも考へないやうに忠告した。彼自身はやがて歸國しようとしてゐるところであつた。

私はこの立派な人物の性格の一つの特徴を記さねばならない。彼は以前プリストルで商賣をしてゐたが、失敗して大勢に借金できたので、示談にして貰つてアメリカへ赴いた。アメリカでは、商人として業務に精勵したので、幾年ならずして巨額の財を積むことができた。私と同じ船でイングランドへ歸ると、彼は宴を設けて舊債權者を招待し、彼等が寛大な示談條件を與へてく

れたことについて謝意を表した。人々は御馳走になることだけしか當にしてゐなかつたのであるが、最初の皿が取り運ばれてみると、皿の下から未済残額に利子まで添へた額の銀行爲替がでてきたのであつた。

さて彼が私に云ふには、自分は間もなく、フィラデルフィヤに歸るが、うんと品物を持つて歸つて、向ふで店を始める積りだ。ついては、帳簿をつけたり(その仕事は彼が教へてくれるはずだつた)、手紙を寫したり、店番をしたりするために、君を書記に雇つて連れて行きたい。尙附け加へて云ふには、君が商賣といふものに馴れて來たら、すぐ地位を引上げて麥粉やパンを船に積んで西印度に行つて貰ふやうにする、ほかの人からも儲けになりさうな委託販賣の仕事を買つてあげよう、それもうまくやりおほせたら、立派に獨立させてあげようといふのであつた。この話は私には嬉しかつた。といふのは、私はロンドンには飽きて來てゐたし、ペンシルヴェニヤで過した楽しい月日を思ひだすと懐かしくて、もう一度歸つて見たいと願つてゐたからである。そこで私は、ペンシルヴェニヤの金で年五十ポンドといふ條件で、早速承諾した。これは植字工としての現在の収入より少いには違ひないが、その代り先の見込みがあつた。

かうして私は印刷の仕事を止め——自分では生涯止めることになると思つてゐた——、毎日新しい仕事に従ふやうになり、デナム氏について商人達のところへ出かけて雜貨を仕入れ、その荷造りを監督し、使ひを出したり人夫を呼んで發送させたりなどするのであつた。さうして、すつかり船に積みこんでしまつたら、尙ほ數日間暇ができた。かういふ一日のことである。思ひもかけず、ウィリアム・ウィンダム卿といつて、名前だけしか知らぬえらい人から使ひが來たので、私はその人のところに伺つた。この人は、どういふ傳手からか、私がチェルシからブラック・フライアーズまで泳いだこと、數時間のうちにワイゲートともう一人の青年に泳ぎを教へたことを聞いたのだつた。彼には息子が二人あつてちやうど旅に出ようとしてゐたので、先づ泳ぎを習はせたいと考へ、お禮は十分に出すから教へてやつて貰ひたいと彼は私に申込んだのである。しかし、息子たちはまだ町へ來てゐなかつたし、私はいつまでもゐられるか分らぬので、この申込みを受入れるわけにはゆかなかつた。この事から考へてみるのに、もし私がイングランドに残つて水泳學校を開いたら、きつと一財産出來たらう。この考へは非常に私を動かしたので、もしもその申込みがもつと早かつたら、多分私はそんなに早くアメリカへは歸らなかつたらう。ずつと後になつて、お前と私はウィリアム・ウィンダム卿の二子の一人で、エグルモントの伯爵となつた人と、もつと重要な事で關係を生じたのだが、そのことはその場所へ來たら話さう。

このやうにして私はロンドンで十八箇月ばかり過したのである。その大部分は私は仕事に精を出し、芝居を見るのと本を讀むのとを除けば、殆ど自分のためには使はなかつた。だが、友人のラルフが私を貧乏にしてゐた。彼は約二十七ポンドも私に借りてゐたのだが、返して貰ふ望みはもつなかつた。僅かな収入の中から随分借りられたものだ！ それにも拘らず、私は彼を愛して

みた。彼にはなかくいゝところがあつたのだ。私は金は全くできなかつたが、見聞は廣くなつた。非常に才氣のある知人も幾人かでき、その人達と話しあつて、大そう得るところがあつた。それに本はかなり讀んだものである。

第四章 印刷屋を開業す

一七二六年七月二十三日私達はグレイヴズエンドから船に乗つた。この航海中の出来事については私の日誌を見るとよい、それに凡て詳細に述べてある。その日誌中で一番大事な部分は、將來の行ひの掟とするために船中で自分で考へだして書き記した處世の案だらう。これを作つた時自分があんなに若かつたことを考へれば、而もずつと老年に至るまでかなり忠實に守り通して來たことを考へれば、一そう注目する値打があるわけだ。

十月十一日にフィラデルフィヤに上陸してみると、様子が大分變つてゐる。キースはもう知事をやめ、ゴルドン少佐が代つてゐた。私は彼が一市民になつて町を歩いてるのに逢つた。彼は私を見かけると、多少は工合が悪さうな様子で、一言も口をきかずに行つてしまつた。私もリード嬢に會つた時には同じやうに愧づかしい思ひをしただらう。もしも彼女のまはりの人達が、私の手紙で、さう思ふのは當然だが、もう私は歸らぬものと諦めて、私の留守中彼女に勧めて別の男と結婚させてゐなかつたとしたら。その男といふのは、ロージャズと云つて陶工だつたが、この男との生活は彼女には仕合せでなかつた。間もなく彼女はこの男と別れ、同棲することも彼の姓を名のることも拒んだ。この男には別に女房があるといふことであつた。彼は腕のいゝ職人で、

彼女の身内の者はそこに惚れたのだが、取るに足らぬ男で、金に詰つて一七二七年か二八年に逃亡して西印度へ渡り、そこで死んだ。キーマーは以前より立派な家を手に入れ、文具類や、澤山の活字の揃つた店を持ち、腕のいゝのはあなかつたが職人も何人か使ひ、仕事は大いに繁昌してゐる様子だつた。

デナム氏はウォーター街に店を開き、私たちは持つて来た荷をそこで開けた。私は仕事に精を出し、簿記を習ひ、暫くのうちに賣り方も支人くわうとになつた。私達は一緒に寝とまりし、一緒に食事をした。彼は心から私の事を心配して、父のやうに注意してくれたし、私も彼を尊敬し愛慕してゐた。かうして二人が大變幸福にやつて行けさうだつたのである。ところが、一七二七年、私が二十一歳になつたばかりの年の二月の初めに、私達は二人とも病氣になつてしまつた。私の病氣は肋膜炎で、危く死ぬところであつた。私は大變苦しんで、助からぬものと覺悟を決め、癒りかけると氣がついた時には寧ろあてが外れたやうな氣持であつた。いづれそのうちにはこの不快な苦痛をもう一度繰返さねばならぬと思ふと、残念な氣さへするのであつた。デナム氏の病氣が何だつたかは忘れたが、長い間彼にとつついて、とう／＼命までとつてしまつた。彼は私に對する好意の印として口頭の遺言で小額の遺産を残してくれた。彼の店は指定遺言執行人の管理するところとなり、彼と私との雇傭關係は切れてしまつたので、またもや私は廣い世間に投げだされたのである。

この頃ファイラデルフィヤにゐた義兄のホームズは、もとの職業に歸るやうに勧めた。キーマーからは年ぎめで相當の金を出すから來て印刷所の面倒を見て貰ひたいと云つて來た。かうして彼自身は文房具店の方にもつと身を入れる積りだつたのである。私はロンドンで、彼の細君や友達から、彼の人の悪いことは聞いてゐたし、この男とまた關係を結ぶのは好ましくなかつた。私は商人の店員の口をと望んだのだが、一向見つからぬので、再びキーマーと契約した。彼の印刷所には次のやうな連中がゐた。ヒュー・メレヂス、これはウェールズ系のペンシルヴェニヤ人で、年は三十、田舎の百姓仕事を教へこまれてきたのだが、誠實で常識もあり、經驗にも富み、讀書好きであつたが、飲酒癖があつた。スチーブン・ポッツ、ちやうど丁年になつた田舎青年で、同じく百姓の育ち、異常な天分を持ち、頗る機智と諧謔に富んでゐたが、少し情け者であつた。この二人をキーマーは恐ろしく安い週給で雇ひ、仕事が出来るやうになるにつれて、三箇月毎に二人ともキーマーのところへ辛抱してゐたのである。メレヂスは印刷に、ポッツは製本に働くはずで、仕事はキーマーが教へてくれることになつてゐたが、實は彼はどつちも知りはないのだ。ジョン某といふアイルランド人は、全く無教育で腕に職はなかつた。この男はキーマーがある船の船長から買ひ取つて四年の年期奉公をさせることにしたので、やはり印刷工になるはずだつた。ジョージ・ウェップといふのはオックスフォードの學生で、この男の四年の年期も同じやうにキ

キーマーが買つたので、キーマーは彼を植字工にする積りであつた。この男については、すぐにもつと述べることがある。他にデーヴィッド・ハルリといふのがあつたが、これは田舎の少年で、キーマーが見習奉公に雇入れたのであつた。

キーマーが今まで出したこともないほど高い賃銀を出して私を雇つたのは、これらの物になつてゐない安い職工を私の手で仕上げさせる積りだからで、いつたん私が彼等に教へこんでさへしまへば、彼等は證文で縛られてゐるのだから、私を追ひ出してもやつてゆけるといふ腹だと私はすぐに見てとつた。併し、私は頗る快活に働き、おそろしく亂雑な印刷所をきちんと整頓し、職人達にもだん／＼に自分の仕事に氣をつけてうまくやつてゆけるやうに教へて行つた。

オックスフォードの學生が「買はれた下僕」(當時本國から植民地に渡り、その渡航費を償ふために一定期間奉公する義務のあつた者の稱。)の地位にゐるのは奇怪なことであつた。彼は十八歳を超えてはゐなかつた。彼の身の上話によると、彼はグロスターに生れ、古文學校に學んだ。その生徒達が芝居をやつた時、彼は自分の持役を一きは見事にやつてのけたので、仲間のうちでも評判になつた。彼はその地のウィッツ・クラブといふのはいり、數篇の散文や詩を書いたが、それらはグロスターの新聞に掲載された。その後オックスフォードにはいつて一年ばかりゐたが、ロンドンへ行つて役者になりたいとばかり思つてゐたので、どうにも満足が出来ない。とう／＼四半期分の手當十五ギニ(Sutten. アフリカのギニ産の金で鑄造した金貨。一六六三年初めて鑄造された當時は、此の銀幣は二十シリングであつたが、十八世紀)を受取ると、借金は返しもしないで町を出奔し、制服をはりえ

にいだの叢に隠し、ロンドンまで歩いて行つた。ロンドンには爲を思つてくれる友達もなく、やがて悪い仲間が出来て、ギニ貨も使つてしまつた。俳優の間に紹介してくれる傳手もなく、金に困つて、衣類を質入れし、パンにも事を缺くやうになつた。空腹を抱へ途方に暮れて通りを歩いてゐると、悪桂庵のビラを手渡された。見ると、アメリカで働く契約をすれば、早速御馳走にもありつけ、手當も貰へるとある。彼は眞直ぐにやつて行つて、契約書に署名し、船に乘せられてアメリカへ渡つたのである。身内の者に自分がどうなつたかを知らず手紙さへ一行も書かないで。彼は潑刺として機智もあり、性質も良く、愉快的仲間であつたが、怠惰で無考へで、おそろしく輕率であつた。

アイルランド人ジョンは程なく逃亡した。その他の者と私は大變仲よく暮して行つた。キーマーは彼等にも教へることができないのに、私からは毎日何かしら教はるので、それだけ一同は私を尊敬したからである。町の才智のある人々との交際もふえてきた。土曜日はキーマーの安息日で休みだつたから、週に二日の讀書の日があつたわけである。キーマー自身も頗る鄭重に、そしていかにも大切さうに私を遇するので、ヴァーノンへの借金の外には、心を悩ますこともなかつた。これまで經濟がまづかつたので、まだこの金が拂へなかつたのだが、親切にも彼は催促はして來なかつた。

私達の印刷所には度々活字が足りないことがあつたが、アメリカには活字の鑄造所はなかつた。

私はロンドンのジェームズのところで活字を鑄造するのを見たが、そのやり方にはあまり注意してゐなかつた。けれども私は鑄型を考案し、手許にある活字を打印器に使つて、鉛に字を打ちこみ、かうしてなかなか上手に足りない活字を揃へたものだ。また時折はその他種々のものを彫刻し、インキも作り、倉庫番もした。つまり、何でも屋だつたわけだ。

併しどれだけ私が役に立つにせよ、他の者が仕事が上手になるにつれて、私の働きは日毎に重要でなくなつて来た。そして二回目の四半期分の給料を拂ふ時には、キーマーは、かう出してはたまらないから負けて貰ひたいものだと言ひだした。彼はだん／＼ぞんざいになり、だん／＼主人風を吹かし、度々あらを見つけては口喧ましいことを言ひ、喧嘩別れになるのを待ち設けてゐるやうであつた。しかし、その原因は一つは彼の懐ろ工合がうまくゆかぬためだと考へたので、私は蟲を殺して、仕事を續けてゐたが、とう／＼詰らぬ事から二人の關係は破裂した。といふのは、裁判所の近所で大きな物音が聞えるので、私が窓から首を出して何事かと眺めてゐると、その時キーマーは通りにゐたが、振り仰いで私を見ると、大聲でがみ／＼と仕事を怠けるなど怒鳴り、二言三言悪口を浴びせたのである。人前だけに餘計私はむら／＼とした。私がどんな取扱ひを受けたか、この時外を見てゐた隣近所の人々はみんな知つてゐる。彼はすぐに印刷所へ上つて来て、喧嘩を續け、互に荒い聲で罵り合つた。私達は契約を解除する場合には、四半季間の豫告期間を置くことに決めてゐたが、彼は今その通告をして、こんな長い豫告期間を決めてゐるのだから、念だと言つた。残念がるには及ばない、かうなつたら一時だつてゐるものかと答へて、帽子をとると私は外へ出て行つた。メレヂスが下にゐたので、私の物を預つて後で下宿へ届けてくれるやうに頼んだ。

私の頼みに従つてメレヂスが夕方やつて来たので、二人で身の振り方を話し合つた。彼は私を非常に尊敬してゐたので、自分が残つてゐるのに私が印刷所を出るのを大變残念がつてゐた。私は故郷へ歸らうかとも思ひ始めてゐたのだが、彼はそれを思ひ止まらせた。彼が言ふには、キーマーが持つてゐるものは皆借金して買ったもので、金を貸した連中は心配し始めてゐる。店の經營は下手糞で、現金が欲しいため、儲けも見ずに賣つたり、帳面にもつけずに掛賣りしたり、始終そんなことをしてゐる。だから失敗するに決つてゐる。そこをねらつて私が乗り出したらと勧めるのであつた。金がないからと私は反對した。すると彼が言ふには、彼の父親は私を大層高く買つてゐて、これまでの話しつぷりから考へても、もし私が彼と組合になつてくれさへすれば、開業に要する金ぐらゐはきつと融通してくれる。

「僕のキーマーのところの年期は、」と彼は續けた、「春になれば切れる。その時までには印刷機や活字をロンドンから取寄せることができる。僕は腕のいい職人ぢやない。それは自分でも知つてゐる。それで、君さへよければ、僕が資本を出すのに對して、君が仕事の腕を貸す、そして利益を折半することにしたらどうだらう。」

結構な提議だから私は承諾した。彼の父親は町に来てゐて、これに賛成した。私の言葉は彼の息子には大きな影響力があつて、私はもう長い間彼に説いて酒を止めさせてゐたりしたので、尙更父親はこれに賛成で、二人がこんなに深い関係が出来た以上は、あの悪い癖はすつかり直して戴きたいなどと言つた。私が父親に品書を渡すと、彼はそれを商人のところへ持つて行つた。品物の註文は出たが、それが着荷するまでは、一切祕密にしておくことにし、私はそれまでは出来ればもう一軒の印刷所へ行つて働くことに決まつた。ところがそんな空いた口はないので、することもなく何日間か過してゐると、キーマーが大變鄭重な言傳ことばをよこした。彼はニュー・ジャージー州の紙幣印刷の仕事がとれさうになつてゐたが、それにはカットやいろ／＼の活字がいろいろに、それを拵へることのできるのは私だけであつた。もしかしてブラッドフォードが私を雇つて、仕事を奪られてしまふかも知れないと彼は心配したのだ。そして古くからの友達が一時の怒りにまかせて言つた二言三言のために離れてはいけない、どうか歸つて欲しいものだと言つて來たのである。メレヂスは承知するやうに勧めた。さうすれば、私に毎日教へて貰つてもつと仕事ができるやうになるからといふのであつた。そこで私は歸つて行き、キーマーともこの間中よりは仲よく暮していつた。ニュー・ジャージーの仕事がとれたので、私は銅版印刷を工夫したが、それはこの國で最初のものであつた。私はその紙幣の裝飾圖案や罫模様を幾箇も彫刻した。私達は一階にパーリングタンへ行き、私が指圖して仕事は上首尾に片づけた。彼はこの仕事で幾箇の金を受取つたため、尙暫くは破産せずに済んだのである。

パーリングタンではこの州の有力者達の間で大分近づきができた。そのうちの幾人かは州會が任命した委員で、法律に定められた數を超えないやう、印刷に立會つて監督するのが役目だつた。だから順番に彼等のうちの誰かは私達のところへ來てゐたので、來る時には大抵友達を一人か二人、話相手に連れてくるのであつた。本を讀んだお蔭で私はキーマーよりは頭は進んでゐた。私の言ふことの方が尊重されたのはそのためだらう。彼等は私を自分の家に招いたり、友達を引き合せたり、大層懇切にしてくれたが、キーマーの方は、主人でありながら、少々疎んぜられてゐた。全くのところ、彼は奇妙な人物だつた。世間の生活といふものを一向知らず、常識的な意見にはむやみに反對するのが好きで、だらしがないものだからとても汚らしく、宗教上のことでは熱狂的なところがあつたが、それでゐて無頼なところもあつた。

私達は三箇月近くもこの地に滞在した。その頃までに近づきになつた人達は、アレン判事、州の書記官サミュエル・バスチル、アイザーク・ピアスン、ジョーゼフ・クーパー、スミス家の數人、これは州會議員だつた。それから測量監督アイザーク・デューコーなどであつた。最後にあげたデューコーは俊敏伶俐な老人で、その身の上話によると、若い頃獨立した時には、土を車に積んで煉瓦師に運ぶ仕事から始めたのださうである。成年になつてから初めて文字を習ひ、測量師等の測鏈を持ち運んでゐるうちに、測量を教へて貰ひ、勤勉に働いたお蔭で、今では立派な

財産ができてゐるのであつた。

「君はきつと間もなくこの男の仕事をとつてしまひ、この商賣で、フィラデルフィヤで一財産拵へるだらう。」

彼はかう言つたが、この時にはフィラデルフィヤなり他の場所なりで、私に獨立するつもりがあるなどは、彼は少しも知らなかつたのである。これらの友達は、後に大變私のためになつた。時々私は私が彼等の誰彼の役に立つたこともある。彼等はみなその生涯中私に對する敬意を持ち續けてくれた。

いよく事業を始めて世間へ打つてでる話にはいる前に、私の生活の原則や道義觀についての當時の精神状態を話しておく方が好都合だらう。さうすればそれらがどこまで私のその後の出來事に影響したかが分るだらうから。私の両親は早くから私に宗教心の起るやうにし、幼年時代を通じて、敬虔に私を非國教派の方向へ導かうとしたのである。けれども、いろ／＼本を讀んでみると異論があるので、この派の教義が次々に疑はしくなり、やつと十五歳になつた時には、もう私は聖書そのものに疑惑を持つやうになつてゐた。この頃自然神教を論駁した數冊の書物が手にはいつたが、それらは Boyle Robert Boyle (1626—1701. 英の化學者。その遺産を基金に毎年キリスト教精義の) 記念講演で述べられた説教の骨子を寫したものと云はれてゐた。ところがそれらはその目的とする處とは正反對の影響を私に及ぼしたのである。といふのは、論駁するために引用されてゐる自

然神教徒の議論の方が、私には論駁の方よりも有力に思へたからだ。結局私は全く自然神教信者になつた。私の議論の影響でほかの者も幾人か背教者になつた。特にコリンズとラルフがさうだ。この二人は私に大變迷惑をかけながら少しも悔いるところになかつた。またキース(彼も自由思想家の一人だつた)の私に對する振舞ひや、私自身のヴァーノンやリード嬢に對する振舞ひ(それは屢々私を非常に悩ますのであつた)などを考へてみると、この教義は、眞實であるかも知れないが、あまり有用ではないと私は疑ひはじめた。一七二五年にロンドンで印刷した私のパンフレットにはドライデン John Dryden (1631—1700. 英の桂冠詩人。詩、戯曲、諷刺、翻譯、宗教論等甚だ多方面) の次レットの語句が標語として載つてゐた。

存在するものは凡て正しい、しかし、半盲の人間は

鎖の一部、もつとも近い環のみを見て、

凡て上の環を釣り合はせぬ

かの平衡の桿には眼が届かぬ

また無限の智慧、仁慈、力などの神の屬性から考へて、この世には惡といふものは有り得ない、徳と不徳とは空しき區別で、かゝるものは存在しないと結論してゐたが、今はそれが前に思つたほど智慧に富んだ述作とは思へなくなつた。形而上の問題の推理によくあるやうに、私の議論にも氣づかぬ誤謬がいろいろこみ、そのため後の全部も間違つたのではないかと私は疑つた。

私は人と人との交渉が眞實と誠實と廉直をもつてなされるのが、人間生活の幸福にとつて最も大切だと信じるやうになつた。そこで私は生涯實行する考へで、決心を書き記したものだ。それは今も日記の中に残つてゐる。聖書はそれ自身としては私には別段大切とは思へなかつたが、かういふ考へは抱いてゐた。即ちある種の行爲は聖書に禁じられてゐるから悪いのではなく、或は聖書が命じてゐるから善いわけでもない。さうではなくて、それらの行爲は、凡ての環境を考へた上で、本來我々に有害であるから禁ぜられ、或は有益であるから命ぜられてゐるのであらうと。神の攝理のためか、守護天使の助けのためか、或は偶然にも環境に恵まれた故か、又はそれら凡てのお蔭によるのか、この信念を得たために、私は遠く父の監督と訓育の下を離れ、他人の中で屢々きほどい立場に立つたにも拘らず、危険の多い青年期を通じて、宗教心の缺如からともすると陥り易い「勝手氣儘」な下等な不道徳や非行を犯さずに済んだのである。「勝手氣儘」と特に斷るのは、既に述べたやうな私の過失の幾つかは、私が若年で經驗に乏しく、相手の人が破廉恥だつたことなどを思へば、ある程度までは已むを得なかつたと考へられるからである。かやうにして、いよいよ自立する時には、私は相當の見識ができてゐたわけだ。私はこれを大切に、いつまでも持ち続けようと思つた。

私達がファイラデルフィヤに歸つて間もなく、ロンドンから活字が届いた。私達はキーマーと話をし、彼がこの事を聞きつけぬうちに、暇を買つて彼のところを出た。私達は市場近くに貸家を見つけてこれを借りた。家賃(當時は年二十四ポンドだつたが、後には七十ポンドにも上つたと聞いた)の負擔を軽くするため、私達は硝子屋のトマス・ゴッドフリとその家族を置くことにした。家賃のかなりの部分はこの一家が出してくれ、私達の賄は一緒にして貰ふはずであつた。私達が活字を開けて印刷機を整頓したばかりの時、私の知合ひのジョージ・ハウスが、通りで印刷屋を探してゐる田舎の人に逢ひ、その人を連れて来てくれた。どうしても買はなくてはならぬいさまじくの備品のために、現金はみんな使ひ果したところだつただけに、この田舎の人の拂つた五シリングは、いかにもうまいところへはいつたのではありません、最初の収入でもあり、その嬉しかつたことは、その後儲けたどのクラウン銀貨(五シリン)とも比べものにならない。このハウスに對する感謝の念のために、もしこのことがなかつたら多分さうはならなかつたと思はれるほど、私は若くて獨立した人を進んで援助するやうになつたのである。

どこの國にも悲觀屋がゐて、不吉なことをいつも言ひ觸らして歩くものだが、ファイラデルフィヤにもそんな人がゐた。いゝ年配の有名な人物で、名前はサミュエル・ミッケルと言ひ、賢さうな顔をして、いかにも莊重な物言ひをする人だつた。私は知合ひではなかつたのだが、この紳士がある日戸口へ来て私を呼びとめ、最近新しい印刷所を開いた若い人は私かどうかと訊ねた。

「さうです。」と答へると、彼が言ふには、

「それはお氣の毒です、随分もとがかゝつたでせうが、それは損になりますよ。といふのは、

フィラデルフィヤはこれから表へる土地ですからね。この町の連中は半ば破産するか、でなくともそれに近い状態なのです。新しい建物ができるとか、地代が騰貴するとか、一見その反対に見えることもありますが、確かなところ、それは當にはなりませんよ。事實、さついでにふことが我々を破滅させるのですからね。」

それから彼は現に起つてゐる、或はやがて起るはずの、數々の不幸な出来事を、事も細かに話した。お蔭で彼が去つた後では私は憂鬱症にでもなつたやうだつた。商賣を始める前に彼を知つてゐたら、私は恐らく始めなかつたらう。この人はこの表へ行く場所にその後も住んでゐて、同じ調子で話し歩き、凡てが破滅に向つてゐるからと言つて、こゝに家を買ふことを何年も拒んでゐた。そしてとうとう、最初に不吉な豫言を始めた時分の五倍もの代價を拂つて一戸を買つたのを見た時には、私は快哉を叫んだのであつた。

第五章 勤儉力行時代

話が前後するが、前年の秋、私は有能な知人の大部分を集めて相互の向上を計る目的でクラブをつくり、これをジャントー Junto (徒黨・結社等の意) と名づけて、金曜日の晩を集りの日にしてゐた。會則も私が起草したのだが、それによると、各會員は順番に倫理、政治乃至物理學上の問題について少くとも一つの問題を出して、仲間の討論にかけることになつてゐた。また三箇月に一度は何でもよいから自分で論文を書いて提出して、朗讀するといふ決りであつた。討論も、議長の司會の下に、議論のために議論するとか、相手を言ひ負かすために議論するとかではなしに、眞理探求といふ眞面目な精神で行ふはずで、暫く後には、議論が喧嘩腰になるのを避けるために、獨斷的な話し方や眞向からの反對論などは禁制となり、それを破るものは小額の罰金に處することになつた。

最初の會員は次の人々である。ジョーゼフ・ブレントナルは公證人の證書の寫字をしてゐた、性質の素直な友達思ひの中年の男で、とても詩が好きだつた。手當り次第の亂讀家で、自分でも可成り書けた。また細々とした裝身具などを作るのが大變器用で、言ふこともなかなか氣が利いてゐた。

トマス・ゴッドフリ Thomas Godfrey (1736)⁽¹⁷³³⁾、獨學の數學者。その道ではえらい男で、後に現在ハドレー四分儀と呼ばれてゐるものを發明した人である。しかし専門以外の事となると殆ど無知で、また人好きのする方ではなかつた。私の知つてゐるえらい數學者は大抵さうなのだが、彼も人の言ふことには何にでも普遍的な正確さを要求し、いつも些細の事を否定したり、區別したりして、皆が話を進めるのにうるさくて仕方がなかつた。彼は間もなく脱會した。

ニコラス・スカル、測量師。後に測量監督になつた。本好きで、たまには詩も書いた。

ウィリアム・パースンズ、もとは靴屋の職人であつたが、讀書好きで、初め占星學研究の目的で數學を勉強し、かなりの大家になつたが、後にはそれを笑つてゐた。彼も亦測量監督になつた。

ウィリアム・モリリッチ、指物師。全く素敵な腕利きで、また着實伶俐な人物であつた。

ヒュー・メレヂス、スチーヴン・ポッツ、ジョージ・ウェブの人物に就いては前に述べた。

ロバート・グレース、多少財産のある青年紳士。鷹揚で、元氣がよく、頓智があつて、よく洒落を飛ばし、また友達好きだつた。

最後にウィリアム・コールマン。當時は或る商人の番頭で、年は私と同じ位。私の知つてゐる人物の中で、最も冷靜明晰な頭腦と、善良な心情と、嚴肅な道德觀の持主であつた。彼は後には有名な商人になり、また吾が州の判事にもなつた。私との交遊は彼が死去する迄、四十年以上も中絶することなく続いた。このクラブも亦殆ど同じ頃まで存続し、當時の州内で一等優れた哲學、道德、政治の學校といふべきものとなつた。なぜかといふと、クラブで朗讀された問題は、一週間後に討論されるので、自然私達はその間にちゃんとした事が言へるやうに、その時その時の問題に就いて注意深く勉強するやうになつたからである。その研究討論も、會則に従つて、相手を不快にするやうな言ひ方は避けたので、どの會員も品のよい會話をする習慣ができた。クラブが長く續いたのはそのためで、このクラブのことは今後時々話すことがあるだらう。

しかし私がこゝでこの話をするのは、この連中のみんなが骨を折つて仕事をとつてくれたため、ずるぶん利益を得たことが云ひたいからである。特にブレントナルはクエーカー教徒から彼等の歴史を書いた四十葉の印刷物の註文をとつてくれた。その仕事の残りはキーマーの所でやつた。

これは値段が安かつたので私達は非常に激しく働いた。判は一つ折、プロ・パトリア型、活字は本文はパイカ、註は長プリマだつた (Pica は十二ポイント大の活字、Long primer は十ポイント大の活字。Pro patria はサイズの名、字義は for one's country の意である。)

私が一日に一葉づつ組み、メレヂスがそれを印刷して行つた。翌日の仕事の準備のために活字の解版を終ると、夜の十一時、或はもつと遅くなることもよくあつた。他の友達がちよいと世話をしてくれる小さな仕事のため豫定が遅れたからである。しかし一日に一枚づつは必ず續けようと私は堅く決心してゐた。或る晩版を締めて、これで今日の仕事も濟んだと思つてゐると、どうしたのかその一つが壊れて二頁分めちやく／＼になつたことがあつたが、私はすぐさま解版して全部組み直すまでは床に就かなかつたものだ。そしてこの勤勉振りが近所の人の眼にとまり、次

第に評判もよく、信用もついて来た。特にこんな話も聞いた。商人達が毎晩集るクラブで新しい印刷所の話が出た時に、この土地には既にキーマーとブラッドフォードと云ふ二軒の印刷屋があるのだから、私達はきつと失敗するに違ひないといふのが一般の意見だつた。ところがベアド博士(ずつと後に郷里のスコットランドのセント・アンドルーでお前と二人で會つた人だ)の意見は反對だつた。

「何故かと云へば、」と博士は云つた、「あのフランクリンのやうに働く者は、私はつひぞ見たことがありません。彼は私がクラブから歸る時にまだ仕事をしてゐます。そして朝は近所の人起きないうちに、もう働いてゐますからね。」

この話が他の連中を感心させ、その後間も無く、その中の一人が文房具を卸して上げようと申込んで来たが、私達はまだ小賣商賣をやる考へはなかつた。

自分の勤勉振りを事細かに、また無遠慮に述べ立てるのは、自慢話をするやうだが、さうではない。これを讀む私の子孫のものに、勤勉の徳のお蔭で私がどんなに得をしてゐるかをこの物語の全篇から讀みとつて、この徳の效用を悟つて貰ひたいからである。

ジョージ・ウェップは金を貸してくれる女友達が出来たので、その金でキーマーとの残りの年期契約を解き、日傭職人に雇つて欲しいと私達のところへやつて来た。その頃はまだ私達は彼を雇ふことは出来なかつたが、私は後にかにも「内々だがそのうちに新聞を始める積りだから、さうすれば働いて貰ふ仕事も出来るだらう。」と打明けてしまつた。この計畫は見込みがあると考へたのには、その時彼にも話したことだが、次のやうな根拠があつた。當時新聞はブラッドフォード発行のものたつた一つであつたが、くだらぬ新聞で、経営はおそろしく拙いし、さつぱり面白くなかつた。それでゐて儲つてゐるのだから、もつとよい新聞を發行したら受けない心配はないと無造作に私は考へてゐたのである。私はウェップには人にしやべらぬやうに言つたのだが、彼はキーマーに話してしまつた。するとキーマーは、私を出し抜くために、自分の方に新聞發行の目論見があると大急ぎで公表したのである。そしてウェップはその方に雇はれることになつた。これには私も胸糞が悪かつたが、すぐこつちの新聞を出すことも出来ないで、むかふの計畫の邪魔をするため、「出過ぎもの」と云ふ題で、面白い話を數篇書いてブラッドフォードの新聞に載せた。ブレントナルがその後をうけて、何箇月か連載した。このために世間の注意はこの新聞に集つて、キーマーの計畫は、私達が茶化したり、冷かしたりしたので無視されてしまつた。それでも彼は新聞を出し始め、九箇月近く續けてゐたが、讀者は一番多い時でもたつた九十人といふ有様で、とう／＼彼は僅かの金で私に譲りたいと言つて来た。私は少し前から引受ける準備をしてゐたので早速譲り受けた。數年たつとこの新聞が大それ儲かるやうになつた。

* 一七二九年九月廿五日からフランクリンは新聞を出し始めた。紙名は Pennsylvania Gazette. (譯者)

私達はまだ共同で仕事をしてゐたのだが、私はどうも「私」と單數の言葉がすぐ口に出るやう

だ。それといふのも、仕事の實際の切り盛りは、私が一手に引受けてゐたからであらう。メレヂスは植字は全く出来ないし、印刷は拙いし、それに白面しろめんであることは殆どなかつた。私の友達は私がこの男と組合でやつてゐるのを残念がつてゐたが、私としてはそれを巧く利用するより仕方がなかつた。

さて私達が新聞を出してみると、それは今までこの州で出たものとは斷然違つてゐた。活字もいふし、印刷もきれいだつた。それに、當時バーネット知事とマサチューセツツ州會との間に論争が行はれてゐたので、私はその批評を書いて載せたのが識者の注意をひき、新聞と新聞の經營者のことが評判になつて、二三週間もたつとその人達が皆購讀者になつてくれた。

多くの人々がこれに見習つたので、新聞の部数はふえる一方であつた。これは私が少しばかりものを書くことを習つておいたのが役に立つた最初の一例である。もう一つは、今度の新聞の經營者はなか／＼筆もたつといふことがわかつたため、重立つた人々が私を後援したり、激勵したりしておくといふことがわかつたため、重立つた人々が私を後援したり、激勵したりしておくと便利だと考へてくれたことである。ブラッドフォードは相變らず議事録や法文や、その他役所關係のものを印刷してゐた。彼は州會が知事に出した建白書を刷つたことがあつたが、不手際で誤植だらけだつた。私達はそれをきれいに正確に印刷し直して各議員に一部づつ送つた。これであつた。この違ひが議員連にも分つたため州會内に私達の味方の勢力がふえ、翌年は私達が州會御用の印刷人に選ばれたのである。

州會にゐた友達の中では、前に言つたハミルトン氏のことを忘れてはならない。彼はその頃英國から歸つて州會に席を持つてゐたが、この事では非常に私のために奔走してくれた。その後いろいろな場合、世話になり、死ぬまでひいきにして貰つたものだ。

丁度この頃ヴァーノン氏が催促といふわけではないが、借金のことを言つてきた。私は重々承知してゐるが、今暫く猶豫願ひたいと、正直に言つてやつた。彼は承知してくれた。私は拂へるやうになると早速、元金に利息を添へ、厚く感謝の意を述べて返済した。これでこの過失も多少は償ひをつけたことになつたのである。

しかし今度は又別の、思ひがけない、厄介な事が起つた。メレヂスの父は、私との約束に従つてこの印刷所の費用を拂つてくれるはずだつたが、百ポンドの現金しか融通出来ず、それだけではもう拂つてあつたが、残りの百ポンドは例の商人に借りになつてゐた。商人の方では待ちきれなくなつて、私達全體を訴へて來た。私達は保證金を出して一時延ばしたが、期限内に金が出来ないと、訴訟は進行し始め、判決、續いて執行といふ運びになり、さうなつては、見込みの多い私達の事業も私達とも／＼破滅となるに違ひなかつた。債務支拂ひのために、多分半値ぐらゐで、印刷機や活字も人手に渡つたらうから。

こんな窮境にあつたとき、信實の友人が二人お互に知らずに、別々に私の所へ來て、出来ることとなら、事業を私一人で引受けるやうにするがよい、それに必要な金はいくらでも融通しよう、と、

私から頼んだわけではないのに、言つてくれたのである。この人達の親切は今まで忘れたことがないし、これからも、物を覚える力がある限り、忘れることはあるまい。彼等は私がメレヂスとの組合を續けるのは好まなかつた。メレヂスは酔つぱらつて町を歩いたり、居酒屋で下等な賭博に耽つたりして、大そう私達の信用をおとしめてゐるといふ話であつた。この二人の友達とはウィリアム・コールマンとロバート・グレースである。私は彼等に次のやうに言つた。

「メレヂス親子に契約上の義務を果す見込みが少しでも残つてゐる間は、私の方から別れ話を持ち出すわけにはゆきません。といふのは、今までに彼等がしてくれたこと、出来さへすれば今後もしてくれるだらうこと、それに對しては私は大變恩義があると思ふからです。けれども先方でどうしても義務の履行が出来ず、組合を解散するよりほかなくなれば、その時こそ、自由にあなた方の御援助を受けることが出来ませう。」

かうして話は一時そのまゝになつてゐたが、私は或る日メレヂスに話してみた。

「君のお父さんは僕達の仕事で君の引受けてる役割が氣に入らないものだから、君のためなら出す金も二人のためとなると出すのが嫌なのではあるまいか。もしさうだつたら、言つてくれたまへ。僕はこの仕事は全部君に譲り、別に自分の仕事を始めようと思ふから。」

「さうぢやないんだ、」と彼は言つた、「親爺はほんたうに當が外れて、ほんたうに金が出せなくなつてゐるのだ。僕もこの上親爺に心配させたくないと思つてゐる。それに僕はこんな仕事には不向きだとやつと悟つたんだ。もと／＼百姓育ちのくせに、三十にもなつてから都會へ出て来て、年期奉公までして新規な商賣を覚えようとしたのは愚かなことだつた。僕達ウェールズ人には、土地が安いので北カロライナへ移住してゐるのが多いが、僕もみんなと一緒に出かけ、元の仕事をやらうかと思つてゐる。君には助力してくれる友人は幾人もあるだらう。もし君が組合の債務を引受け、親爺が融通した百ポンドを返してくれ、又僕の個人的な細かい借金を支拂つた上に、三十ポンドと新しい鞍を僕にくれるなら、僕は自分の持ち分を抛棄して君に全部を譲り渡さう。」

私はこの申出に賛成し、直ちに書類を作成し、署名捺印を了した。私は彼の要求通りのものゝと與へた。彼は間もなくカロライナに出掛けたが、翌年二通の長文の手紙をよこした。その地方の氣候、地味、農業のことなどを書いたものだが、かういふことにかけては彼の判断はしつかりしてゐたからなか／＼立派な報告で、新聞に載せたら、大そう讀者に喜ばれた。

彼がゐなくなつてしまふや否や、私は二人の友達のことを思ひ浮べた。私はその一人を選んで片つ方の氣を悪くさせるやうなことはしたくなかつたので、二人が出してくれようといふ所要の全額の半分を一人から、残りの半分をもう一人から借りうけた。そして組合解散の事實を廣告し、私の名儀で仕事を續けて行つた。これは一七二九年かその前後だと思ふ。

この頃民衆の間には、紙幣を増發せよといふ要求が起つてゐた。といふのは州内に僅かに一萬

五千ポンドの紙幣があるだけで、それもやがて償還されることになつてゐたからである。金持連中は増發には反對だつた。彼等はニュー・イングランドの例のやうに、紙幣價格が下落して、すべての債權者が損失を受けるだらうと心配して、そも／＼紙幣といふものに反對だつたのである。私達はジャントー・クラブでこの問題を討論したが、私は増發論者だつた。といふのは、一七二三年に鑄造された最初の小額貨幣が多額の利益を齎し、そのために州内の取引・企業は増大し、戸口も増加したのだと信じてゐたからである。今では古い家にも全部人がはいり、新しい家も澤山建つてゐるが、私が巻パンを嚙りながらフィラデルフィアの街々を始めて歩き廻つた頃は、今でもはつきり覚えてゐるが、ウォルナット街の一丁目と二丁目の間には、扉に貸家札のかゝつた家が澤山あつたし、チェスナット街やその他の街でも同様で、この街の住民は後から後からなくなつてしまふのではないかと思つたくらゐだつたのである。

議論してゐる中に私はこの問題にすつかり熱中し、「紙幣の性質と必要」と題する匿名のパンフレットを書いて印刷した。それは一般市民には非常に評判がよかつたが、金持連中には嫌はれた。何故なら、このパンフレットのために、紙幣増發を要求する聲は益々昂まつたからである。ところが金持の仲間には、私の議論に反駁出来る筆者が一人もゐなかつたので、彼等の反對は氣勢が揚らず、増發案は多數を以て州會を通過した。州會の私の友人達は、私の功績が相當あつたことを認め、それに報いるには、紙幣の印刷を私にさせるがよいと考へた。これはとても割のいい仕事で、お蔭で私は大變助かつた。これは私が文を綴ることが出来たために得た今一つの利益であつた。

紙幣の效用は時が経ち實際の成績が現はれるに及んで全く明かになつたので、その後はその基礎原理に關しては大して議論が起ることはなかつた。そのため紙幣は間もなく五萬五千ポンドに、一七三九年には八萬ポンドになつた。その間取引量も戸數も人口も絶えず増大した。もつとも紙幣發行高にも限度があり、それ以上になると有害だらうと私も今は思つてゐる。

その後程なく友人ハミルトン氏の手を通じて、ニュー・キャッスル州の紙幣の印刷の仕事が手にはいつた。これも亦當時の私にとつては結構な仕事であつた。小さい身上しんしやうには小さいものでも大きく見えるものだが、これらの仕事は實際にも大きな利益を私に與へたのである。そのため仕事に大そう勵みができたから。ハミルトン氏は又ニュー・キャッスル州政府の法文や議事録の印刷の仕事もとつてくれた。それらは私がこの商賣を止めるまでは、私の手で續けたものだ。

私は新たに小さい文房具店を開き、各種の書式用紙を揃へた。従來はそんなに正式のものは、こゝいらでは手に入らなかつたものだ。この事では友人プレントナルに助けてもらつた。私はまた紙、羊皮紙、行商人用の安本などを置いた。ホワイトマーシュといつて以前ロンドンで知合ひになつた腕利きの植字工が、この頃私の所へ来て、ずつと私と一緒に勤勉に働くやうになつた。また私はアーカイラ・ローズの息子を徒弟に雇つた。

私は印刷所のために背負つた借金を段々返し始めた。商人としての信用を高め評判をよくするため、私は実際によく働き儉約を守つたばかりでなく、かりにもその反対に見えるやうなことは避けるのに努めた。着るものは質素なものに限り、遊び場所には決して顔を出さなかつた。釣りにも獵にも行かなかつた。なるほど、本に氣をとられて仕事を怠けることはあつたが、たまのことであり、人には分らぬことなので、悪い評判はたゞなかつた。又商賣相應に手堅くやつてゐることを人に見せるために、方々の店で買つた紙を手車に積んで、自分で街を引いて歸つたことも度々ある。かやうな工合で、よく働く、先のある若者だと思はれ、また買つた品物の代金はきちんとは拂つてゐたので、文房具の輸入商で取引を申込んで来るものもあり、本を卸してやらうと云つて来るものもあり、私の店は次第に繁昌して行つた。一方キーマーの所は、日に／＼信用は落ち、商賣は衰へ、とう／＼債權者に支拂ふために印刷所を賣拂はなければならなくなつた。彼はバーバードーズへ行つて、幾年もひどい貧乏暮しをしてゐた。

彼の徒弟のデーヴィッド・ハルリは、私が彼の店にゐた時仕込んでやつた男だが、キーマーの道具を買つて彼に代つてフィラデルフィヤで開業した。ハルリにはずるぶんいゝ友人があつて、相當勢力を持つてゐたから、私も最初はこれは強敵が現はれたと心配したものだ。そこで私は組合でやらぬかと申込んだのだが、彼は一笑の下に拒絶した。それが私には仕合せだつたわけだ。彼は非常に傲慢で、紳士のやうな服装をして、奢つた暮しをし、家を外に遊び歩き、借金を拵へ、

商賣にはちつとも身を入れなかつた。そのため仕事はすつかり無くなつてしまひ、仕様がないうで、キーマーの後を追つてバーバードーズへ渡り、印刷所もそこへ移した。こゝで、この徒弟は昔の主人を日傭職人に雇つたが、彼等は喧嘩ばかりしてゐた。ハルリはいつも借金に追はれて、とう／＼活字も賣り拂ひ、ペンシルヴェニヤへ歸つて百姓をするやうになつた。その活字を買ひ受けた人が、キーマーを雇つて經營したが、數年後にはキーマーも死んだ。

今はフィラデルフィヤには、同業は老ブラッドフォードだけになつた。併し彼は金持で安樂に暮してゐるので、仕事は渡り職人を使つて少しするだけだつたが、別にそれを苦にするでもなかつた。しかし彼は郵便局をやつてゐたので、彼の方がニュースを得る機會が多く、廣告も彼の新聞の方が行渡る範圍が廣いと思はれたので私の新聞よりずつと多かつた。これは彼には有利で、私には不利なことであつた。といふのは、私も實際には新聞の送受には郵便を使つたのだが、私の遣り方は郵便運搬の騎手に賄賂をつかつて内密に持つて行かせたのだから、世間ではさうは思はなかつたのである。ブラッドフォードは意地悪くそれさへ禁じたので、私はずるぶん糖にさはつた。そんな所業は實に卑劣だと考へたので、後に私が彼の代りに郵便局をやるやうになつてからも、そんな眞似はしないやうに氣をつけたものだ。

これまで私はずつとゴッドフリと同居してゐた。彼は妻子と共に私の家の一部に住んで、店の一方を使つてガラス商賣をやつてゐた。もつとも彼は仕事は殆どやらす、いつも數學にばかり凝

つてゐたが。彼の細君は親類の娘を私に世話しようとして、折があると、私とその娘が一緒になるやうに計らつた。そのうちに、私は眞剣に彼女に參つてしまつた。といふのも、その娘が大變いゝ娘だつたからだ。娘の親も乗り氣で、始終夕飯に呼んでくれ、二人を一室に残しておいたりした。そのうちに、いよ／＼話を切り出すところまで進んだので、ゴッドフリの細君が仲にはいつた。私は印刷所の借金の残りを拂へる程度の特參金は附けて欲しいと彼女に言つた。借金の額は、その頃はもう百ポンドを出てゐなかつたらう。先方ではそんな金を出す餘裕はないとゴッドフリの細君が傳へて來たので、それなら家を擔保にして金貸から借りたらよからうと言つてやつた。すると四五日たつて返事が來た。この結婚には不賛成だといふのである。それといふのが、ブラッドフォードに聞いて知つたことだが、印刷屋は儲かる商賣ではない、活字はすぐ駄目になつて、後から後から買はねばならず、キーマーもデーヴィッド・ハルリも次々に失敗したが、私も間もなく彼等の後を追ふだらうといふのであつた。そこで私はその家に入出入りを止められ、娘はへだてられてしまつた。

これは彼等の考へが本當に變つたためか、それとも今更後へは引けぬほど私達は深くなつてゐるから、こつそり結婚するだらう、さうすれば特參金は出さうが出すまいが自由だ、と考へて作り事をしたのか、私は知らない。しかし私はその動機が腑に落ちぬので立腹し、これで打切りにした。後にゴッドフリの細君がやつて來て、先方の意向に就いて大分うまいことを述べ立て、話

の燃りを戻さうとしたが、私はあの一家とはこれ以上關り合ふ積りはないと、きつぱり言つてやつた。これがゴッドフリ夫婦を怒らせて、私達は不和となり、彼等は引越して行つた。私は廣い家に一人ぼつちになつたが、今後もう同居人はおくまいと決心した。

しかしこの事があつてから私は結婚に就いて考へるやうになつた。私は周圍を見廻して、他の方面の知人に話を持込んだりした。だが、印刷屋といふ商賣は詰らぬ商賣だと一般に思はれてゐるので、特參金附の妻を貰ふ望みなんかないと、間もなく私は氣がついた。もしあつたにしても、金がついてゐるといふ外には、氣に入らないやうなものばかりだつた。さういふ間にも、容易に抑へることのできない青年時代の情欲に驅られて、私は身近に現はれた怪しげな女たちと關係を結んだ。これには費用がかかるし大そう不便も伴ふが、殊に悪い病氣を貰ひはせぬかといふ健康上の心配がついて廻り、何よりそれが怖かつたのだが、幸運にもそれは免れることができた。

私とリード嬢の一家との間には、親しい近所附合ひがずつと續いてゐた。初めて私が置いてもらつた時以來、リード家の人達はみな私に好意を持つてゐてくれた。私は度々招待を受け、うちの相談に與かり、たまには役に立つこともあつた。私はリード嬢の不幸な境遇を可哀さうだと思つた。彼女は大概ふさぎこんでゐて、滅多に元氣な顔は見せず、引き籠つてばかりゐた。彼女をこんな不仕合せにしたのは、主として私がロンドンにゐた頃移り氣で心が定まらなかつたためだと私は考へた。尤も彼女の母は氣のいゝ人で、悪かつたのは、私よりも自分の方だと考へて

ゐた。ロンドンに行く前に私達が結婚しようとするのを妨げ、私の留守中にほかの結婚を奨めたのは自分だからといふのである。私達の間には昔の愛情が蘇つたが、今となつては、二人の結婚には大きな障碍があつた。彼女の前の結婚は、夫の先妻がイギリスにゐるといふ噂だつたから、實際無効と看做されてはゐたが、距離の関係や何かでそれを證明するのは容易でなかつた。又夫は死んだといふ噂もあつたが、本當かどうか解らなかつた。假に本當とすれば、彼は借金を澤山残してゐたから、彼の後を引受けるものは、その支拂ひを請求されるかもしれないのである。けれども、私は凡ての障害を押し切つて、思ひ切つて彼女を貰ひ受けた。それは一七三〇年九月一日のことである。しかし心配してゐたやうな不都合は一つも起らなかつた。彼女は善良で忠實な伴侶になり、店にも出てよく私の手助けをしてくれた。私達はとも／＼に繁榮の途を歩み、いつも互に相手を仕合せにするやうに努めたものだ。かうしてあの大きな過失の償ひも、出来るだけはしたわけである。

この頃私達のクラブの集會場は、酒場ではなく、グレース氏の家の小さい一室を特にそれに當ててゐた。ある時私は次のやうな提案をした。

「各種の問題に關する我々の論文中には、各自の蔵書が引用されてゐることが多いから、集會の場所に本を全部持ち寄つて、必要に応じて調べてみることにすると便利だらう。かうしてみんなの書物を集めて共同圖書館を作り、一つところに保管しておけば、その期間中は、めい／＼が他の會員全部の本を使用する便利があり、まるでそれ／＼が全部の本を持つてゐるやうに有益だらう。」

この案は一同の氣に入つて賛成を得た。私達は一番手放してもよいやうな本を持ちよつて、この室の一隅に積み重ねた。冊數は豫想した程多くはなかつた。この文庫は非常に役に立つたが、適當の管理が出来なかつたため不都合が起り、約一年後に解散になり、めい／＼自分の本を持ち歸つた。

さて私は初めて公共の性質を帯びた計畫に手を出した。即ち組合圖書館の計畫である。私が草案を作り、名高い公證人ブロックデンに頼んで定款に作成し、ジャントー・クラブの友達の援助によつて五十名の組合員を得た。組合員は一人につき最初に四十シリング、以後の五十年間は毎年十シリングづつ出す規則であつた。五十年と云ふのは、組合の存續期間である。その後認可を得、組合員は百名に増加した。これが今日各地に行はれてゐる北アメリカ組合圖書館の元祖である。私達の文庫も大したものになり、尙絶えず膨脹を續けてゐる。アメリカ國民一般の言語を改善し、平凡な商人や百姓の知識を高めて、諸外國から來た大抵の紳士に劣らぬだけのものに仕上げたのは、これらの文庫である。また恐らく、全植民地の住民がその權益の擁護のためにあのやうに擧つて抗争に立上つたのも、幾分かはこれが影響によるものであらう。

第六章 十三德樹立

〔譯者註〕 以上の第五章までは、一七七一年にフランクリンが植民地代表として英國にゐた時、當時ニュー・ジャージーの知事であつた息子ウィリアムに宛てた書信の形式で書かれたのであるが、偶々アメリカ獨立運動が猛烈な勢ひで進展したため、フランクリンは靜かに自傳を執筆するやうな閑暇を有しないことになつた。その結果彼の自傳は長い間そのままになつてゐたのであるが、友人等の自傳完成を勸告乃至要請するものが頗る多かつた。殊に、その間にフランクリンの聲望は愈々高まり、その自傳の出版は國民的意義を有すると考へられたため、書を寄せて執筆繼續を要望するもの相次いだ。そこでフランクリンもその要望に答へようと決心し、一七八四年、執筆中絶後十三年を経て、パリーの近郊パシーで再び筆を起した。

フランクリンは續稿の冒頭に、彼の自傳完成を要望する友人の手紙二通 (Abel James 及 Benjamin Vaughan の手紙) を掲げ、さて次のやうな序文で稿を繼いでゐる。

「上掲の書信を受取つてからもうかなりになる。併し今まではとても多忙で、これらの手紙で求められてゐる要望に應へることは、考へて見ることもさへ出来なかつた。それに、執筆するにしても、記録の揃つてゐる故國の方が都合がよいわけである。記録があれば、記憶の及ばぬところを補ひ、日時なども確かめることができるから。併し何時歸れることか見當がつかぬし、ちやうど多少暇のある場合だから、記憶を辿つて出来るだけ書くことにする。もし生きて歸國することが出来たら、向ふで訂正加筆することにしよう。

前に書いたものの寫しが手許にないので、フィラデルフィヤ組合圖書館をどんな方法で建てたか、その経緯を話したかまだかはつきりしない。この圖書館も初めは小さかつたが、今では大そう立派なものとなつてゐる。併し、何でもこの仕事の話 (一七三〇年) の邊まで書いたやうに思ふから、こゝではその話から始めることにし、もし前に話してゐたら、後で削除することにしよう。」

私がペンシルヴェニアで開業した當時は、ボストン以南の植民地にはしつかりした本屋は一軒もなかつた。ニュー・ヨークやフィラデルフィヤでは、印刷屋が同時に文房具屋であつたが、扱つてゐるものは紙、曆、俗曲集それでありふれた教科書二三種などに過ぎず、愛書家は英國から本を取り寄せる外はなかつた。ジャントー・クラブの會員はめいめい多少の藏書を持つてゐた。私達は最初は酒場で會合したのだがそこを止めて、一部屋借りてクラブの集會所としてゐた。そ

の室に皆の本を持ち寄ることによつては、私には提案した。さうすれば會で議論する時その場で調べる事が出来るだけでなく、家で讀みたいと思ふ本はめい／＼自由に借り出すことが出来て、みんなに都合がいゝと思つたからである。この提案はやがて實行に移され、しばらくは皆を満足させた。

集まつた書物は多くはなかつたが、その有益なことが分つたので、私は公共の組合圖書館を始めて讀書の利益をもつと普及しようと企てた。私は計畫案と必要な會則の概要を起草し、練達な公證人チャールズ・ブロックデン氏に委嘱して、これをすべて定款の形式に改めてもらつた。會員はこれに署名すればよいのである。各會員は、定款によつて、最初の書籍購入費として一定額を、以後追加購入費として一定の年額を、現金で支拂ふ義務があつた。當時フィラデルフィヤでは讀書家の數は非常に少く、又私達の大多數は甚だ貧乏だったので、私が非常に骨を折つたけれども、かういふ目的で、最初にそれぞれ四十シリング、それから年々十シリングづつ出して、いといふ人は五十人より多くはなかつた。(その大部分は若い商人だつた。) こんなに僅かな金で私達は始めたわけである。書籍は輸入され、會員に貸出すため圖書館は一週に一回づつ開かれた。會員は期限内に返却を怠る時は定額の倍額を支拂ふといふ證書を入れて本を借りるのであつた。かやうな組織が有益であることは間もなく明かになつたので、方々の町や州でこれを真似るものが出来て来た。どの圖書館も皆階でだん／＼大きくなり、讀書は廣く流行するやうになつた。興味を讀書から逸らすやうな娛樂機關が調つてゐなかつただけに、人々はよく本に親しみ、幾年も経たぬうちに、他國の同階級の人々より教養もあり知識にも富んでゐると外國人に觀察されるほどになつた。

前述の定款は五十年の間私達は勿論、相續人等をも拘束するはずであつたが、私達がこれに署名しようとした時、公證人ブロックデン氏が云ふには、「君達は今は若いが、この證書の期限満了の時まで生きてゐる人はまづありますまいね。」ところが、當時の會員中現に存命の者が數名ある。尤も數年後に認可を得て會は法人組織となり、永久的な存在となつたので證書そのものは無効になつたが。

入會を頼んで歩くと反對したり澁つたりする人があるので、直ぐ氣がついたことであるが、少しでも人より有名になりさうな何か有益な計畫を思ひついたやうな場合に、自分がその發起人だといふ風に話を持ち出しては、その計畫を成し遂げるのに必要な周囲の人々の援助を得ることも容易でないものである。それ故私は出来るだけ自分を表面に出さず、この計畫も數人の友人の目論見で、自分は頼まれて皆から愛書家と思はれてゐる人のところを話して廻つてゐるのだと説明した。この方法をとつてから、仕事は一そう圓滑に運んだ。その後このやうな場合には私はいつもこの手を使つたものだ。そして大概うまく行つてゐるところから見ても、全く良い方法だと思ふのである。現在名譽心を満足させることを少し我慢すれば、後で償ひは十分に來るのである。暫

I had a young family coming onto be educated,

くは誰の功績かはつきりせず、君達よりも名譽心の強い男がそれは自分の手柄だとあつかましく主張することがあるとしても、その時は君達を嫉んでゐるものですら、よく偽りの名譽を暴露し、正當な持主にそれを返さうと公正な態度をとるものである。

この圖書館が出来たため、私は絶えず勉強して修養する便宜を得、毎日一二時間は勉強の時間にとつておき、かくして嘗て父が與へてくれるつもりで果さなかつた高等教育の缺陷を、ある程度まで補ふことが出来たのである。實際讀書が私の選んだ唯一の楽しみで、私は酒場へも行かねば、勝負事もせず、その他の遊びに時を費すことも全くなかつた。仕事の方では相變らず勤勉で決して撓まなかつた。もつともそれは止むを得ないことでもあつた。私は印刷所のために借金をしよつてゐたし、やがて子供が生れて來れば、教育しなければならぬし、また私より前にこの地で開業してゐる二人の商賣敵と競争もしなければならなかつたのだから。だが、日に日に暮し向きはよくなつて來た。もとからの習慣で私は今も儉約だつた。又私が子供の頃父がいろ／＼の教訓を説いてくれたうちでも、「汝その業に勵む人を見るか、かゝる人は王の前に立たん、いやしきもの賤者いんしきものの前には立たじ。」といふソロモンの箴言を度々繰返してくれたもので、従つて私も勤勉こそ富と名聲を得る手段だと考へ、これに勵まされてゐたのである。尤も私は文字通りに王の前に立つやうになると思つてゐたのではなかつたが、後にそれは事實となつて現はれた。といふのは、私は五人の王の前に立ち、殊にその一人、デソマークの王は陪食の榮をさへ賜つたのである。

英國の諺にかういふのがある。

身上ふやすにや

女房が大事

私同様勤勉と節約を愛する妻を持つたことは幸運なことであつた。妻はパンフレットを折つたり綴ぢたり、店番をしたり、製紙業者に賣るため古リンネルのぼろを買つたりして、まめ／＼しく仕事を助けてくれた。役にも立たぬ召使等は一人も置かなかつた。食事は簡素を旨とし、家具も一番安いものを使つた。例へば朝食は長い間パンと牛乳だけで、茶はなかつた。それも二ペンスの陶器茶碗に入れ、白鐵の匙で喰べるのであつた。併し、儉約の主義にも拘らず、贅澤といふものが、どんな風に家庭に入り込んで、次第にひろがつてゆくものか、注意して見るがよい。ある朝食事に呼ばれて行つて見ると、磁器の茶碗に銀の匙がついてゐるではないか。これは妻が私に相談せずに買ったので、彼女はこのために二十三シリングといふ大金を出したのである。これに對して、「私の夫は銀の匙と磁器の茶碗を使ふ値打があります、近所の方達だつてさうなんですもの。」——かういふ外には、妻は言譯も出來ず、あやまることも出來なかつた。これが金屬器具と磁器が私の家に現はれた最初であるが、その後、年と共に身上のよくなるにつれて段々に數を増し、遂には價額數百ポンドに達するに至つた。

私は宗教上は長老派教徒として教育されてゐた。併しこの派の教義の中には、例へば永遠の神

意、神選、定罪等私には不可解なものがあつた。その他にも信じられぬものがあつた。また日曜は私の勉強日だつたので、日曜の集會には早くから缺席してゐた。併し、宗教上の主義を全く持たなかつたのではない。例へば、神の存在、神が世界を創造し、攝理に従つてこれを治め給ふこと、最も神意に叶ふ奉仕は他人に親切をつくすことであること、靈魂の不滅、すべての罪と徳行は、現世又は來世に於いて、必ず罰せられ又は報いられること等に就いては、私は決して疑つたことはない。これらはあらゆる宗教の本質であると私は考へた。そしてこれらの點では、我が國の宗教は皆一致してゐるから、私はすべての宗教を尊敬したのである。尤も各宗派にはこの本質的なものと共に、他の信仰箇條——人間の道德性を鼓舞、助成乃至強化するやうな傾きを持たず、むしろ私共を分裂させ、互に不和にするやうな性質の信仰箇條が混ざつてゐるので、その度合に應じて尊敬の程度は違つてゐたが。私は最も悪い宗派でもいくらかの役に立つと考へて、かやうにすべての宗派を尊敬してゐたので、他人が自分の宗教に對して抱いてゐる尊崇の念を傷つけるやうな議論は一切避けることにした。我が州にも段々人間がふえて、新しい禮拜所が次々に必要になり、大抵は有志の寄附によつて建てられるのであつたが、さういふ時、私は宗派を問はず、心ばかりの寄附は續けたのであつた。

私は公式の禮拜には滅多に出席しなかつたが、やり方さへよければ、結構なことだし、有益なことでもあると考へてはゐた。そしてファイラデルフィヤで唯一人の長老派の牧師及びその集會を維持するために、年々の獻金もきちん／＼出してゐた。この牧師は友人として時々私の所へやつて來て、彼の説教に出席するやうに忠告した。私も時々説得されて出かけたもので、或る時などは、日曜日を五回も續けて出席したこともあつた。もし彼が立派な説教師であると思へたならば、勉強を進めて行くのに日曜の餘暇が必要ではあつたが、多分私はずつと續けて出席したであらう。併し、彼の説教は主として神學上の論争か、或はこの宗派獨得の教義の説明であつた。それらはすべて私には無味乾燥で興味を惹かず、又教へられるところもなかつた。といふのは彼は道德上の原理に就いては一つとして説くことがなかつたし、それに力を入れるでもなかつた。彼の説教の目的は善良な市民を作るといふよりも、長老派に仕込むことにあるやうに見えた。

終ひに彼はピリピ書第四章の次の一節を説教の題にした。「終りに言はん兄弟よ、凡そ眞なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そ潔よきこと、凡そ愛すべきこと、凡そ令聞あること、いかなる徳、いかなる譽にても、汝等これを念へ。」私はこのやうな題の説教なら、必ず何か道徳的な話が聽けるものだと思つた。ところが彼は、使徒が言はんとしたことは次の五點にあると云つただけであつた。即ち、第一、安息日を聖日として守るべし。第二、聖書を熟讀すべし。第三、公式禮拜には規則的に出席すべし。第四、聖餐を拜領すべし。第五、神の僕たる牧師にふさはしき尊敬を拂ふべし。これらは皆善いことではあらう。併し、私はその題目から期待したものは全く種類の違つた善行であつた。私は他の説教とても同様で、私の求めるものは聞か

れまいと失望し、愛想をつかして彼の説教には二度と出席しなかつた。私は數年前(一七二八年) 自分局の一寸した禮拜文即ち祈禱形式を作つて、それに「信仰箇條と宗教的行爲」と題をつけておいたが、私は再びこれを使ふことにして、もはや公式の集會には出席しなかつた。私のやり方は非難すべきことかもしれないが、これ以上とやかく辯明はしないでおく。私の今の目的は事實を述べることで、その言譯をすることではないから。

私が道徳的完成への到達といふ不敵な、而も熱烈な望みを立てたのはこの頃であつた。私はいかなる時にも過ちを犯さずに生活し、生れながらの性癖や、習慣や、或は交友のために陥るやうな過ちは、すべて克服してしまひたいと思つた。自分は何が善で何が惡であるかは分つてゐる、或は分つてゐると思つてゐるのだから、常に善を爲し、惡を避けることが出来ない譯はないと考へたのである。併し、やがて私は思つたよりずつと困難な仕事に手をつけたのだといふことに氣がついた。一つの過ちに陥らぬやうに氣をつけて用心してゐると、思ひ掛けず、他の過ちに襲はれることがよくあつたし、うつかりしてゐると習慣が首を出して來るし、性癖の方が強くて理性では抑へつけられないこともちよくあるといふ始末である。とうとう私は次のやうな結論に達した。即ち「完全に道徳を守ることが、同時に我々の利益である」といふやうな單に思辨的な信念のみをもつては到底過失を防ぐことはできない。確實に、不變に、常に正道を踏んで違はぬといふ自信を得るためには、まづそれに反する習慣を打破し、良い習慣を作つてこれを不拔のものとしなければならぬといふのである。そこで、この目的のために私は次のやうな方法を試みた。私が今までに讀んだ本には、いろ／＼の種類の道徳が列擧してあつたが、その目録に載つてゐる徳の數は、多いのもあれば、少いのもあつた。それは著者によつて同じ名稱を用ひながら、その内包する意義には廣狹の別があつたからである。例へば、節制の徳は、これを飲食に限つてゐる著者もあれば、その意味を廣めて、あらゆる快樂、食慾、性癖、性慾、激情、その他貪欲や野心までも含めて、これらのものを適宜に節制することだとする人もある。私自身は明確を期するため、少數の名稱に種々の意味を含ませるよりも、多くの名稱に分類して、その各々の含む意義は狭く限定しようと考へた。そこで私はその項目分に必要でもあり又望ましくも思はれたすべての道徳を十三箇の名稱に含めてしまひ、その各々に短い戒律を附けたが、それにはその徳の範圍がはつきり現はれてゐる。

その徳の名稱及び戒律は左の通りである。

- 第一 攝生 飽くほど食ふなかれ。酔ふまで飲むなかれ。
- 第二 沈黙 自他に益なきことを語るなかれ。駄辯を弄するなかれ。
- 第三 規律 物は凡て所を定めて置くべし。仕事はすべて時を定めて爲すべし。
- 第四 決斷 爲すべきことを爲さんと決心すべし。決心したることは必ず實行すべし。
- 第五 節約 自他に益なきことに錢を費すなかれ。即ち浪費するなかれ。

第六 勤勉

時間を空費することなかれ。常に何か益ある事に従ふべし。無用の行ひはすべて断つべし。

第七 誠實

詐りを用ひて人を害することなかれ。心事は無邪氣に公正に保つべし。口に出だすこともまた然るべし。

第八 正義

他人の利益を毀損し或は與ふべきを與へずして人に損害を及ぼすべからず。極端を避くべし。顧みて我に罪ありと思はば、人の非難と不法を忍ぶべし。

第九 中庸

身體、衣服、住居に不潔の痕を存せしむべからず。

第十 清潔

小事、日常茶飯事、又は避け難き出来事に平静を失ふことなかれ。

第十一 平靜

………

第十二 純潔

………

第十三 謙讓

イエスやソクラテスに見習ふべし。

私はこれらの徳がみな習慣になるやうにしたいと思つたので、同時に全部を狙つて注意を散漫にするより、一時に一つづつの徳に注意を集中する方がよいと考へた。そしてその徳が修得出来れば、つゞいて他の徳に移り、かやうにして十三徳全部を次々に我が物としようと思つたのである。或る徳を先に修得しておけば、他のいづれかの徳を修得するのが容易にならうと思つたので、私は前に擧げたやうな順序に徳を排列したのである。第一は攝生の徳である。何故かと云へば、古くからの習慣の絶え間のない誘引や、不斷の誘惑の力に抗して、常に警戒を緩めず、用心

を續けるには、頭腦の冷靜と明晰とが必要であるが、それは攝生によつて助長されるものだからである。この徳をすつかり物にしておけば、沈黙の徳はずつとやさしくなるだらう。私は徳を進めると同時に、知識をも得たいと望んでゐたが、知識は、人と談話する場合でも、舌の力よりは寧ろ耳の力によつて得られると考へたので、くだらない仲間だけに喜ばれるやうな饒舌、地口、冗談などに耽る習慣（それが私の癖になりかけてゐた）を打ち壊したいと願つた。それゆゑ沈黙の徳を第二に置いたのである。これと次の規律の徳の二つを守ることができれば、計畫や、研究にあてる時間もつと出来るだらう。決斷の徳が一度習慣になつてしまへば、これに次ぐ諸徳を得るために斷乎として努力を續けることが出来るやうになるだらう。また節約と勤勉のおかげで、残つてゐる借金を抜けることが出来、暮しも豊かに、一本立ちになることが出来れば、誠實とか正義とかその他の諸徳を實行することももつと容易くなるだらう。さて私はピタゴラスの金言集の忠言に従つて、毎日検査することが必要だと思つたので、次のやうな方法を案出して検査することにした。

* ピタゴラスはその金言集の中で夜就寝時に一日の所業を反省し彼の述べた訓言に背くところはないか再思せよと勸めてゐる。

私は小さい手帳を作り、それぐの徳に一頁づつ割當てた。各頁に赤インキの罫を引いて七行の縦欄を作り、その各々を各曜日に割當てて曜日の頭字を書き込んだ。次にこの縦欄に交叉して

神のましまさば、
神は徳をこそよみしたまはめ。
きて、神のよみしたまふもの、
幸ならざらんや。

もう一つのはキケロ Marcus Tullius Cicero (前106(?)—48. ローマの大雄辯家、政治家、哲學者。コンスルとな殺された。英語風にシセロともいふ。)の言葉からとつた。
國父と尊敬されたが後に三頭政治家に憎まれ、國を逐はれ遂に

「おゝ、人の世の道しるべなす學問よ！ 徳を求めて倦まず、諸々の惡徳を驅逐する學問よ！ 汝の訓に従ひ有徳に過せる一日は、罪に包まるゝ永生に勝れり。」
更にもう一つはソロモンの箴言で智慧と徳に就いて述べたものである。

「その右の手には長壽あり、その左の手には富と尊貴とあり。その途は楽しき途なり、その徑すぢは悉く平康し。」

神は智慧の源泉であるから、智慧を得るために神の助けを求めるとは當然で、又必要なことだと私は考へた。この目的のために、私は次のやうな短い祈禱文をつくつて、毎日これを唱へるため、検査表の冒頭に書き加へた。

「おゝ偉大なる神よ。恵み深き父よ。慈愛深き指導者よ。まことに益あるものを見出すかの智慧を増させたまへ。その智慧の指し示すことを爲し遂ぐる決意を強めさせたまへ。我と同じく汝の子なるものに對するわがつとめを嘉したまへ。そは汝の絶えざる恵みに對してわが爲し能ふ唯一の報なり。」

私は又時々トムソン James Thomson (1700—48. 英國の詩人。"Seasons", "The Castle of Indolence"; その他の作がある。自然詩人として知られる。)の詩からとつた短い祈禱文をも使つた。それは次のやうなものである。

光と命の父、汝至高の神よ。
我に善きことを教へ、
御姿を示したまへ。
愚かしきこと、空しきこと、惡しきこと、
なべての卑しき仕業より我を救ひたまへ。
智慧と心の安らぎと、清き徳もて
我が魂をつちかひたまへ。
聖にして、實あり、萎ゆることなき
祝福を與へたまへ。

規律の徳に附した戒律は、仕事はすべて時を定めて爲すやうに命じてゐる。それで私の小さい手帳の中には、平日の二十四時間をどう使ふかを定めた次のやうな計畫を書き記した一頁があつた。

時間表

朝 設問。

「今日は如何なる善行を爲すべきか」

起床、洗顔、祈禱。一日の計を立て、決意をなすこと。現在の研究を続けること。朝食。

仕事。

讀書又は帳簿に目を通すこと。晝食。

仕事。

整頓。夕食。音楽。娯樂、又は雑談。一日の反省。

睡眠。

晝

午後

晩 設問。

「今日は如何なる善行を爲したか」

4 3 2 1 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 12 11 10 9 8 7 6 5

夜

私はこの自己批判の計畫實行に取りかかり、時々中斷しながら、長らく繼續した。自分で思つたよりずつと過失が多いのには驚いたが、感心にそれは次第に減つて行つた。私の小さな手帳は、新規のコースにはいつて新規の過失の記號をつける場合、古い過失の記號を紙面から擦り消して空所を作つたので、穴だらけになつてしまひ、時々新調しなければならなかつた。それが面倒なので、私は備忘録用の象牙の薄板に表と戒律を轉寫した。線を引くには赤インキを用ひてなかなか消えないやうにし、過失を記すのには黒鉛筆を用ひた。だから、過失の記號はスポンヂに水を含ませて造作なく消すことができた。暫くたつてからは私は年に一回しかこれを實行しなかつた。更に後には數年に一回しかやらす、しまひにはすつかり止めてしまつた。海外に渡航し、種々雑多の用務に携はつたので、出来なくなつたのである。だがこの小さい手帳はいつも携帯してゐた。規律正しくしようといふ計畫が私には一等面倒なことであつた。その人の職業が自由に時間の切り盛りを許すやうな場合、例へば日雇の印刷工のやうな場合なら、實行も出来るだらうが、店の主人となつては嚴格に時間を守ることは不可能であらう。といふのは、店の主人といふ者は世間附合ひもしなければならず、勝手な時間に用談に来る客にも始終應對しなければならぬのだから。紙類やその他の物の置場を規律正しくすることも亦非常にむづかしいことだつた。私は子供の時から秩序立つたやり方には慣れてゐなかつた。私は記憶力がづぬけてよかつたので無秩序から起る不便などは餘り感じなかつた。従つてこの項目を守るにはさんぐ、苦しい思ひをした。

規律に反する過失が多くて續にさはるが、矯正の方は一向進まず、却つて始終逆戻りするといふ有様で、もう少してこの企ては斷念し、まるで次の話に出て来る男のやうに、規律の點では自分の性格に缺點があつても、我慢することにしようと思つた位である。

ある男があつて近所の鍛冶屋から斧を買ひ、斧の表面全體を刃の部分と同じやうに光らせてくれと頼んだ。鍛冶屋は砥石の車輪を廻してくれるなら、望み通り光らしてやらうと言ふので、彼が車輪を廻すと、鍛冶屋は斧の廣い表面を砥石の上にしつかりと壓しつけるので、車輪を廻すのがとても骨が折れる。男はちよくちよく車輪から離れて、どのくらゐ仕事が進んだか見に来た。そしてとうとうもう磨ぐのは止めにしてそのまま斧を持つてゆくと言ひ出した。

「いや、」と鍛冶屋は云つた、「もつと廻しなさい。そのうちにだん／＼光つて來ますよ。これではまだぼち／＼光つた位なところですよ。」

「なるほど、」と男は云つた、「併し、そのぼち／＼光つた位の斧が一番いいやうだ。」

私は多くの人の場合にかういふことはあると思ふ。彼等は私がやつたやうなやり方を知らないので、このほかの徳不徳の問題で善い習慣をつけ悪い習慣を破ることの困難に面するや、これと闘ふことを斷念し、「ぼち／＼光つた斧が一番いい」と結論を下してしまふのである。私の場合にも、次のやうな考へが起り、それが理性の聲だと思はれもするのであつた。「お前が自分に強制してゐるやうな極端な嚴格さは一種の道德上のおめかしで、もし人に知られたら笑ひものにされるだらう。完全無缺の人格なんてものは、往々嫉まれたり憎まれたり、いろ／＼不利益を伴ふ。友人に面目を失はせないやうに、少しは缺點も残しておく方が仁者といふものだ。」

事實整頓といふ點では、私の惡癖は矯正しがたいものであつた。年を取つて記憶の悪くなつた今では、この徳の缺如を痛感してゐる次第である。

併し、大づかみにいへば、私は自分の心願とした道德的完成の境地に達することは勿論、その近くに至ることも出来なかつたが、それでも努力のおかげで、かやうな試みやつて見ない場合よりは人間もよくなり、又幸福にもなつた。丁度法帖を手本として完全な筆法を習はうとするものが、お手本通りの理想的な筆蹟になることは出来なくても、骨折つただけ筆蹟がよくなり、きれいに明瞭に書いてさへあれば、相当見られるやうになるのと同様である。

この物語を書いてゐる七十九歳の今日に至るまで私が絶えず享受した幸福は、神の御惠によつて、このさ／＼やかな工夫を爲したためである。私の子孫たるものはよくこの事を辨へて欲しい。今後の餘生に如何なる不運が待つてゐるかは神のみ知りたまふところであるが、假に不運が訪れたとしても、これ迄に享受した幸福を顧みれば、諦めもつき易く、不運に堪へることも容易となるであらう。久しきに互つて健康を保持し、今も尙ほ强健な體格を持つてゐるのは、攝生の徳のおかげである。若くして窮乏を免れ財産を作り、種々の知識を得て有用な市民となり、學識ある人々の間に相當の名聲を博し得たのは、勤勉と儉約の徳のおかげである。國民の信賴を得て光榮

ある任務を托されたのは、誠實と正義の徳のおかげである。また常に氣分の平靜を保ち、會話には快活を失はず、そのために今日も親しみ近づく人が多く、若い知人からも愛せられてゐるのは、これらすべての徳の総合的な力によるのである。尤も私はこれらの徳を不完全に我がものとしてゐるに過ぎないが。それゆゑ我が子孫等が私の例に倣つてこの利益を收めんことを私は希望するのである。

尙ほ一言しておきたいが、私の計畫は宗教と全く無關係といふ譯ではなかつたが、特殊の宗派の獨特の教義などは全くその痕跡もなかつた。私はわざ／＼これを避けたのである。私はこの方法の優秀且つ有効で、あらゆる宗派の人に役立つことを確信し、他日これを公刊しようと思つてゐたので、その人の宗派の如何により、偏見を挑發してこれに反對させる種になるやうな事は加へたくなかつたのである。私は一つ一つの徳に就いて、短い註釋を書き、その徳を持つことの利益と、その反對の惡徳に伴ふ害を示すつもりであつた。そして書名は「徳に至る道」とする考へであつた。それといふのは、この本では徳に達する手段方法を示すつもりだつたので、手段に就いては教へも訓しもせず、たゞ「善くなれ」と訓誡するやうなものとは、選を異にしてゐるからである。後者のやうなのは、着るものなく、食ふものなき人々に、何處に行き如何にして衣類と食物を得べきかを教へず、ただ「飽くことを得、温かなれ」と訓誡したかの使徒傳に出て來る言葉のみの仁者のやうなものである。(ヤコブ傳第二章、十五—十六節)

併し、この註釋を書いて公刊しようといふ私の考へは實現されずじまひになつた。尤もその中に入れるつもりで、感想や推論などの短い心覺えを時折書き留めて置いたのが、今も一部は手許に残つてゐる。だが若い時分には自分の事業に、後には公職の方に、どうしても精力を集中しなければならなかつたので、この企ては延び／＼になつてしまつた。私はこの仕事がある大規模な計畫の一部と考へてゐたが、その計畫を果すには人間一人がかゝり切りにならねばならないのに、思ひがけぬ仕事が多々に起り、とう／＼今日迄そのままになつてしまつたのである。

この小著で私が説明し強調したいと思つたのは次の教説であつた。即ち、人間の本性のみによつて考へるに、「もろ／＼の惡行は禁ぜられてゐるから有害なものではなく、有害だから禁ぜられてゐる」のであり、その故にまた現世の幸福を望む者にとつても、徳を積むことは有利なのである。私はまた次のやうな事情から、即ち世には仕事を正直にやつてくれるやうな人間を求めてゐる富裕の商人、貴族、國家、或は諸侯などがいつもあるものだが、そんな正直者は甚だ稀であるといふ事情から、正直と正義とは、最も貧乏人を幸運に導く可能性のある徳であることを、青年等に悟らせたいと思つてゐたのである。

この道徳表は最初は十二項目しかなかつた。ところが、クエーカー教徒の友人が親切に言つてくれたのだが、私は一般に高慢だと思はれてゐて、その高慢なところは談話の際にもたびたび出てくる、何か議論する場合には、自分の方が正しいといふだけでは氣がすまないで、おつかふせ

るやうな不遜な態度があるとのことであつた。彼は實例を幾つも挙げたので、私もなるほどと思つた。そこで私は他の惡徳或は愚行とともにこれも矯正したいものだと考へ、謙讓の徳を表に加へ、その語に廣い意義を與へたのである。

私はこの徳の眞髓をつかんだと誇るわけにはゆかないが、表面的には相當成功したと思ふ。他人の言説に眞向から反對したり、自分の意見を斷定的に主張するやうなことは、すべて差控へることにした。ジャントー・クラブの古い規則に倣つて、「確かに」とか、「疑ひもなく」など、斷定的な見解を表はす語句は使はぬことに決め、その代りに「私はかう思ふ」とか、「私はかう解する」とか、「かうかうだらうと想像する」とか、「現在のところ、私にはかうだと思はれる」といふやうな言ひ方を用ひることにした。間違ひだと思はれることを人が主張してゐる時でも、頭から反駁したり、いきなりその説の不當を指摘して快を貪るやうなことは止め、これに答へるにも、まづ最初に、時と場合によつては彼の意見が正しいだらうが、現在の場合はどうも違ふやうだ、自分にはさう思はれるなどと述べるのであつた。かやうに態度を變へた効果は、たちまち現はれた。といふのは、人と談話をするのに以前よりずつと氣持よく運んだから。謙讓な態度で自分の意見を述べるので、却つて容易に人に容れられ反對は少くなつて來た。自分の意見が間違つてゐた場合でも、そんなに恥をかかないで濟んだし、たま／＼自分が正當だつた場合には一そう容易に人を説得してその誤謬を改めさせ、自分の説に同意させることが出來た。

かやうな態度は生れながらの性質ではなく、初めは無理にとつてつけたものであつたが、終ひには自然になり、全く習慣となつてしまつた。恐らく過去五十年來私の口から斷定的な言葉が出るのを聞いたものは一人もあるまい。私が新制度や舊制度の改變を提案した場合、私の意見が同胞市民の間で早くから重要視されたのも、種々の公共の會議に議員となつて相當の勢力があつたのも、この習慣に負ふところが多いのだと思ふ（尤も第一には誠實な男と思はれてゐたためだが）。何故かといふに、私は話下手で、辯がたつた^た験しがなく、どんな言葉で言はうかと始終口をもくもくやり、言葉の間違ひも多かつたのだが、それでも大抵私の意見は通つたのだから。

實際我々の自然の感情の中でも自負心ほど抑制し難いものはあるまい。どんなに包み隠さうが、それと闘はうが、その息の根をとめ殺してしまはうが、尙それは生残つてゐて、時々頭をもたげ、姿を現はすのである。恐らくこの物語の中にも屢々その自負心が見受けられるであらう。何故かといへば私が完全にこれに打克つたと思ふことが出來るとしても、その時私は恐らく自分の「謙讓を自負」してゐるだらうから。

第七章 成功の道を歩む

〔譯者註〕 これからはフィラデルフィヤで書かれた。その欄外に次のやうな序文がついてゐる。

「一七八八年八月フィラデルフィヤの自分の家で書かうとしてゐるところである。併し記録は大方戦争中になくなつたため、當が外れ、記録を参考にするにはできない。尤も次のやうに残つてゐるのもあつた。」

私が大規模な計畫を抱いてゐたことを話したから、こゝでその計畫の内容と主旨を多少説明しておく方がよいかと思ふ。この計畫を考へついた時のことは、偶然残つてゐた次の紙片に記されてゐる。

一七三一年五月九日、圖書室で史書を翻いて所感あり。

「戦争、革命等この世の大事件は黨派に依つて遂行、成就される。

これらの黨派の目的は、彼等の現在の一般的利益乃至彼等がしか看做すものである。」

「黨派の異なるによりその目的も異なるが故に、あらゆる紛糾を生ずる。」

一黨派が一般的計畫を遂行してゐる場合、各黨員は自己の特殊な個人的な利益を追求する。

「一黨派がその全體としての目的を達するや否や、各黨員は自己の特殊な利益に熱中し、互に排撃して、黨を分裂せしめ、紛糾を大ならしめる。」

如何に取繕はうとも、公務に携はつてゐるもので、専ら國家の利益の見地から行動してゐるものは殆どない。たとへその行爲が眞に國家に利益を齎したとしても、彼等は第一に自己の利益と國家の利益が一致すると考へたのであつて、博愛の精神に基いて行動したのではない。

人類の利益の見地から公務に従ふものは更に少い。

「今や各國の善良有徳な人士を糾合して常置の團體に組織し、修徳、同盟の如きものを興すべき偉大な機會が來てゐるのではないかと思ふ。そして適切賢明な規則を設けてこの團體を統制することとすれば、善良有徳の士は、恐らく普通人が普通の規則を守る以上に一齊にその規則に従ふだらう。」

「この計畫を正しく立てて十分に努力を拂ふものは、必ず神の御旨にかなひ、成功を得るだらうと私は現在思つてゐる。」

暮し向きが樂になつて必要な閑暇が出來たら着手する考へで、私は頭の中でこの案を練り、こゝ

れについて心に浮ぶ思想を、折に觸れ、紙片に書き留めた。大部分はなくしてしまつたが、唯一つ自分が考へてゐた信仰箇條の要點を認めて置いた紙片が出て來た。それは、私の考へでは、あらゆる既成宗教の本質的な部分を含み、しかもどんな宗派の信者からも厭はれるやうな點はなかつた。

「萬物の創造主なる唯一の神がある。

「神は攝理に従ひて世界を治め給ふ。

「神は畏敬と祈禱と感謝もて崇むべきである。

「神の最も嘉したまふ勤めは、人に善を施すことである。

「靈魂は不滅である。

「神は、或は現世に於いて、或は來世に於いて、必ず徳には報いを、罪には罰を與へたまふ。當時の私の考へは次のやうであつた。この宗派は最初は獨身の青年の間だけに弘めなければならぬ。入會を許されたものは、この教義に同意を表するのみでなく、前述の例に倣つて、十三週間の徳の検査と實行を爲さねばならない。また不適當な人間が入會を願ふことのないやうに、相當になるまでは會のことは世間に發表してはならない。但し、會員は各々その知人のうち、憐れ且つ善良な青年を物色し、慎重な注意を拂つて徐々にこの計畫を傳へるべきである。會員は他の會員の利益、事業、榮達を促進するため、相互に忠告、援助、支持を與へることを約しなければ

ならない。他と區別するため、會名は「自由人と幸福者の協會」とする。自由といふのは、諸徳を實行してこれを習慣とし、惡癖の支配を免れるからで、就中勤勉と儉約の實行に依つて借金を免れるからである。借金といふものは、人を束縛して債權者に對する一種の奴隸にしてしまふものである。

この計畫について今も憶えてゐるのはこれくらゐのことだが、もう一つ、二人の青年に計畫の一部分を話したところが、その二人がなかなか熱心にこれに賛成してくれたことがあつた。併しその頃はまだ暮しも苦しく、商賣にかゝりきつてゐなければならなかつたため、直ぐに計畫をこれ以上進めるわけにはゆかなかつた。その後も公私種々雑多の用務のため延引に延引を重ねて、遂に現在まで放置されてしまつたのであるが、今となつては、このやうな企てに必要な氣力も體力も自分にはなくなつてしまつた。けれども私は今も尙これは實行し得る計畫であり、多くの善良な市民を造り上げるのだから大變有益だとも考へてゐる。また私はこの企ての外見上の規模の大きさに壓倒されたのではない。何故かといふに、相當の才能のある人物ならば、最初によい計畫をたてて、自分の注意を逸すやうな娛樂や他の事業などには眼もくれず、その計畫の遂行を唯一の研究とも仕事ともする限り、必ず人類に偉大な變化を與へ、大事業を成就することが出来る。と常々私は考へてゐたのだから。

一七三二年、私はリチャード・サーンダーズといふ名前初めて曆を發行し、その後約二十五

年もの間これを續刊した。この曆は「貧しきリチャードの曆」と通稱されてゐた。私はこれを面白くも賣れ、爲にもなるものにしようと苦心したが、おかげで非常に賣行がよく、年々一萬部近くも賣れ、利益もずるぶんあつた。州内の近隣の町村で、これのない所は殆どない位、廣く讀まれてゐるのを見て、私は曆は外の本など殆ど買はない一般市民の間に教訓を傳へる恰好の手段になると思つた。そこで私は曆の中の特殊の日と日との間にできる僅かばかりの餘白をすつかり諺風の文句で埋めた。その大部分は勤勉と儉約とが富を得る手段であり、従つて徳を保つ手段でもあることを説いたものであつた。何故なら、(それらの諺の一つをこゝで擧げてみれば)「空の袋は眞直には立ちにくい」やうに、貧乏な人間にとつてはいつも眞正直に暮すことは容易なことではないのだから。

私は多くの時代、多くの國民の智慧を含んでゐるこれらの諺を集めて、一つの筋の通つた話に作り、或る年老いた賢者が競賣に集つて來た人々に説く演説といふ形式にして、一七五七年の曆の巻頭に載せた。かやうにばら／＼の訓話を集めて一つの焦點を與へると、それらは一そ、う強く人の心を打つのであつた。この一篇は廣く江湖の稱讚を博し、アメリカ大陸の各新聞に轉載され、イギリスでは大判の紙に印刷して家々の壁に貼り附けられた。フランスでは翻譯が二通り出て、牧師や地主連が多數これを買ひ込み、無代で貧乏な教區民や借地人に配布した。ペンシルヴェニア州での曆の出版後數年間に互つて貨幣の増大を來したのは、この曆が舶來奢侈品に無用の金を

を費すことを戒めてゐるのによるところが多いと考へる人さへもあつたのである。

私は自分の新聞も亦教訓を傳達する一つの手段だと考へたので、かゝる觀點から屢々、*イター*誌や他の道學者達の著述から拔萃して新聞に載せた。時には自作の小品も發表したが、これは元來はジャントー・クラブで讀むために作つたものであつた。その中には、才幹や手腕がどうであらうと、徳のない人間は眞に分別のある人物とは言へないといふことを證明するソクラテス風の問答や、また克己の如き徳もこれを行ふのが習性となり、これに反する性癖の影響は全く受けないうやうにならなくては確かとは言へないといふ議論などもあつた。それらは一七三五年の初め頃の新聞にあると思ふ。

私は新聞の經營に當つては、細心に誹謗と人身攻撃にわたることを避けた。それらは近年に至つて甚だしくなり、國の恥ともなつてゐるのである。かやうな種類のものを載せるやうに頼んで來る筆者は、きまつて新聞の自由を主張し、新聞は乗合馬車のやうなもので、料金を拂ふものは誰でも乗る權利があるなどと言ひだすのだが、さういふ時には、私は次のやうに答へるのであつた。「もしお望みならその文章は別に刷つてあげよう。筆者はお氣に召すだけ何部でも自分で配るがよい。だが私は人の悪口を廣めるやうなことは引き受けたくない。私は有益な、或は興味ある記事を提供すると購讀者に約束したのだから、讀者に關係のない個人的な争論を載せることはできない。さやうなことをすれば、明かに讀者の利益を害するのだから。」ところが現今の新聞

業者の大部分は、高潔な人格者をも誣告して私怨をはらし、敵意を煽つて決闘沙汰まで惹き起させながら、恬として悔いる意がないのみではない。無思慮にも、近國の政府や、最も親密な友邦の行爲にまで口汚い非難を發表し、ために最も有害な影響を與へてゐるのである。私がかやうなことを言ふのは若い新聞業者への警めとし、彼等をしてかゝる恥づべき行爲は斷乎としてこれを拒否し、新聞を汚し、その業を辱めることなからしめたいためである。何故かと言へば、私の實例を見て、彼等は私の採つたやうな經營方針が、終局に於いて彼等の利益に反するものでないことを悟つて意を強うするだらうからである。

南カロライナには印刷屋が一軒も無かつたので、一七三三年に私は職人を一人チャールズタンへ送つた。私は彼に印刷機と活字を與へ、組合契約を結んだ。それによると、私は經費の三分の一を支辨し、収益の三分の一を收めることになつてゐた。彼は學問はあつたが、會計は全く分らなかつた。時々送金はして來たが、彼の存命中唯の一度も決算書をよこしたことがなかつたし、組合の營業報告もろく／＼送つて來なかつた。彼の死後は後家さんが業務を續けて行つた。彼女はオランダ生れのオランダ育ちで、オランダでは、以前から聞いてゐたことだが、會計の知識が婦人の教育の一部になつてゐるくらゐなので、彼女は以前の取引關係に就いて出来るだけ明瞭な報告書を送つて來たのはもちろん、その後も四半期毎に、大變几帳面に且つ正確に會計報告をよこした。そして商賣の方も甚だ上手に經營し、子供等を立派に養育した上に、契約の期限が切れ

ると共に印刷所を私から買ひ取つて、息子のものにする事が出来た。

私がこんなことを述べるのは、主に若い女性にこの方面の教育を奨めたいからである。未亡人になつた場合、音楽や舞踊よりも、ずつとこの方が彼女達にもその子供達にも役に立つのである。會計の知識があれば、狡い男達に欺されて損をすることもなくて濟み、子供が一人前になつてその後を繼いでやれるやうになるまで、從來の取引關係を續けて利益のある商賣を營むことも出来、結局一家の利益、繁昌のもとになるのである。

一七三四年頃ヘムフィルと呼ぶ長老派の青年牧師が赴任して來た。彼はよい聲で、どうやら即席らしいが、非常に立派な説教をしたので、宗派の違ふ連中まで、大勢これに惹き附けられ、一緒になつて感心したものだ。私も他の人々に交つて彼の説教にはいつも出かけた。といふのは、彼の説教には教義風な所が殆どなく、徳の實行、即ち宗教的表現に従へば善根を積むことを強調するので、私にも氣にいつたのである。ところが會衆中正統長老派を以て任じてゐる連中は、彼の説くところに反對で、古い牧師連がこれに加はり、彼等は彼を沈黙させようとして、宗教會議に異端者として訴へた。私は彼の熱心な味方になり、彼の支持者を集めるのに一生懸命になり、暫くは勝つつもりで彼のために戦つた。これに關して贊否の論説が澤山現はれた。彼は説教は上手だつたが、書かせては下手糞なので、私は彼のために二三のパンフレットを書き、また一七三五年四月の新聞に小論文を載せたりした。それらのパンフレットも大ていの討論文同様、その時

は熱心に讀まれたが、間もなく忘れられてしまひ、今では一部でも残つてゐるかどうか怪しい。抗争を續けてゐる最中に、不幸な事件が持ち上つたため、彼の立場は非常に不利になつた。我の反對派の一人が彼の説教を聽いて、それは頗る評判のよかつたものだつたが、前にどこかで、少くともその一部分は讀んだことがあると思ひ出したのである。そこで調べて見ると、ブリテイッシュ・レヴェューに出てゐるフォスター博士の説教の一節をとつたものだといふことが分つた。これが分つたために、味方の大部分は嫌氣がさして、彼の主張を支持することを止めたので、宗教會議では脆くも惨敗を喫してしまつた。併し、私は彼を見捨てなかつた。私は寧ろ彼が普通の牧師のやるやうに自作の拙い説教をせず、人の作つた立派な説教を私達に聽かせたことに賛成だつた。後に彼は自分のした説教は一つだつて自分で作つたものはない、自分は記憶力がよいのでたつた二度讀めばどんな説教でも覚えてゐて、繰返すことが出来るのだと告白した。私達が負けたので、彼は幸運を他國に求めて私達のところを去つた。私もその集會を脱會してその後二度と出席しなかつた。尤も牧師を維持するための獻金は長年續けてゐたが。

私は一七三三年には外國語の研究を始めてゐた。私は間もなくフランス語には熟達してフランス語の本なら樂に讀めるやうになつた。次にはイタリ語にかゝつた。やはりイタリ語を勉強してゐる知人がゐて、チェスをしようとして私を誘ふことがよくあつた。このために勉強する時間をずるぶんとられるので、私はとうとう一つの條件を持ち出し、これに不賛成ならもうチェスは止さうと云つた。一勝負毎に勝つた方は、例へば文法の暗記とか翻譯とかの仕事を手を相手に課するこゝとが出来、負けの方は次に會ふ迄に必ずこれをやつておくといふ條件である。二人の腕前は似たりよつたりだつたから、私達は互に相手をやつつけてはイタリ語を勉強させた。私は後にはスペイン語も、大して骨も折らずに、本が讀める程度には出来るやうになつた。

前にも述べたが、私は古文學校には一年通つたきりで、しかもその頃はほんの子供だつた。そしてその後はラテン語は全く見向きもしなかつた。ところで、フランス語、イタリ語、スペイン語を覚えてから、ラテン語の聖書を開いて見ると、驚いたことに、思つたよりずっとラテン語も分るのである。これに勇氣を得て私はもう一度ラテン語を勉強しだした。そして前述の各國語のおかげですらすらと覚えられるので、今度は成功することができた。

かやうな事情から推して、私は我が國の一般の語學教授法には、若干の矛盾があると考へた。私達は「最初はラテン語から始めるがよい。ラテン語が出来るやうになれば、ラテン語から派生した近代語を學ぶのはずっと容易である。」と言ひ聞かされてゐる。だが私達はラテン語を習ふのがもつと樂になるからといつて、ギリシヤ語から始めはしない。確かに、階段を踏まずにそのつぺんまで攀ぢ昇ることが出来るとしたら、段を踏んで降りる方はもつと容易に違ひない。併し、一番下の階段から始めれば、もつと容易にてつぺんまで昇れることも確かだ。それ故私は我が國の青年教育を司つてゐる人々に次の問題を考慮して頂きたいと思ふ。最初にラテン語から始めた

ものは大部分數年後には大して上達もせずこれをやめてしまひ、それまでに習つたことも殆ど無用に歸し、これに費した時間も空費となつてしまふのだから、フランス語から始めてイタリ語、ラテン語と進む方がよくはないか、といふ問題である。何故なれば、同じ時間を費して後、やはり語學の研究は止めてしまひ、ラテン語には遂に及ばなかつたとしても、現代に使用されて日常の生活に有用な一乃至二外國語を修得したことになるわけだからである。

ボストンを出て十年もたち、暮しも樂になつたので、私は親戚に會ひにボストンへ旅行した。實はその時までには都合がつかなかつたのである。歸りにニュー・ポートにゐる兄のジェームズを訪ねた。兄は當時こゝで印刷所を經營してゐた。昔の仲違ひは水に流して、私達の會見は眞心の籠つた情愛深いものであつた。兄の健康は急速に衰へてゐた。彼がいふには、自分はもう長くはないと思ふが、自分が死んだらやつと十になつたばかりの悴を私の家に引取つて、印刷業を仕込んで貰ひたいと頼むのであつた。私は兄の願ひ通り、その子供を引取り、數年學校に通はせてから、仕事を仕込んだ。彼が一人前になる迄は母親が商賣を續け、いよ／＼自分で經營するやうになつた時には、父の活字は大分磨り減つてゐたので、私は新規の活字を一組與へて援助してやつた。私はあんなに早く兄の家を飛び出して年期奉公を怠つたが、かうして十分にその償ひはしたのである。

一七三六年に私は息子を一人亡くした。四歳になつた可愛い子だつたが、天然痘にかゝつて、この病氣の普通の經過をとつて死んだのである。私はいつまでも惜しくて堪らず、今でもその子に種痘をしてやらなかつたのが心残りである。子供が種痘のために死にでもしたらそれこそ諦めがつくまいと考へて種痘をしない親達のために、私はこのことを述べるのである。私の例でも明かなやうに、いづれにしる殘念なことは同じなのだから、幾分でも安心な方を選ぶべきである。

我々のジャントー・クラブは非常に有益で、會員は大いに満足してゐたので、中には友人を引入れたいと望むものもあつた。併し、さうすれば、頃合ひの人數として私達が決めてゐた人員、即ち十二名を超過しない譯にはゆかなくなる。最初からこの會のことは祕密にする約束で、私達はかなりにこの約束を守つて來た。斷り切れないやうな人ができると困るから、不適當な人から入會許可を乞はれることのないやうにしたいといふのがその目的であつた。私は増員反對者の一人であつたが、その代り、文書で次のやうな提案をした。各會員は問題の提出その他ジャントー・クラブと同様な規則を持つ從屬的なクラブをめぐり創設することに努め、ジャントー・クラブとの關係はその方には知らせないでおくといふのである。その目的とする利益は、これ等の會を利用する結果更に多數の青年市民が啓蒙されること、ジャントー・クラブの會員は自分達の知りたい問題を箇々のクラブに提出し、そこで通過したことをジャントー・クラブに報告するのだから、どんな事柄についても、住民一般の意向によく通ずるやうになること、また廣く吹聴されるため各人の商賣上の利益も増加すること、及びそれ／＼のクラブを通じてジャントー・クラブの

意見が擴まる結果、公共の問題に對する私達の勢力や善事を爲す力が増大すること等であつた。この案は賛成を得て、各會員はめい／＼のクラブの創設に着手したが、うまく行つたものばかりではなかつた。出來たのは五つか六つで、それ／＼ヴァインとか、ユニオンとか、バンドなどと呼ばれてゐた。この從屬的なクラブはその會員にとつて有益だつたが、また私達にも多くの慰安と情報と教訓を齎し、且つ特別の場合に、民衆に働きかけようとする私達の意圖にも或る程度にはかなつたのである。これに就いては順を追つて幾つかの實例を擧げることによつてしよう。

私が初めて公生活に入つたのは一七三六年に州會書記に選舉された時で、その年の選舉には私に反對するものはなかつた。ところが、選舉は議員の場合と同じく毎年あるので、次の年私が再び候補者に擧げられた時には、或る新議員が他の候補者を應援するために長い演説をして私に反對した。しかし私は選舉された。書記の地位は、書記としての勤めに對する報酬の外に、議員間に或る勢力を保持するやうな機會を與へ、そのために議事録や法文や紙幣等の印刷、その他民衆のための臨時の印刷物などをとることが出來、それらは、大體に於いて、利益の多いものだつたので、私には有難い地位であつた。それだけに、私はこの新議員に反對されるのが氣色が悪かつた。この人は財産もあり教養もある紳士で、才能もあつたので、やがては州會で大きな勢力を得るだらうと思はれた。事實、後にはその通りになつた。だが私は卑劣なお世辭をつかつて、彼に取入らうなどとは思つても見なかつたが、暫くたつてから次のやうな變つた方法を探ることにした。彼の藏書には、ある稀觀の書があると聞いたので、私は彼に手紙を書いてその本を讀みたいといふ望みを打明け、恐縮だが四五日拜借させて頂けまいかと頼んでやつた。彼はすぐに本を送つてよこした。私は約一週間後に彼の厚情に感謝する旨の手紙を添へて返却した。その後州會で會つた時彼は私に話し掛けたが、これは全く始めてのことであつた。しかも非常に慇懃な態度であつた。そしてその後あらゆる場合に私に好意を示してくれたので、私達は仲のよい友達になり、交遊は彼の死去するまで續いた。「一度面倒を見てくれた人は進んでまた面倒を見てくれる。こつちが恩を施した相手はさうはゆかない。」といふ古い諺があるが、それはこの諺がほんたうだといふことを示す一例である。これをみても分るやうに、他人の敵意のある行動を怨んでこれに返報し、敵對行爲を續けるよりも、考へ深くそれを取りのける方がずつと得なのである。

一七三七年にヴァージニア州の前知事で當時郵政長官であつたスポッツウッド大佐はフィラデルフィアの郵便局長が會計報告の提出を幾分なほざりにし、その内容にも不正確の點があつたのに不満を抱き、彼の委任を解いて私にそれを差出した。私は快く引受けたが、これは非常に利益のある仕事であつた。給料は僅かだつたが、このために通信が便利になつたので、新聞の内容を良くすることが出來、部數も増え、掲載廣告も多くなつて、大きな収入が得られるやうになつたからである。古くからの商賣敵のブラッドフォードの新聞はそれだけ衰へて行つた。彼は局長時代に、集配の騎手に私の新聞の配達を禁じたが、私はその意趣返しをするやうなことはしなかつ

た。かういふわけで、彼はきちんと會計報告をするのを忘つたため、非常な損をしたのである。この事は、他人に雇はれ、他人の代理として事務を取扱つてゐる青年達に、最も明瞭に且つ遅滞なく會計報告を提出し、送金しなければならぬといふ教訓を與へるものと思ふ。かういふ事をよく守るといふ評判は、新しい職業に就いたり、事業を擴張するやうな場合に、最も有力な推薦文になるのである。

さて私は公共事業に心を向けるやうになつたが、最初は些細な事から始めた。私が最初に取締る必要があると思つたものの一つは市の夜警のことであつた。この仕事は各管轄區の警官が交替でこれに當つてゐたが、警官は數名を各戸から召集して一緒に夜番をさせるのであつた。夜番に出たくない者は一年に六シリングづつ警官に支拂つて勘辨して貰つてゐた。この金は代りの者を雇ふ金になるものと考へられてゐたが、實際はそれには多過ぎて、警官の役得になつてゐた。彼等は少しばかりの飲代(のみしろ)を出してやくざ連中を集めて來て夜廻りをさせることがよくあつたので、相當な人達はその仲間に加はるのを嫌がつた。彼等はまた始終巡回をなまけ、大抵の晩はちびちびと酒を飲んで過してゐた。そこで私はジャントー・クラブで朗讀するため一文を草してこれらの非行を指摘し、特に警官の徴收する六シリングは、支拂ふ者の經濟状態により不公平であることを主張した。夜番に守つて貰ふ全財産が五十ポンドにも満たない貧乏な寡婦の世帯主も、その倉庫に數千ポンドの在貨を持つてゐる最も富裕な商人と同額を支拂つてゐるのだから。

大體に於いて私はもつと有效な夜警方法として適當な人物を常雇ひにしてこの仕事に當らせること、その經費割當のより公平な方法として、その財産に應じて金を徴收することを提案した。この案はジャントー・クラブで賛同を得たので、それ／＼のクラブでの發案といふ形式にして、例の從屬クラブにも知らせた。この計畫は直ちに實行されはしなかつたが、人々の氣持をかやうな改革に對して準備させたので、數年後クラブの會員が相當有力になつた時には、容易にこれを法律化することが出來たのである。

この頃私は火災の原因となる種々の變事や不注意に關する一論文を書き、これに對する注意や豫防策に就いて論じた。(これは最初ジャントー・クラブで朗讀するために書いたのであるが、後に一般に公表した。)これが有益な論文だといふ評判になり、その影響で、消火を一そう迅速にし、危険に陥つた場合には相互に協力して荷物を運んで安全にすることを目的とする組合を設けよ、との議が起り、間もなく實現された。この計畫に加はるものは忽ち三十名に達した。規約に依れば、各組合員は荷物を包んで運ぶための革製のバケツと頑丈な袋と籠とを一定數だけ、どこの火事にも間に合ふやうに、いつも整頓しておく義務があつた。また私達は月に一度ぐらゐる夜分に親睦會を開き、火事の場合の有效な處置について、めい／＼が思ひついた考へを話しあひ傳へあふことに決めた。

この組織が有益だといふことは間もなく明かになり、一組合には不便なほど多數の入會希望者

ができたので、別に組合を作るやうに勧めてやつた。従つてその組合が生れ、かくて新しい組合が次から次とできて、その数は夥しく増え、金持の住民は殆ど皆これに加入するほどになつた。そしてこれを書いてゐる現在、私が最初に創設したユニオン消防組合は、創立以來五十年以上になるが、未だに存続してゐる。尤も最初の組合員は残らず死んで、私より一つ年上の人が一人生きてゐるだけである。毎月の集會に缺席した組合員は罰金を支拂つてゐたが、その金は組合の消防ポンプ、梯子、鳶口、その他有用な器具の購入に當てられてゐた。それ故この町よりも防火施設が行届いてゐるところは、世界にも無いのではないかと思ふ。實際これらの組合が出来てから、この町では火災で一どきに一二軒以上焼けたといふことがない。そして火元の家が半分も焼けぬうちに消火されることも珍しくはないのである。

第八章 社會的活動(一)

一七三九年アイルランドで巡回牧師として有名だつたホイットフィールド氏 George White-field (1714-1787) 英の牧師。オックスフォードに學び、メソヂスト派の影響を受け、がフィラデルフィヤへ到着した。初めは彼に説教を許した教會もあつたが、牧師達はやがて彼を嫌つて教壇を提供することを拒んだので、止むを得ず彼は野外説教を始めた。その説教を聴きに集まる各宗各派の郡衆の数は夥しいものであつた。私もその一人であつたが、彼の雄辯は聴衆に異常な影響を及ぼし、彼は「君達は

生來半ば獣であり、半ば悪魔である。」と説いていつも彼等を罵つてゐるにも拘らず、聴衆が如何に讚嘆畏敬してゐるかを觀察してゐると色々考へさせられるのであつた。やがて現はれた町の住民達の態度の變化は驚くべきものであつた。今まで宗教に就いては考へもせずまるで風馬牛だつたのに、急に世界中が信心深くなつて來たかのやうで、夕方街を通ると、どの通りでも、方々の家で讚美歌を歌つてゐるのが聞えて來るのであつた。

併し露天で集合するのは天氣の悪い時に困るので、集會場を建てようといふ話が起り、寄附金募集係が定められた。すると忽ち敷地を求め、建物を建てるに十分なだけの金額が集つた。建物は奥行は百呎、間口は十七呎であつた。工事は猛烈な意氣込みで進められ、豫想よりずつと短期

間に完成した。建物も敷地も保管人に委託され、フィラデルフィアの住民に何か言ひたいことのある者はどの宗派の、どの牧師でも、これを使用してよいとはつきり定められた。即ちこの建物はある特定の宗派の便宜のためではなく、一般市民のために建てられたのである。それ故、もしコンスタンチノープルのマフチ Mutti (回教の僧で教典の説明、疑義の解決をなす者。特にトルコの回教主をいふ。) がマホメット教の傳道のため傳道師を我々のところへ派遣したとしても、一つは教壇が用意してあるわけである。

ホイットフィールド氏は我々のところを去つて、途々各植民地で説教しながらジョルジアまで行つた。この州の植民は最近始まつたのであるが、かういふ事業に適する唯一の階級、即ち勞働に慣れ頑丈で勤勉な農民達によつて開かれてゐるのではなく、破産した小賣商人や支拂不能に陥つた連中などがやつてゐるのであつた。多くの者は牢で身にしみた憎け癖が抜けきれず、森の開墾をさせても、土地を切り拓くことさへ出來ず、困難な開拓事業に耐へないで、死んでしまふものが多く、その後には寄る邊のない子供等が大勢残され、世話するものもない有様であつた。この悲惨な有様を見て胸を痛めたホイットフィールド氏は、この地に孤兒院を建てて子供達を育て教育しようと考えた。氏は北方へ歸り、この慈善事業を説いて廻り、多額の寄附を集めた。といふのも氏の雄辯は聽手の心と財布に不思議な作用を及ぼしたからで、かくいふ私自身その實例の一人であつた。

私はこの企てに不賛成ではなかつたが、當時ジョルジア州には建築材料や職人が缺乏してをり、それらのものは莫大な費用を使つてフィラデルフィヤから送るといふ案だつたので、それよりは孤兒院はフィラデルフィヤに建て、子供の方を連れて來るがよいと考えた。私はかういつて忠告したが、彼は頑として最初の計畫を固執し、私の意見を受けつけないので、私も寄附するのを斷つた。その後間もなく私は彼の説教に出席した。聽いてゐる中に、後で獻金を集めるつもりだなど気が附いたが、私は一文だつて出すものかと、ひそかに腹を決めてゐた。この時私のポケットには銅貨が一握り、弗銀貨が三、四枚、それに金貨で五ピストルあつた。彼の説教が進むにつれて私の心はだんだん和んで來た。私は銅貨だけは出さうと考えた。併し更に一くぎり彼の辯舌を聞いてゐるうちに、私は自分の考へが恥かしくなつて來て、銀貨も出さうと考え直した。だが説教の結びは一きは見事だつたので、私は金貨も銀貨も、ポケットの中はすっかり獻金皿にあけてしまつた。この時の説教には、クラブの者かもう一人來てゐたが、彼はジョルジア州に孤兒院を建てることに就いては私と同意見であつたから、獻金集めがある時の用心に、家を出る時ポケットを空っぽにして來てゐた。しかし説教が終りに近づくと彼も獻金したくて堪らなくなり、傍に立つてゐた近所の人に獻金する金を貸してくれるやうに頼んだ。ところが、運のいいことに、彼が頼んだ相手といふのが、聽衆中で斷乎として牧師の話に動かされなかつた恐らく唯一の人物であつたのである。彼が答へて言ふには、

「ポプキンソンさん、他の時だつたらいくらでもお貸しませう。だが、今は駄目です。お見

かけするに、あなたは正氣ではいらつしやらぬやうですからね。」

ホイットフィールド氏の敵の中には、氏が集つた金を自分の私用に充てようとしてゐると疑ふものもあつた。だが私は彼の説教や雑誌などを印刷して彼をよく知つてゐたが、かつて彼の潔白を疑つたことはない。現在でも私は彼が凡ての行爲に於いて全く廉直な人物だつたと確信してゐる。私達は別段宗教上親縁な關係はなかつただけに、彼に有利な私のこの證言は一層重きを置かざるべきものと思ふ。なるほど彼は時々私が改宗するやうにと祈つてくれたが、その祈りがかなへられたと考へて満足を味ふやうなことはなかつたのである。私達の關係は親しい友人の關係に過ぎなかつたが、双方とも誠實で、交遊は彼が死ぬまで續いた。

次に記す例によつても私達の關係が分ると思ふ。ある時イギリスからボストンへ歸り着いた時のこと、彼は私に手紙をよこして、まもなくフィラデルフィヤへ行くつもりだが、古馴染の宿屋の主人ベネゼット氏がジャーマンタウンに引移つたさうだから、そちらへ着いても泊るところがないと云つて來た。私はかう返事した。

「あなたは私の家を御存知でせう。何にもお構ひは出来ませんが、それでよろしかつたら、喜んでお宿をさせよう。」

すると彼から、もし私がキリストの爲にこんな親切な申出をしたのなら、きつと報いがあるだらうと返事して來た。そこでまた私は返事を書いた。

「どうぞ誤解なされないやうに。これはキリストの爲ではありません、あなたの爲です。」

私達双方を知つてゐる一人の知人が冗談に云ふには、

「何か厚意を受けると、その恩の重荷を自分の肩からはづして、天なる神に押しつけようとするのがお坊さん連中の癖だと知つてゐるから、これをしつかと地上に結び付けておくやうに考へたわけだね。」

最後にホイットフィールド氏に會つたのはロンドンであつた。その時氏は孤兒院の事業や、それを流用して大學を設立したいといふ考へなどに就いて私の助言を求めた。

この人は大きくよく通る聲をしてゐた上、一語一語非常にはつきり發音するので、殊に聴衆が靜まりかへつてゐるせるもあつて、ずるぶん遠い所にゐても話がよく聞えた。或る晩彼が裁判所の玄關の階段の一番上から説教をしたことがあつた。裁判所は市場通りの中央で、これを眞直ぐ横切る二丁目の通りの西側にあつた。兩方の通りは可成り離れた所まで聴衆がいっぱいであつた。私は市場通りの一番後ろの邊にゐたが、通りを川の方へ下つて行つて、どの邊まで彼の聲が聞えるか試してみようといふ氣を起した。彼の聲はフロント・ストリート近く迄はつきり聞えることが分つたが、その時通りが少し騒がしくなつたためはつきりしなくなつた。そこで私の計つた距離を半徑とする半圓を描き、そこに各二平方呎を占める聴衆がぎつしりつまつてゐるものと假定すると、彼の聲は三萬人以上の人に立派に聞える勘定になる。これから考へると、彼が野外で

二萬五千人の民衆に説教したといふ新聞記事や、將軍が全軍に號令したといふ歴史の記事なども、(以前はほんたうとは思へなかつたものだが)嘘ではないと思ふやうになつた。

度々彼の説教を聞いてゐる中に、私はその説教が新たに作られたものか、巡回中に度々説教したのか、容易に區別できるやうになつた。後の方をやる時は、何遍も繰返してゐるため實に手に入つたもので、音の抑揚、聲の調節、力の強弱、すべて申分なく調つてゐるので、内容には興味を惹くものがなくとも、話を聞いてゐるものはきつといい氣持になるのであつた。それは優れた音楽から受ける快感に似たものであつた。巡回牧師の方が教會附の牧師より勝れてゐるのはこの點である。後者の方は一つの説教を何度も何度も繰返し非常に上達するといふことは出來ないのである。

彼の書いたものや印刷したものは、時々その敵に乗ずる機會を與へた。説教の場合なら、不用意な言説はもちろん、誤つた意見でも、後で説明したり、その後にかういふ言葉が續くはずだつたと言つて意味を限定することも出来るし、時には否定することも出来る。だが「書いたものは後へ残る」のである。批評家は彼の著作を猛烈に攻撃したが、如何にも理は彼等にあるやうに見えたので、彼の信者はふえなくなり、却つて減るやうになつた。それ故もし何にも書かなかつたとしたら、彼はづつと信者の多い有力な宗派を残したに違ひないと思ふ。そしてその場合には彼の名聲は死後も益々高くなつたであらう。何故かといふに書いたものがなければ、彼を非難したり、人物にけちをつたけりする種がないのだから、彼の信者達は彼に對する熱狂的な尊崇の心から、さまざまの偉大な美點を勝手にこさへあげて、彼等の望み通りの人物に仕立てることが出来るからである。

さて私の家業はだん／＼手廣くなり、暮しも日に日に樂になつて來た。新聞も、一時はこの州及び近隣の州に他に一つもなかつたので、大そう儲かるやうになつた。「初めの百ポンドさへ溜めてしまへば、次の百ポンドはひとりでに溜る」といふ諺の眞實であることも私は實際に味つたわけである。金といふものが本來繁殖力の強いものである。

カロライナ州の組合經營が成功したのに味を占めて、私はほかでもやつて見ることにし、よく勤め上げた數人の職人を抜擢して植民地の各地に印刷所を開かせた。條件はカロライナの場合と同じであつた。彼等の大部分は上手に經營し、六年の契約期間の終りには活字を私から譲り受け獨立で經營を續けるやうになつた。かうして幾家族かがお釜をおこすことが出來たのである。組合經營といふものは喧嘩別れになりがちのものである。併し、幸福なことに私の場合はいづれも仲よく經營され、仲よく終つたのである。これは私が豫め用心して、喧嘩の種のおこらぬやうに、各當事者の爲すべきこと、相手方に爲さしめ得ることを残らず明瞭に契約書中で取り決めて置いたのによると思ふ。それゆゑ私は組合經營を始めようとするすべての人にかやうな用心を奨めたいと思ふ。何故なれば契約當時には當事者は互に相手方に尊敬と信頼を持つてゐる

にしても、經營上の心勞や負擔や事務などが不公平だといふ考へが起り、それと共にちよつとした嫉み心や嫌氣が出て来て、そんなことから折角の心やすい關係にも罅が入り、訴訟沙汰やその他の面白くない結果に終ることは間あることだからである。

私がフィラデルフィアで開業したことは、大體に於いて、誠に結構なことであつたのだが、それでも二三遺憾な點もなかりはなかつた。街の防衛や青年の完全な教育のための施設、即ち義勇軍團や大學が無いことなどはそれである。それで私は一七四三年に大學設立案を起草した。そしてかやうな學校の監督にはたま／＼閑地にあつたりチャード・ピーターズ牧師が適任だと思つたので、私はこの計畫を彼に打明けた。併し、彼は領主の仕事で、もつと儲りさうなのがあつたため（それはやがて巧く行つた）私の方の計畫を斷つて來た。當時他にはかやうな信賴を置くに足る人物を知らなかつたので、當分この計畫はその儘になつた。翌一七四四年の「學術協會設立」の提案はもつとすらく／＼と運んで實現された。このために私が書いた文章は、多くのほかのと一緒に無くなつてゐないなら、書類中に交つて残つてゐるだらう。

町の防衛のことに就いて云へば、スペイン國は數年來英國と交戦中であつたが、遂にフランスと聯合したため、私達は非常な危険に曝されることになつた。州知事トマスはクエーカー教徒の州會を説得して、州の安全保障のため、義勇軍法案を通過せしめ、その他種々の設備を爲さしめ

ようと久しく苦心努力してゐたが、遂に失敗に歸してしまつた。そこで私は人民の自發的な應募によつてどこまでやれるかやつて見ようと思ひ、この計畫を進めるために、まづ「明白な事實」と題するパンフレットを書いて公けにした。私はその中で、私達の孤立無援の現状と、防衛のため團結と訓練の必要な所以を力説し、數日後この目的のために一つの協會の設立を提案するから一般の署名を求めたいと書いた。このパンフレットはたちまち驚くべき影響を惹き起した。私はその會の世話人に選ばれたので、數人の友人と原案を決定して、前に述べた大集會場で市民大會を開くことにした。會場はかなりいっぱいだった。私は趣意書の刷つたのを多數用意しておき、又會場のあちこちにペンとインキとを備へて置いた。私はまづこの問題に就いて簡単な演説をした後、趣意書を讀んで説明し、それから刷つたものを配布した。會衆は熱心に署名し、反對は少しもなかつた。

散會の後趣意書を集めて見ると、署名者は千二百名以上に上つてゐた。この趣意書は州の他の地方にも配布され、署名者は遂に一萬を超えた。これらの人々は最短期間に武裝を調べ、中隊、聯隊を編成し、將校を選出し、毎週集合して操銃その他の軍事教練を受けたのである。婦人達は婦人達で、寄附金を募つて絹の軍旗を作り、これを中隊に寄贈した。その旗には私の考案に成る種々の徽章や標語が描かれた。

フィラデルフィア聯隊を構成する各中隊の將校等が相會して、私を聯隊長に選出したが、私は不適任だと考へたのでこれを辭退し、その代りにローレンス氏を推薦した。氏は立派な體格をし

た勢力のある人物で、やがて聯隊長に任命された。次には私は富籤を起して經費を調達し、街の下手に砲臺を建造し大砲を据ゑつけるといふ案を出した。その金も早速集り、砲臺は間もなく建造された。銃眼壁の凸部は丸太を組んで土をかぶせたものであつた。私達はボストンから古い大砲を數門買ったが、それでも十分でないので、更にロンドンへ注文状を出した。同時に領主達に援助を乞うたが、この方は大してあてには出来なかつた。

その後暫くしてローレンス聯隊長、アレン氏、エーブラハム・テラー氏及び私は、ニュー・ヨーク州のクリントン知事に大砲を借りる使命を帯びて義勇軍から派遣された。知事は最初は、べもなく斷つた。しかし參事會員等と會食し、當時の土地の習慣にならつてマデイラ酒を大いに飲んでゐるうちに、知事はだん／＼御機嫌がよくなつて、六門貸さうと云ひだした。更に數杯の後には十門に増してくれ、最後には快く十八門まで承認してくれた。それは砲架附きの立派な十八吋砲で、直ちに輸送されて私達の砲臺に取りつけられた。そして戦ひの續いてゐる間中、義勇軍團員はこの砲臺で夜警を續けた。私もその中にまじつて、一兵卒としてきちんと當番は勤めたものだ。

私がかういふ活動をしたのが、知事や參事會員等の氣に入り、彼等は私を信頼して、義勇軍團が各種の計畫につき彼等の贊助を求めに行くやうな時は、いつでも私に相談をかけてくるのであつた。私は改革を促進し、我々の計畫に天の加護を仰ぐために、宗教の力を借りて、斷食を布告することを提議した。彼等はこの動議に賛同はしたが、この州では初めての斷食のこととて、書記官が布告文を草するにも先例が見つからなかつた。私は斷食が毎年布告されるニュー・イングランドで教育を受けたのだが、それがこの際多少の役に立つた。私は型通りの布告文を作つた。それはドイツ語に譯され、英獨兩國語で印刷されて州中に流布された。これがきつかけとなつて、各宗派の牧師等はその會衆を動かして義勇軍に参加せしめた。もし平和があんなに早く歸つて來なかつたら、クエーカー教徒以外の各派の信徒は廣くこれに倣つたであらう。

こんなことに私が活動したため、クエーカー教の人々を憤慨させ、この教徒が大多數を占めてゐる州會で勢力を失つてしまひはせぬかと案じてくれる友人もあつた。同じく州會に幾人かの支持者があり、私の後を襲つて州會の書記にならうとねらつてゐる青年がやつて來て、州會では次の選舉には私を更迭することに決定したと知らせしてくれた。おまけにこの男は、御親切にも、私に辭職を勧め、辭めさせられるより自分で辭めた方が面目が立つだらうと言つた。私はかう返事してやつた。

「公職を自分から求めはしないが、頼まれたら決して斷らぬ——さういふ主義を取つてゐるある公人の話を何かで讀んだか聞いたかしたことがあるが、私はこの主義に賛成だ。尤も實行する時は、少し附け加へたいことがある。即ち私は公職を求めもせず、拒みもせず、又辭職もしないつもりである。もし書記の職を辭めさせて他人にやらせたいのなら、私からその職を取り上げる

がよい。私は辭職して、私の敵にいつか仕返ししてやる權利を捨てるやうなことはしない。」

この話は、しかし、これきりだつた。次の選挙の時私は再び満場一致で書記に選ばれた。州會は長い間軍備問題には困つてゐたのだが、彼等はこの問題についていつも知事に加擔する參事會員等とこの頃私が親密なのが氣にいらなかつたのだから、多分私に進んで辭めて欲しかつたのだらう。併し彼等も私が單に義勇軍のことに熱中したといふだけで辭めさせるわけにもゆかず、さりとして他には別にうまい理由も見つからなかつたのである。

實際國防の問題は、それを援助することを求められさへしなければ、誰にとつても不快なことではないと信ずべき理由があつた。攻撃戦争には反對だが、防衛戦争には明かに贊成してゐる者は想像以上に多かつた。この問題に關して贊否のパンフレットが數多く出版されたが、中には立派なクエーカー教徒達の防衛戦争贊成論もあつた。それらは同派の青年の大部分に信じられたらうと思ふ。

私達の消防組合でおこつた一つの事件のおかげで、私はクエーカー教徒達の間の有力な意見がどんなものか理解を深めることが出來た。といふのは砲臺の建設計畫を助けるため、當時六〇ポンドばかりあつた組合の金で富籤券を買つたらといふ案が出てゐた時のことである。組合の規則に依ると金は案の出た次の集會の時まで支出出來ないことになつてゐた。組合は三十人から成つてゐたが、うち二十二人はクエーカー教徒で、他の宗派のものは八人だけであつた。私達八人は

時間通り集會に出席した。クエーカー教徒の中でも何人かは私達に贊成してくれとは思つたものの、もちろん確かに多數を制するといふ見込みは立たなかつた。ところがクエーカー教徒からはたつた一人ジェームズ・モリス氏がこの案に反對するために現はただけであつた。彼はかゝる案が假にも提出されたことは重々遺憾であると述べ、彼の宗教のものは全部これに反對だから、このため揉め事が起つて組合がつぶれてしまふかもしれないと言ふのであつた。私達はこれに答へて言つた。

「そんな譯はありませんまい。私達は少數です。あなたの宗派の人々がこの案に反對で投票の結果私達が負ければ、すべてのかういふ團體の慣例の通り、私達の方が服従しなければなりません、また服従するでせう。」

やがてこの案を上程する時刻が來て、投票の動議が提出された。モリス氏は、規則に従つてさうするのに反對はしなかつたが、彼の確信するところによると、この案に反對するため出席しようと思つてゐるものが澤山あるから、彼等の來るまで暫く待つ方が公平であらうと云ふのであつた。

私達がこの問題を討議してゐると、給仕がやつて來て、二人の紳士が私に話があると言つて下に來てゐると告げた。降りてみると、クエーカー教徒の組合員が二人來てゐて、私に言ふには、彼等の仲間が八人すぐ近くの酒場に集つてゐて、もし必要があれば出席して私達に贊成投票をす

る決心だが、その必要がない方が有難い。こんな案に賛成すると、老人連や仲間との間にごたごたの起る心配もあるから、彼等の助けを借りないで巧く行きさうならさうして貰ひたい、と云ふのであつた。かやうに私達が多數を獲得することが確實になつたので、私は二階に上つて行つて、一寸ためらふやうな様子を見せてから、もう一時間延ばすことに同意した。モリス氏は「これは極めて公平だ。」と言つた。併し、彼の云ふ反対者は一人も現はれないので、彼はすつかりあわててゐたが、その中時間が切れたので、私達は決をとり八對一でこの案を通過した。二十二人のクエーカー教徒の中八人は私達に賛成投票をしようとしてゐたし、残りの十三人はこの案に反対でないことを示すため缺席したのだから、防衛に眞實反対のクエーカー教徒の数は二十一人に一人位の割合だらうと、後で私は見積つた。何故なれば、これらの人々は皆組合の正規の會員であり、仲間のうちで評判もよい人々で、又その會合でどんな問題が出るかは前以て承知してゐたのだからである。

ローガン氏は學識に富んだ尊敬すべき人物で、古くからのクエーカー教徒であつたが、同派の人々に宛てた一文を書いて防衛戦争には賛成の旨を宣告した。その意見には多くの有力な論據があつた。氏は砲臺建設の富籤券購入のため六十ポンドの金を私に渡し、籤で當つた金も残らずその目的に向けられたいと指圖してきた。彼は舊主人ウィリアム・ペン William Penn (1644-1718. エーカー教徒で、同派の再興者と云はれる。又ペンシルベニア州の所有權はその子孫の手にあつた。) の防衛に關する次のやうな逸話を話してくれた。彼

は若い時分この領主に連れられ、その祕書としてイギリスから渡航して來た。あたかも戦時のごとで、彼等の船は敵船と覺しい武装した船に追跡された。船長は防禦の準備をしたが、ウィリアム・ペン及びその一行のクエーカー教徒には手傳つて貰はうとは思はぬから、船室に退いてゐてくれと言つた。一同は言はれる通りにしたが、ジェームズ・ローガンだけは進んで甲板に居残り、大砲の所に部署を與へられた。その中敵だと思つた船が味方であることが分つたので、戦闘は全く行はれなかつた。ローガンがそのことを知らせるため船室へ降りて行つたところ、ウィリアム・ペンは彼が甲板に留まり、宗派の教義に背いて船の防戦の手傳ひをしようとしたのを、はげしく非難した。船長が頼んだわけではないから、殊に不都合だといふのである。かやうに皆の面前で叱られたので、祕書もむつとして答へた。

「私はあなたの召使ですよ。なぜ降りて來いと命令しなかつたのですか。さつきはあなただつて危険だと思つたものだから、私が上に残つて船の防戦を手傳ふのを喜んでゐたのではありませんか。」

私は長年州會にゐたが、州會ではいつもクエーカー教徒が多數を占めてゐた。彼等は戦争反対を主義としてゐたので、國王の命令で軍事上の援助を要求される度に、ひどく困つてゐたものである。彼等は一方ではきつぱり拒絶して政府の怒りを買ひたくなかつたし、他方では主義に反したことに應諾して仲間のクエーカー教團の人々を怒らせたくなかつた。そのため様々の遁辭を

設けて要求に應ずることを避け、どうしても止むを得ぬ場合には、何とか他の名目を考へだして承諾を與へるのであつた。「國王の御用のため」だからといふ名目で金を出すことにし、その用途に就いては説明を求めないのが、彼等のとつときの遣り方だつた。

だが要求が直接國王からでない場合には、この名目では工合が悪いので、何かほかの文句を探さねばならなかつた。例へば、確かルイスバーグ(Louisbergはノルヴァン海岸にあつた要塞。守備隊のためだつたと思ふが、火薬を買ふために、ニュー・イングランド政府からペンシルヴェニア州に補助金を求めて來た時なども、トマス知事はしきりに州會にこれに應ずるやう勸告したが、彼等は火薬を買ふ金を出すことには反對だつた。といふのは、火薬は戦争の一要素だからである。けれども彼等はニュー・イングランド援助費三千ポンドを可決し、この金を知事に委ね、パン、穀粉、小麦、又はその他の穀類の購入に當てさせることにした。參事會員の中には州會をもつと苛めようと考へ、そんな食料品は要求したものではないから受取らないがよいと知事に進言するものもあつた。だが知事は「いやその金は貰つておきませう。州會がどんな積りだか、私にはよくわかつてゐますからね。その他の穀類といふのは火薬のことですよ。」と答へた。彼はその通り火薬を買つたが、州會では別に異議も唱へなかつた。

前に消防組合に富籤を買ふ案を出し、それが通るかどうか危いと心配してゐた時、私が友人の組合員の一人をつかまへて次のやうに言つたのはこの事を諷したのである。

「もし私達が負けたら、その金でファイヤ・エンジン(消防ポンプ)を買ふ動議を出しませう。クエーカー教徒もそれには反對出來ますまい。そこであなたが私を、私があなたをそのための委員に指名すれば、大砲を買ふことが出來ますよ。大砲は確かにファイヤ・エンジン(火器)ですからね。」

「なるほど」と友人が答へた、「長らく州會にあるうちに狡くなりましたね。二通りの意味を含んでゐるその提案なら、例の麥とその他の穀類——あれといふ取組ですな。」

クエーカー教徒は凡て戦争は不法であるといふことをその信條の一と定めてこれを公表し、既に公表した以上は、後に考へが變つても簡単に撤回するわけにはゆかないため、種々困惑するに至つたのである。これに就いて思ひ出すのは、他の宗派、即ちダンカー教徒(Drinkers、十八世紀獨に起つた浸禮派の一派)のもつと用心深い態度である。私はその宗派の創設者の一人マイケル・ウエフェアとはその創立直後からの知合ひであつた。彼等は他の宗派の狂信者連中にひどく中傷され、全く覺えない穢らしい信條や慣行を持つてゐるものやうに攻撃されると彼が私にこぼしたことがあつた。さういふことは新しい宗派にはつきものことだから、そんな悪口を止めさせるため、彼等の信仰簡條や宗規を公表する方がよくはないかと私が言ふと、以前さういふ提案もあつたが、次のやうな理由で否決になつたことであつた。

「私達が初めて教團を起した時」と彼は言つた、「神はわれらの心を照らしたまひ、眞理と思

はれた教義が誤りであり、誤りと思はれた教義が眞理であることを悟らしめたまうたのです。神はその後も折に觸れ新たな光りを我等に示したまふので、教義も次第に改められ、過ちは時とともになつたのです。併し現在私達がこの進歩の階段の終極點、精神的乃至神學的知識の完成點に達してゐるといふ證據はありません。もし我々が信仰箇條を印刷に附してしまふと、それに束縛制限されるやうに感じ、進歩、改善を續けることを欲しなくなり、はせぬかと心配するのです。まして私達の後繼者は、宗門の創設者や長老達の行つたことは神聖なものに思ひ、これを捨てることができず、尙更改善は望みがたいでせう。

かやうな謙讓さを持つ宗派は人類の史上で恐らく唯一の例であらう。凡ゆる他の宗派は眞理は凡て已にあるものと考へ、己れと異なるものがあれば、異なる方が誤つてゐると考へてゐる。それは恰も霧の日に道を行く旅人に似てゐる。彼の少し先を行く人々も、後から来る人々も、又左右の野原にゐる人々も、すべて彼には霧に包まれてゐるやうに見え、たゞ自分の廻りだけが明るく見える。併し事實は彼自身も他の人と同様霧に包まれてゐるのである。この種の當惑を避けるために、クエーカー教徒も近年は漸次に州會や州の政治等の公職を辭し、主義を曲げるよりも、權力を捨てる方を選んだやうである。

年月の順序からいへば前に書くべきことであつたが、一七四二年に私はオープン・ストーヴを發明した。このストーヴでは、新しい空氣ははいる時に暖まるしかけになつてゐるので、從來の

ものより暖房にもよく、同時に燃料も節約になつた。私はその模型を古くからの友人ロバート・グレース氏に贈つたが、氏は熔鐵爐を持つてゐたので、このストーヴに使用する鐵板の鑄造を始めた。ストーヴの需要はだん／＼たかまつたから、彼は大分儲けたやうだ。私はその需要を一層旺んにするため次のやうな題目のパンフレットを書いて公けにした。それは「新發明のペンシルヴェニヤ式ストーヴに就いて。その構造及び使用法を詳細に説明し、他の如何なる暖房装置よりも優良なることを證明す。從來使用されたるストーヴの缺點はかくて凡て除かれたり。云々」といふのであつた。このパンフレットは非常な効果を擧げた。トマス知事はこの中に説明されたストーヴの構造がひどく氣にいつて、數年の期間中專賣特許權を與へようと言つて來た。併し私がかういふ場合に常々自分には重要と思はれる一つの主義があつたので、これを斷つた。即ち、我は他人の發明から多大の利益を受けてゐるのだから、自分が何か發明した場合にも、そのために人の役に立つのを喜ぶべきで、それで儲けようなどとしてはならぬといふ考へである。

併しロンドンのある金物屋は私のパンフレットに述べた意見の大部分をとり、自分の工夫とつきまぜて機械の模様を一寸變へ、そのため却つて能率を悪くしたが、ロンドンで特許をとり、小金を作つたといふことだ。私の發明を盗んで人が特許をとつたのはこれだけではない。尤もいつもこれと同様に成功したわけではないが。そんな時、私は嘗て争つたことがない。といふのは特許をとつて自分が儲けようといふ考へがなかつたし、争ひ事は好まなかつたからだ。このストー

ヴは當ペンシルヴェニアでも、又近所の諸州でも、非常に多くの家庭で用ひられ、大へん薪の節約になつて來たし、現になつてゐるのである。

第九章 社會的活動(二)

講和條約が結ばれ義勇軍團の仕事も片附いたので、私は再び大學建設問題に心を向けた。第一着手として私の採つた手段は仕事好きの友人數人を集めてこの計畫に参加させることであつた。その大部分はジャントー・クラブの會員であつた。次の手段は「ペンシルヴェニアに於ける青年教育に關する提案」と題するパンフレットを起草して公表したことである。私はこれを無代で州中の有力者達に配布し、彼等がそれを閲讀して多少心構へができたと見て取るや否や、大學の創設並に維持のための寄附金募集に取り掛つた。寄附金は五箇年間分納といふことにした。かやうに分納にすればそれだけ寄附金も多くなるだらうと考へたのであるが、實際にもさうだつたやうだ。確か集つた金は五千ポンドより少くはなかつたはずである。

私はこの提案の序文の中で、これらは私の創案として發表するのではなく、公共心ある數人の紳士の創意に基く旨を斷つておいた。平素の處世法則に従ひ、自分が公益事業の發起人であると世間に吹聴するのを、私は極力避けたのである。

計畫を直ちに實行に移すため、寄附應募者達は二十四人の評議員を選出し、當時の檢事總長フランシス氏と私を大學管理規則の起草者に指名した。起草を終り調印が済むと、校舎を借り、教

授を招聘して授業が始まつた。これは同じく一七四九年のことだつたと思ふ。

學生はどしどし殖えて、間もなく校舎が手狭になつたので、私達は新築するつもりでどこかい處に地所はないかと探してみると、偶然にも既に出来てゐる大きな建物で、少し模様變へさへすれば、十分間に合ふのが手に入つた。それは前述のホイットフィールド氏の信者達が建てた建物で、これが私達の手に入つたに就いては次のやうな事情があつた。

この建物は各宗派の信者の獻金によつて建てられたものであるから、土地建物の管理を托すべき委員の指名には、ある一宗派が優勢を占めることのないやうに、特に注意が拂はれてゐた。もしある一派が優勢を占めると自然建物全體をその派だけの使用に當てることもなり、初めの目的に反する虞があるからである。それゆゑ各宗派から一名づつ、即ち國教派から一名、長老派から一名、浸禮派から一名、モレヴィアン派から一名といふ風に指名されたわけである。もし死亡のため缺員が出来た時は、寄附者中から選舉によつてこれを補充することになつてゐた。たまたまモレヴィアン派の委員が同僚と仲がよくなかつたため、彼が死ぬと委員達はモレヴィアン派からはもう委員をとらぬことに決めた。ところでほかの派から選ぶとすれば、同宗派から委員が二人出て来るわけだが、これを避けるにはどうしたらよいかが次の難問となつた。

數人の名前が出たが、このために意見が一致しなかつた。遂に一人が私の名を擧げた。といふのは私は一人の誠實な人物といふだけで、どの宗派にも屬してゐないからといふのである。これが一同の容れるところとなり、私が選ばれることになつた。

この建物が建てられた當時の熱情はもうとうとうから衰へてしまひ、委員達も新たに寄附金を集めて地代を支拂つたり、建物にかゝつた種々の借財を返済したりすることが出来ず、困り抜いてゐた。私は今では兩方の管理委員、即ちこの建物と大學との管理委員を兼ねてゐたので、双方と折衝する機會に恵まれ、遂に兩者の間に契約を結ぶことに成功した。これによつて、建物管理委員は建物を大學管理委員に引渡し、他方大學側は負債を返済し、最初の目的に従つてこの建物の中の大ホールは永久に臨時の説教師の用に公開し、且つ貧困兒童の教育のため無月謝の學校を經營することに決つた。

直ちに書類が作成せられ、借財を支拂ふとともに建物の所有權は大學管理委員の手に移つた。廣い天井の高いホールを幾階かに分け、各階を區切つて各學部の部屋を作り、敷地も買ひ足し、やがてすつかり私達の目的に合ふやうに整つたので、學生はこの建物に移つた。職人との折衝、材料の購入、仕事の監督等の勞苦は、全く私の一身にふりかゝつたが、自分の商賣の邪魔にはならなかつたので、私は愉快にそれらを片づけて行つた。それといふのは、私はこの前の年、勤勉誠實で非常な手腕家デーヴィッド・ホール君を私の組合員にしてゐたが（私は四年間も彼を使つて見てその人物はよく知つてゐた）、この人が印刷所の世話は全部引受けてやつてくれ、私にはきちんきちんと利益の配當をよこしてくれたからである。この組合經營は十八年も續き、双方に滿

足を與へた。

大學評議員はその後暫くしてから知事の許可を得て法人組織となつた。基金は英國からの寄附や領主達からの土地の下付によつて増加し、後には州會からもかなりの寄附があつた。かくして現在のフィラデルフィヤ大學は設立されたのである。私は創立當時から今日まで四十年近くもその評議員をやつてゐるが、多數の青年がこゝで教育を受け、知能を磨いて世に秀いで、公職に就いて功績をたて、國の名譽ともなつてゐるのを見て多大の歡喜を覺えるのである。

上に述べたやうに、自分で商賣をしなくとも濟むやうになつた時には、大したことはないが必要なだけは財産もできたことだし、今後は學問の研究や慰安に費す暇もあらうと楽しみに思つたものである。私はイギリスからフィラデルフィヤへ講義に来てゐたスペインス博士の實驗器械をそつくり買つて、電氣に關する實驗を次々に進めて行つた。ところが今度は世間の人は私を閑人だと思ひ、私をつかまへて公共の仕事させ始めた。市政の凡ゆる部門から、それも殆ど同時に、さまざまの仕事を押しつけてくる有様で、知事は私を治安委員會の一員に任命し、市會は私を市議の一人に選び、間もなく參事會員に推した。また一般市民は私を彼等の代表に選んで州會に送つた。この最後の地位は私には殊に嬉しかつた。といふのは私はもう、討論を聞くために州會へ出席するのに飽々してゐるのに、書記だから自分が討論に加はるわけにはゆかず、おまけにその討論と來たら大ていは無味乾燥なもので、私は魔法の正方形や輪などを作つたりしてやつと退屈

を紛らしてゐたのだからである。また自分が議員になれば、善事を爲す力も増大するだらうと考へたからでもある。尤もかう云つたからとて、かやうにさまざまの役についたのを別段自慢には思はなかつたと言ふつもりなのでない。確かに私は自慢に思つてゐたのである。初めの出の憐れだつたことを考へれば、これらの地位は私にとつては大したものであり、殊にそれらは全く私から求めたわけではなく、私に對する世人の厚意の自發的な證明であつただけに、私には嬉しかつたのである。

治安判事の職務の方は二三度法廷に出席し、判事席に坐つて當事者の主張を聞いたりして、いくらかやつては見たが、かゝる地位を辱しめないためには、私の現行法規の知識では足りないことに氣がついたので、州會で立法者としての重任を果さなければならぬからといふことを理由に、私はだん／＼手を引くことにした。州會の議員には十年間毎年選舉されたが、私は一度も選舉人に投票を頼んだこともなく、また直接にも選舉して欲しいなどと述べたこともなかつた。私が州會に議席を得るやうになつてから、私の息子が書記に任命された。

翌年カールライル (Carlisle, ペンシルヴァニア州カンバーランド郡の小市。ドイツキンツン・カレヂがある。) でインディアン種族との間に條約が結ばれることになり、知事は州會にメッセージを送つて、參事會員數名とともに條約締結委員となるべき議員若干名の指名を求めて來た。州會は議長ノリス氏と私を指名した。私達は委任を受けてカールライルに赴き、直ちにインディアン種族と會見した。

この種族の人々は非常に酒飲みが多く、酔へばとても喧嘩つぽく亂暴になるので、私達は彼等に酒を賣ることを嚴禁した。するとこの禁止に對して彼等が苦情を云つて來たので、會議中酒を飲まずにゐたら、用件が片づき次第うんとラム酒を飲ませようと私達は話した。彼等は酒を飲まぬと約束し、且つその約束を守つた。約束を破らうにもラム酒は手に入らなかつたのだから。會議は頗る順調に進行し、双方の満足裡に終了した。そこで彼等はラム酒を要求し、それを與へられた。それは午後のことだ。彼等は男女子供とも百人近くの人數で、町を出たばかりの處に、方形の假小屋を建てて住んでゐた。晩方になると、彼等の處からひどい騒ぎが聞えるので、どうしたことかと委員達は見に行つた。見ると彼等は廣場の眞中に大篝火を焚き、男も女もすつかり酔拂つて、喧嘩したり格闘したりしてゐた。彼等の黒ずんだ半裸體は薄暗い篝火に僅かに照らされ、燃えさしを手に互に追ひかけ打ち合ひ、恐しい叫びを立ててゐる様は、私達が頭に描く地獄の姿にも劣らぬ光景であつた。こんな騒動を鎮める手だてはないので、私達は宿舎に引上げた。夜中頃に何人か雪崩のやうに戸口へ押し寄せ、ラム酒をもつとくれと要求したが、私達はとりあはなかつた。

次の日には、彼等はあんな騒ぎをして濟まなかつたと氣がついたのだらう、三人の長老をよこして詫びを言つて來た。口上を言つた男は自分達の過ちを認めましたが、それもラム酒のせゐだと述べ、さて今度はラム酒の罪を言ひ解くためにかう言つたのである。

「萬物の創造主なる偉大なる神は、凡てのものを何かの役に立つやうに作りたまつたのです。何の役に立つやうに作りたまつたにせよ、作られたものは常にその役を果さなければなりません。さて神はラム酒をお造りになつた時に次のやうに仰せられました。『インディアンはこれを飲みて酔ふべきなり。』だからその通りにならなければならなかつたのです。」

誠に地上の耕作者に場所を與へるため、これらの野蠻人を根絶することが神の御旨であるならば、ラム酒は神の採用された手段であると思へないこともない。以前沿岸地方に居住してゐたインディアン種族は既に残らずこの酒のために亡びてしまつたのである。

一七五一年に私の極く昵懇の友人トマス・ボン博士 Thomas Bond (1712-84. ファイラデルフィヤの醫者、フランクリン等の文學協會のメンバー) は、州民であると旅行者であるとを問はず、貧窮な患者を收容し治療するため、ファイラデルフィヤに病院を建てようとした。頗る奇特な計畫で、私の手柄にされてゐるが、事實は彼がもとなのである。彼はこのために寄附金を得ようと熱心に活動したが、アメリカでは新しい試みではあり、初めはなかなか呑みこめぬので、餘り成功は收めなかつた。

遂に彼は私の所へ來て、公共事業は、君が關係しないことには、とてもものにはならぬと悟つたと人を喜ばすやうなことを言つた。

「といふのは、」と彼は云つた、「寄附を頼みに行つた先でよく訊かれるのですよ。『このことはフランクリンさんに相談したのですか。それであの人の考へはどうなのですか。』つてね。そ

ここで私がこれは畑違ひのことだと思つたからまだ相談してないと答へると、その人達は寄附を斷り、『まあ考へて置きませう』と云ふのですからね。」

私はこの計畫の性質や效用を聞き糺して甚だ満足な説明を得たので、自分が寄附に應じたのはもちろん、他の人々から寄附を集める計畫にも喜んで参加した。尤も寄附を募る前に、私はまづ新聞でこの問題を論じ、人々に豫め心構へをさせるのに骨を折つた。これはかういふ場合の私の常套手段であつたが、ボンド博士はこれを怠つたのである。

この後は寄附も大分氣前よく集まるやうになつたが、そのうちまた不活潑になつて來たので、私はいくらか州會に援助して貰はなくては不十分だと思ひ、援助を請願することを提案し、その手續をとつた。地方出の議員は初めはこの計畫を喜ばなかつた。これは市民にのみ役に立つのだから、その費用も市民のみが持つべきだと云つて彼等は反對し、その市民にしても廣く賛成者があるかどうか疑問だと云ふのであつた。これに反して、ずるぶん賛成者があるから自發的な寄附によつても二千ポンドは間違ひなく集まるといふ私の主張を彼等は途方もない見積りで、とても出来ることではないと考へてゐるのであつた。

そこで私は一策を案出し、請願の趣旨に従つて寄附者達を法人に組織し、これに對し若干金額を下付する旨の法案を提出する許可を求めた。州會がこれに對し許可を與へたのは、主として法案の内容が好ましくなければ否決できると考へたがためである。私は法案を起草し、重要な條項は條件附にした。即ち、

「又前述の權限に基き左の如く定む。前述の寄附者等相集りて、理事及び會計係を選任し、各自の義捐による基金二千ポンドに達し（これより生ずる毎年の利息は貧窮患者の該病院への收容、給食、看護、醫療相談、並に醫藥等の資に充つるものとす）、且つ州會議長これをもつて急迫の不安無きものと認むる時は、議長は該病院の設立、建造、設備の費に充てしむるため、金二千ポンドを二箇年に分割して該病院會計に交付すべき旨の州會計に對する指圖書に署名することを得、又署名すべきものとす。」

この條件のおかげで法案は通過した。補助金下付に反對してゐた議員も、今度は金を出さずに慈善家だといふ評判が得られると考へてこの案に賛成したからである。また私達は人々に寄附を勧誘する場合、法律のこの條件附の保證を強調し、各人の義捐額はこの法律で倍加されるのだから、是非とも出金を乞ひたいと説いたのである。かやうにこの條文は二重に役立つわけだ。かくして應募額は間もなく必要額を超過し、私達は州の補助金を請求してこれが下付を受け、計畫を實行に移すことが出來た。程なく便利な立派な建物が設立された。この病院はその後絶えず利用せられて社會を裨益し、今日も尙ほ繁榮してゐる。私の政治的駆引のうちで、その成功したのがこんな嬉しかつた例は他にないし、また少し狡猾な手段を用ひたと後では思ひながら、別段氣が咎めぬ例も他にはないのである。

ギルバート・テネット牧師が發起人になつて、集會場新築のため寄附金を募りたいが援助して欲しいと頼んで來たのもこの頃であつた。それは以前ホイットフィールド氏の弟子だつた長老派の信者で、彼の周圍に集つた人々の使用に充てるためであつた。余り度々寄附を頼んで市民達に嫌がられるのは感心しないので、私はきつぱりと斷つた。すると氏は私の今迄の経験で、氣前がよくて公共心があると思ふ人の名簿を作つては貰へまいかと頼むのであつた。私が寄附を募つた時親切に應じてもらつてゐながら、その人々の名を書き記して、他の物乞ひ達のために煩はされるやうにするのは不謹慎な話だと思つたので、私はさういふ表を上げることも斷つた。それではせめて忠告だけでも欲しいと氏が望むので、

「それは申しませうとも。」と私は答へた。「まづ第一にはいくらかでも出すと思ふ人には全部に頼むことです。次には出すかどうか分らぬと思ふ人にも當つてみて、出してくれた人の名簿を見せるのです。最後に、出さないに決つてると思ふ人も無視しないことです。といふのは、あなたの思ひ違ひの場合もあるかもしれませんからね。」

氏は笑つて禮を述べ私の忠告に従はうと云つた。實際氏は私の言葉通りすべての人に依頼した。そして豫想よりずっと多くの金を得て、その金で今も尙アーチ街にある、あの廣い立派な集會場を設立したのである。

私達の市はまことに整然と設計されてをり、街路は廣く眞直で直角に交叉してゐたが、惜しい

ことに、この街路は長い間無舗装のままだつたので、雨の日には重い車の轍に鋤き返されて泥沼になり、横切るのにも骨が折れ、お天氣の日には埃でかなはなかつた。私はジャージー市場と呼ばれてゐる近くに住んでゐたが、住民が食糧品を買ふのに泥まみれで歩いてゐるのを見て氣の毒に思つてゐた。そのうち、とうとう市場の中央から下手しもての方の僅かばかりの地面が煉瓦で舗装されたので、市場に來てしまへばしつかりした足場があるやうになつたが、そこへ着く迄に靴の上まで泥だらけになるのであつた。私はこの問題に就いて意見を述べたり、筆にも書いたりしたが、遂に私が世話役になつて煉瓦の舗装道路と市場の間を石で舗装させた。それは人家に隣る側であつた。これで暫くの間は靴も濡らさず氣持よく市場に出入出来るやうになつたが、他の街路は未だ舗装されてゐないので、泥の中を通つて來た車がこの舗装道路へ來る度に泥を振り落して行くので、すぐに泥だらけになるのであつた。この頃はまた市街掃除夫がゐなかつたので、その泥を片づけるものもなかつた。

暫く探してゐると、各戸で月に六ペンスづつ拂つてくれれば、一週に二回舗道を掃き清め、各戸の前の泥を片附ける仕事を引受けようといふ貧乏な、まめな男が一人見つかつた。そこで私は一文を物してこれを印刷し、こんな僅かな支出に依つて得られる近所近邊の利益を述べた。即ち澤山の泥をみんなの足にくつつけて運ぶといふことがなくなるから家の中をきれいにしておくことも非常に樂になるし、買物をした者が這入つて來るのが容易になるから、店の客が多く

184
 といふ利益があり、また風の日でも埃が商品に吹き積ることがないといふ得がある、等々である。私はこの印刷物を一部づつ各戸へ配つてから一日二日たつて、この六ペンスを支拂ふ協定に加入する家を調べに歩いて廻つた。ところが一戸残らずこれに署名してくれ、暫くの間この事はよく實行された。市の住民はいづれも市場の周りの舗道が清潔なのを喜んでゐた。といふのは、これが皆にとつて便利なことだからで、このため街路を全部舗装したいと皆が望むやうになり、そのためなら税金も快く出さうと考へるやうになつた。

その後程経て私は市の街路の舗装を目的とする法律を起草して、州會に提出した。これは私が一七五七年に渡英する直ぐ前のことであつた。この案は渡英前には通過しなかつたが、その後課税方法を多少變更して通過した。その變更は私には改善とは思へなかつたが、街路の舗装と共に照明に關する條項が附加されたのは非常な改善であつた。一私人の故ジョン・クリフトン氏が玄關のところをランプを吊したのが、ランプの效用を示す實例となつて、人々は初めて町中を照明するといふ考へを抱くやうになつたのである。この公益を計つたといふ名譽も亦私に歸せられてゐるが、實はそれはこの紳士に屬すべきものである。私は彼の例に倣つただけで、たゞ初めロンドンから輸入されてゐた球型ランプとは違つた型のランプを考案した點に多少功績があつた位のものである。ロンドン製のものには次のやうな不便があつた。それは下から空氣が這入らなため、煙が容易に上から出てゆかず、火屋ほやの中をぐるぐる廻つて内部に籠り、すぐに光りの邪魔をして本來の明るさを失はせるのであつた。その上毎日きれいに拭く面倒があつたし、誤つてぶつつかれば、壊れてしまつて全く役に立たなくなるのである。それゆゑ私は火屋ほやを四枚の板ガラスで造り、煙の出をよくするために上の方に長い煙突をつけ、煙が上に昇り易いやうに空氣孔を作るやうに考案した。この方法によつてランプは汚れぬやうになり、ロンドン製のものやうに數時間で暗くなることもなく、朝までずつと明るかつた。誤つて打つても、壊れるのは大概ガラス一枚だけであるから、修理も簡單であつた。

時々不思議に思つたのであるが、ロンドンの人達はヴォークスホール(Vauxhall、ロンドンの地名。テムズ名、Vauxhall) (River) があつた。で使つてゐる球型ランプが、底に孔があいてゐるおかげでいつもきれいになつてゐるのを見ながら、なぜ街燈にそんな孔を造ることに氣がつかないのだらう。尤もこの孔は別の目的、即ちその孔から下つてゐる小さい麻絲で芯に急に點火するために出來てゐるので、空氣を入れるといふ別の效用には考へ及ばなかつたものやうである。それゆゑランプに火がともされて數時間もたつと、ロンドンの街路は大變薄暗くなつてしまふのである。

かういふ改良案の話の序ついでに思ひ出したのだが、私はロンドンに滞在中フォザギル博士 John Fothergill (1790-80、英の醫師。クエーカー教徒。ロンドンの流行醫であつた。)に次のやうな改良案を持ち出して見たことがある。博士は知人の中でも最も立派な人物の一人で、公益事業の優れた助成者であつた。ロンドンの道路をよく觀てゐるのに、天氣の日に掃除されたことがなく、軽い塵埃は片づけもしないで積るにまかせて

置くため、雨が降るとそれがみな泥になつてしまひ、幾日もの間舗道が深いぬかるみになり、横ぎることが出来るのは、貧乏な人々が箒で掃き清めた小路だけといふ始末だつた。さて、それからえらい骨を折つて、泥を掻き集めて荷車に投げ込むのだが、車は上が開いてゐるため、舗道を通る車が揺れる度に横側から泥をふり落し、しばしば歩行者の惱みの種になるのであつた。塵埃のひどい街路を掃除しない譯は、埃が商店や住宅の窓へ飛び込むからといふのであつた。

偶然の出来事から私はどんなに僅かな時間で掃除ができるものかといふことを知つた。或る朝クレイヴン街にある私の家の門前で、見すばらしい一婦人が樺の枝の箒で舗道を掃いてゐた。その女は病み上りの人のやうに蒼白く弱々しさうに見受けた。私は誰に雇はれて掃除してゐるのかと聞いて見た。ところがその女の云ふには、「誰にも雇はれたわけではありません。私は貧乏で困つてゐますので、且那方の御門前を掃いて、幾らか頂戴しようと思つてゐるのです。」そこで私はこの女にその通りをすつかり掃除してくれれば一シリング上げようと云つた。丁度その時九時であつたが、正午にはその女は一シリングを受取りにやつて來た。私は最初その女ののろ／＼した働き振りを見てゐたので、仕事がそんなに早く片づくとは思へなかつたので、下男を調べにやると、歸つて來て云ふには、通りは隅々まですつかり掃除ができ、塵埃は全部中央にある下水溝に積んであるとのことであつた。その次の雨で、塵埃は流されてしまひ、舗道はもちろん、下水まですつかりきれいになつた。

そこで私はあの弱々しい婦人が三時間であの通りの掃除が出来るなら、頑丈な男の働き手だつたら、その半分の時間で済むだらうと考へた。さて序に云ふが、こんな狭い街路では歩道の兩側に一つづつ下水を附けるより、道の真中を走る下水を一つ設けた方が便利である。といふのは、道路に落ちる雨は兩側から流れて真中で出合ひ、勢のいゝ流水になり途中の泥を全部洗ひ流してしまふからである。ところが二つの下水に分けると、どちらも勢が弱くなつてきれいなならず、たゞ途中の泥をます／＼どろ／＼にするだけである。そのため馬車の輪や馬の蹄は泥を歩道に跳ねとばし、道は益々汚れ、また滑りやすくなり、又時には歩行者に泥がはねかゝつたりするのである。私が博士に話した案といふのはかうだ。

「ロンドン及びウェストミンスターの街路の清掃と清潔の保持をもつと有効にするため次のことを提案したい。數名の監督を置き、これと契約して、それ／＼の持場の大通り、小通りから、晴天の日には塵埃を掃き取り、雨天の日には泥を掻き集めさせる。監督達には箒その他これに必要な道具を給與し、めいめいの番小屋に保管させ、彼等が雇傭する貧民に貸與させるやうにする。晴天續きの夏季には商店や家々の窓が開く前に、埃はすつかり掻き集め、適當な間隔を置いて積んでおき、市街掃除人は固く蓋をした荷車でこれを運び去るやうにする。

「掻き集めた泥を積んだまゝにして、また車の輪や馬蹄で散らかされることのないやうにする。掃除人に給與する荷車の車體は、高く車輪の上に置いたものでなく、滑體の上に低く載せたもの

とし、底は格子造りにし、麥藁を敷いておく。かうすれば投げ込まれた泥は車体内に残るが、水ははかされる。従つて、大部分は水の重さなのだから、泥はずつと軽くなるだらう。かういふ車體を適宜に配置しておき、手押一輪車で泥を運んで来てこれに積み、泥の水がよくはけるのを待つて、馬をつけてこれを運び去る。」

この計畫の後半の部分は何處にでも實行出来るかどうか、後には私も疑はしいと思ふやうになつた。街路の道幅が狭いため、あまり通行の邪魔にならぬやうに排水車を置いとくことができないところがあるからだ。併し前半、即ち店の開く前に塵埃を掃除して運び去ることは、日の長い夏には確かに實行出来るといふ考へは今も變らない。或る朝七時頃ストランド通りとフリード通りを歩いて見たが、もう眞晝間で、日が出てから三時間の上もたつてゐるのに、開いてる店は一軒もないといふ有様だつたくらゐるだから。ロンドンの住民は、好んで蠟燭をつけていつまでも起きてゐて、日が出てから眠つてゐるわけだが、それでゐて蠟燭税が高いの、蠟が高いのと始終ぶつぶつ云つてゐるのは、をかした話である。

こんな些細な事柄は心に留めて述べ立てる價值はないと思ふものもあるだらう。なるほど埃が風の強い日に一人の人間の眼にはいつたとか、一軒の店に飛び込んだとかいふのなら大したことではない。だが人口の多い都市でかういふ事が無數に、且つ始終くり返して起るとなると、事は重大になるのである。この事を考へたなら、一見些細に見えることにも注意を拂ふ人がゐるたからといつて、手きびしく非難する氣にはなるまい。人間の幸福は時たま起るすばらしい好運よりも日々起つて来る些細な利便から生れるものである。例へば貧しい青年に顔を剃り、剃刀を整頓しておくことを教へてやるのは、一千ギニー恵んでやるよりも、その男の生涯の幸福に寄與するとは大きいであらう。こんな金額はすぐに使つてしまひ、馬鹿な使ひ方をしたと悔むのが落ちだが、片つ方の場合だつたら、しよつちゆう床屋で待たされたり、汚い指、臭い息、切れない剃刀などで、いやな思ひをする心配はなくなり、自分の勝手な時に、よく切れる剃刀で剃る喜びを毎日味ふことが出来るのである。かういふ考へで、私はこれまでの數頁を費し、私が長年大そう仕合せに暮して來た愛するこの町や、その他のアメリカの都會にとつて、何時かは役に立つやうな色々の暗示をその中に盛りたいと思つたのである。

私は暫くの間アメリカの郵政長官に雇はれて會計監査吏となり、幾つかの局の整理や局員の譴責に當つてゐたので、一七五三年に長官が死去するとイギリスの郵政長官の委任を受け、ウイリアム・ハンター氏と共にその職を襲つた。これ迄アメリカの局ではイギリスの局には一文も支拂ひをしてゐなかつた。私達は局の利益の中から捻出出来るなら、二人で年に六百ポンドは貰へるはずだつた。だがさうするには色々の改良が必要で、その改良には最初はどうしても金がかかるものがあつたので、最初の四年のうち私達は凡そ九百ポンドばかり局に貸した勘定になつた。だが間もなく金は返つてくるやうになり、大臣等の氣紛れのため免官になるまでに——そのこと

は後で述べるつもりだが——國庫への純収入がアイルランド郵便局の三倍に達するまでに漕ぎつけてゐたのである。だが私を無分別な處分に附して以後は、彼等はたゞの一文も受取れなくなつたのである。

郵便局の所用でこの年ニュー・イングランドに旅行したが、するとケンブリッジの大學は、(ハーヴァードの大學のこと。同大學はケンブリッジ)進んで私にマスター・オブ・アーツの稱號を贈つてくれた。(デボストン兩市に跨つてゐる。一六三六年創立)コネチカット州のエール大學からは、これより前に同様の稱號を贈られた。私は大學に學んだことはなかつたのに、かやうな次第でこの稱號を受けるやうになつた。これは物理学の一部門、電氣學上の私の改良や發見に對して與へられたのである。

第十章 軍事に活躍す (一)

一七五四年には再びフランスとの間に戦争が起りさうになつたので、植民大臣の命により、各植民地の委員がオールバニに會して會議を開き、この地でアメリカ・インディアンの六種族 *the Six Nations* *の酋長と商議して、双方の國土の防衛手段を講ずることになつた。

* ニュー・ヨーク州の中部より西部に住した Mohawks, Oneidas, Onondagas, Cayugas, Senecas 及び Tuscaroras の六種族。その數凡そ一萬五千。彼等は或は英人と同盟し、或は佛人に與し、又或は蘭人と結んだ。(譯者)

この命令に接したハミルトン知事はこれを州會に通告し、會合に際しインディアンに贈るべき適當な進物を調へるやうに求め、且つ議長(ノリス氏)と私をジョン・ペン氏及び祕書官ピーターズ氏に加はつてペンシルヴェニヤ代表委員となるやうにと指名した。州會でもこの指名に賛成で、進物の品も調へた。尤も彼等は州外に出て商議することはあまり好まなかつたが。かくて私達は六月の半頃オールバニで他の委員と會合した。

オールバニへの途中、私は國土の防衛並にその他の重要な共同の目的のために必要な限度に於いて、全植民地を一政府の下に統一する案を立てこれを起草した。ニュー・ヨークへ來た時、私は自分の案をジェームズ・アレクサンダー氏とケネデー氏に示した。この二人は公共事業には

深い造詣のあつた人である。兩氏の賛同を得たので私は自信を強め、これを會議に提出した。當時委員の中には同様な案を作成してゐるものが幾人かあるやうであつた。先決問題として同盟を結成すべきや否やの問題が提起され、満場一致で然りと決定された。そこで各植民地から一人の委員を出して委員會が構成され、數種の案を審議報告することとなつた。圖らずも私の案が選ばれることとなり、一二修正の後、直ちに會議に報告された。

この案によれば、中央政府は、國王の任命庇護する總督の司るところであり、大參事會は各植民地の代表者がそれ／＼の州會に會して選舉すべきものであつた。會議に於いては、インディア問題と併合して、連日この問題の討論が續行された。反對や障礙もいろ／＼あつたが、結局いづれも解決され、案は満場一致で可決され、その謄本は植民省及び各州州會へ移送されることになつた。この案の運命は奇異なものであつた。各州會はこの案を否決した。この案では中央政府の特權が大に過ぎると彼等は考へたのである。ところがイギリス本國では、民權が大に過ぎると考へられたのである。植民省はこれに不賛成で、従つて國王の裁可を得るための上奏をしなかつた。その代り植民省では同じ目的に一層よく適應させるといふ考へで、代案を作成した。それによると、各州知事は各參事會の會員等を率ゐて會議を開き、軍隊徵募、堡壘建設等の事に當り、經費は大英帝國の國庫から支出せしめるといふのであつた。その經費は後に議會のアメリカ課税法案によつて償還されるはずなのである。私の案は、その立案理由とともに、印刷された私の政治論

文中に出てゐるはずだ。

その冬はボストンに滞在して、この兩案に就いてシャーリー知事と大いに論じたものだ。この時の會談の内容も一部は前記の論文中に出てゐたと思ふ。私の案に對する反對の理由が、互に相異り相反してゐたことから考へると、私の案がまつたくは中庸を得てゐたのではあるまいか。もしこれが採用されてゐたら兩方にとつて仕合せであつたらうと今でも私は考へてゐる。私の案のやうに各植民地が團結すれば、立派に自ら守るだけの武力はできたはずで、さうすれば本國の軍隊は全く不必要になり、その結果として起つたアメリカへの課税の口實も、またそのために起つたあの流血の抗争も、當然に避け得られたはずである。尤もかゝる誤謬は決して事新しくはないので、歴史は國家や國王の過ちで充ち満ちてゐるのだ。

世の人々を見てみるがよい

己れの幸を知るものが

何と少いことか

知つてもこれを求めるものが

何と少いことか

爲政者といふものは、せねばならぬ事で手いづばいものだから、新規の計畫を考へたり、實行したりすることは、大てい面倒臭がつていやがるものだ。だからどんな勝れた公共の政策でも、

遠い慮りから採用されることは稀で、事情上已むを得ぬやうになつてから採用されるのである。ペンシルヴェニア知事は、「この案は頗る明快、且つ確乎たる見解の下に作成されたものと考へられるが故に、最も嚴密且つ眞摯な検討を加へられんことを要望する」旨の賛成意見を附して州會に送付した。然るに州會では、或る議員の術策の結果、不公平にも私がたまたま出席してゐなかつた時にその案を上程し、何等検討を加へることなくこれを葬つてしまつたので、私は少からず痛憤したのであつた。

この年ポストンへの旅行の途中ニュー・ヨークで、英國から赴任して來たばかりの新知事モリス氏に會つた。氏は以前から心安い仲であつた。氏はハミルトン氏が領主の訓令のために起る抗爭に飽き果てて辭職した後を繼ぐ委任状を持つてゐた。モリス氏は、「私も愉快に政治をやつて行くといふわけにはゆきませんまいね。」と訊ねたので、私は言つた。

「いえ、それどころか、大變氣持よくやつて行けますよ。州會と論争しないやうにさへ注意なさればね。」

「しかし、君、」と彼は愉快さうに言つた、「私がどうして論争を避けることが出来ると思ふのですか。御存知のやうに私は議論好きで、議論は私の大好物の一つですからね。まあ併し、折角御忠告を戴いたのだから、精々あなたの御意見に敬意を表するため、論争はやめることにしませう。」

彼が議論好きだといふのには多少譯があつた。彼は雄辯で鋭い詭辯家なので、議論には大てい勝つのだつた。何でも彼の父は夕食後の食卓で、始終子供等に議論させて、それを氣晴らしにしてゐたため、彼も子供の頃から議論家に育てられたのださうである。けれどもこんなことをするのは賢明なことではあるまい。私の觀察するところでは、理窟屋で反對好きで言葉争ひに耽るやうな連中は、多くは仕事の方はうまく運ばないやうだ。彼等は勝つことはある。併し決して人の厚意を得ることはない。ところで人の厚意は、勝利よりもずっと彼等の役に立つものなのである。私達は別れた。彼はフィラデルフィヤに、私はポストンに向つた。

歸途ニュー・ヨークでペンシルヴェニア州會の議事録を見たが、それによると、私との約束にも拘らず、彼はもう州會と激しい争論をしてゐる模様であつた。そして彼の在職中は、この兩者の間には絶えず鬭争が續いたのである。私もこれに参加した、といふのは州會に戻るや否や、私は彼の演説やメッセージに答へるための委員に任せられ、委員達の希望でいつも草案を作成したからである。私達の答辯も、彼のメッセージと同じく、大抵は辛辣なもので、時には野卑な誹謗になることもあつた。州會のために書いてゐるのは私だといふことが彼には分つてゐたので、二人が出合つたりしたら、それこそ殺し合ひもしかねぬと人は思つたかもしれない。だが彼は非常に性質のいゝ男だつたから、この論争のために二人の間に確執を生ずるやうなことは全くなかつた。私達は時々食事を共にしたりした。

この公けの争論の眞最中のことだが、或る日の午後私達は街で出合つた。「フランクリン君、一緒に僕の家へ行つて、今晚は僕の所で過さうぢやないか。君の好きな連中が来るはずだから。」彼はかう言つて私の腕を捕へて自分の家に連れて行つた。夕食後葡萄酒を飲みながら快談してゐると、彼が冗談のやうに云ふには、「國をやらうと言はれた時、では黒人の國が欲しいと望んだサンチョー・パンザー Sancho Panza (セルヴァンテスの名作「ドン・キホーテ」の副主人公の名) の考へは素敵だね。もし人民と巧く折合はなかつたら賣り飛ばすことができるからね。」

すると私の隣りにかけてゐた彼の友人の一人が云つた。「フランクリン君、君はなぜいつまでもあのいま／＼しいクエーカー教徒の肩を持つのかね。あんな奴は賣り飛ばした方がよくなるか。ね。領主はいゝ値を付けますよ。」

「知事がまだ賣り飛ばせるほど黒くしてくれませんからね。」と私は報いた。まつたく彼はメッセーゴことに、州會に墨を塗らうとひどく骨を折つたのだが、州會の方では彼が墨を塗るや否やそれを拭き取つて、かへつて彼の顔に黒々と塗り返すのであつた。そしてしまひには彼も黒人にされてしまふだらうと考へて、ハミルトン氏と同様に抗争に飽きはて、政府をやめてしまつた。

かういふ政争が起るのも、その根本はすべて私達の世襲の支配者たる領主達のせゐなのである。彼等は州の防衛のために費用を徴集しなければならぬやうな場合には、信じられない位の卑劣さで、彼等の代表に訓令を與へ、彼等の廣大な所有地を除外する旨法文中に明示した上でなければ、

必要な税を徴集すべきいかなる法案をも通過させないやうにしたのである。彼等はその代表たる知事からこの訓令を嚴守するといふ契約書さへとつておいた。州會はかゝる不正に反對して三年間抗争を續けたが、遂に屈服せざるを得なかつた。最後にモリス知事の後任デニ大佐が敢然この訓令に背いたのであるが、その次第は後に述べよう。

少し話が飛びすぎたやうだ。モリス知事の在職中に起つたことで、述べねばならぬことがまだ二三ある。

フランスとの間に一種の戦争が始まつたので、マサチューセツツ州政府はクラウン・ポイント (Crown Point, ニュー・ヨーク州エセツクスにある佛人の築いた要塞。一七五九年佛軍これを抛棄し、同七年には米軍によつて占據された。) の襲撃を企て、クインジー氏をペンシルヴェニアに、後の知事パウナル氏をニュー・ヨークに派遣して援助を求めしめた。私は州會に席を持ち、その内部の情勢にも通じてゐたし、クインジー氏とは同郷人だつたので、氏は私の勢力を利用して援助を與へるやう頼んで來た。私が彼の請願を傳へると、州會は快くこれを受理し、糧食の資に當てるため一萬ポンドの援助を議決した。然るに知事はこの法案(この金額と共に他の國庫獻納金を含んでゐた)に同意することを拒み、たとへ必要な税金であらうとも、領主の所有地はこれが負擔を免ずるといふ條項を挿入しなければ不賛成だと云つたため、州會はニュー・イングランドに有効な援助を與へたいと切望しながら、いかにしてこれを果すべきか、策を知らなかつた。クインジー氏は知事の同意を得ようと懸命に努めたが、知事は頑固に拒絶した。

そこで私は知事を除外し、公債局の保管委員宛の手形によつて問題を解決する方法を提示した。かゝる手形の振出しは法律に依り州會の権限に屬するのである。當時局には現金は殆どない状態だつたので、私は手形の期限を一年以内とし、五分の利息をつけるやうに提案した。かやうな手形で食糧品は容易に購へると思つたのである。州會は殆ど遲疑することなく、この案を採用した。手形は直ちに印刷され、これに署名してこれが處分をなすべき委員會が任命され、私はその一人となつた。この手形の支拂に充つべき資金は、當時貸出しのため州内に流通してゐた全紙幣の利子と消費税からの収益であつたが、それが頗る潤澤であることが分つてゐたので、この手形には信用が厚く、食糧品の支拂手段になつたばかりでなく、金持で手許に遊金のある連中はこれに投資する者が多かつた。手許に置いたまゝで利子がつき、而もいつでも現金として使へるので有利だと彼等は考へたのである。それゆゑ手形は熱心に買はれ、二三週間の中にすつかりなくなつてしまつた。かやうな次第で、この重要な問題も私の方策によつて仕遂げられたのである。クインジー氏は鄭重な覺書を送つて州會に謝意を表し、使命の達成に歡喜して歸國した。その後彼は私に對しては最も篤實親愛な友情を抱いて變ることがなかつた。

イギリス本國政府は、植民地に對して疑懼と嫉視の念を抱き、その武力が過大となり、自立の意の動くことを恐れ、植民地の聯合を認めて國土の防衛はこれに一任するといふオールバニでの提案を採用せず、ブラドック將軍 Edward Braddock (1695-1757、英の軍人、一七五五年七月デュークーン要塞攻

は、多少誤りがある) を派遣し、イギリス正規軍二聯隊を率ゐて守備に當らしめた。將軍はヴァージニ

ヤ州のアレクサンドリヤに上陸し、進んでメリランド州のフレデリックタウンに至り、車馬徵發のためこの地に止まつてゐた。或る方面からの情報によると、將軍は州會に對しては、國王への忠勤に背く不埒な奴等だとひどく怒つてゐるといふことだつたので、州會では心配して、將軍のところを伺候するやうに私に頼んだ。州會の使ではなく、郵政長官として伺候するので、表面の理由は、將軍は各州の知事と絶えず通信する必要があるに相違ないから、その文書を最も迅速且つ確實に傳達する方法を將軍と會つて取り決めたいといふのであつた。そして通信の費用は州會で持つといふのである。この旅行には私の息子が一緒に來てくれた。

フレデリックタウンへ行つて見ると、將軍は馬車徵發のためメリランドやヴァージニアの奥地にやつた連中がなか／＼歸らぬので、待ち焦れてゐるところだつた。私は彼の所に數日間滞在し、毎日食事を共にしたので、州會が將軍の行動を助けるために彼の到着以前に現に爲したことや、今後も喜んでしようと思つてゐることなどを知らせて、彼の憎悪を解く機會は十分にあつた。私が歸途に就かうとしてゐた時、徵發できる馬車の報告書が届いたが、それによると全部で僅かに二十五臺、それさへ皆が皆使へる状態にある譯ではなかつた。將軍や將校達は驚いて、「これではもう進軍はおしまひだ、出來ない相談だ。」と宣告し、糧食や行李やその他のものを運搬する手段のない國へ、それとも知らずに彼等を派遣した大臣達の手拔かりを攻撃しだした。馬車は少くと

も五十臺は必要なのであつた。

私は軍隊がペンシルヴェニアに上陸しなかつたのはお氣の毒なことである、あちらなら殆どどの百姓でも馬車を持つてゐるから、と何氣なく口に出してしまつた。將軍は私の言葉尻をしつかりとつかまへて、「では、あなたはその土地の有力者なんだから、馬車を手に入れてくれることができるでせう。どうか一つ骨を折つて下さい。」と云つた。そこで私が車の持主にはどんな條件を出すのかと聞くと、私が當然だと思ふやうな條件を紙に書いてくれと云はれた。云はれた通りに書くと、將軍は同意したので、早速委任状や訓令が準備されることになつた。この條件の内容は、私がランカスターに到着すると同時に發表した次の廣告の中に示される通りである。この廣告はたちまちすばらしい利き目があつた點で興味があるから、全文をこゝに掲載しておかう。

廣告

ランカスターにて。

一七五五年四月二十六日。

將にウイルズ・クリークに集合せんとする陛下の軍隊の使用に充つるため、各四頭の馬を備へたる馬車百五十臺及び乗馬、駄馬一千五百頭を必要とす。ブラドック將軍閣下はこれが賃借契約をなす權限を余に委託されたり。よつて余は本日より來る水曜日の夕刻まではランカスター

に於いて、來る木曜朝より金曜夕刻迄はヨークに於いて、この事務に當るべきことをこゝに廣告す。余は左の如き條件にて、馬匹付き馬車及び馬匹のみの賃借契約に應ずべし。

一、良馬四頭及び馭者一人を備へたる馬車一臺に付一日十五シリング、荷鞍或は他の鞍及び馬具を備へたる通常の馬一頭につき一日二シリング、鞍を備へざる通常の馬一頭につき一日十八ペンスを支拂ふ。

二、支拂は馬車及び馬匹がウイルズ・クリークに於いて軍隊に加はる時より開始さるべし。軍隊に加はる期日は來る五月廿日或はその以前なることを要す。ウイルズ・クリークに至る往路及び除隊後歸宅に要する時日に對しては、別に適當額を支給すべし。

三、各馬車及びその附屬の馬匹、各乗馬、駄馬の價格は、余とその所有者との選定したる第三者により評價さるべし。軍役に従事する馬車、その附屬の馬匹、或は他の馬匹に損失を生じたる時は、前記の評價に従ひ、その對價を交付すべし。

四、契約締結の時、その要求ある場合には、馬車及び附屬の馬匹或は單獨の馬匹の持主に對し、七分の賃銀を前金として余より交付すべし。殘金はブラドック將軍或は軍の主計より除隊の時に支拂ふべく、或は要求に應じ隨時支拂ふことあるべし。

五、馭者或は雇入れ馬匹の世話をする者は如何なる理由にても軍人としての服役を要求することなし。即ち馬車及び馬匹の牽引、或はその世話以外の任務に使役せらるることなし。

六、馬車或は馬に積みて陣中に運ばるゝ燕麥、たうもろこし、その他の秣にして馬の飼料に當てたる殘餘は、軍隊用として買上ぐべく、これに對しては適當の代價を支拂ふべし。
 注意。——余の息ウィリアム・フランクリンもカンバーランド郡にて、以上と同様の契約を結ぶ權限を與へられたり。

ベンジャミン・フランクリン

ランカスター、ヨーク、カンバーランド諸郡の住民諸君に告ぐ

同胞諸君。數日前たまゞ余がフレデリックタウンの陣中に到るや、將軍及び將校等は、車馬の補給を得ざるがために、いたく焦慮しつゝあつた。元來本州は最も車馬補給の能力あるものと期待されてゐたのであるが、知事と州會の意見不一致のため、この目的のために金員を準備することもなく、又何等の手段も講ぜられなかつたのである。

武装せる部隊を當地方諸郡に急派し、最良の車馬の必要數を徵收し、馬車を馭し馬匹の世話をなすに必要な人員を強制使役すべしとの提案もあつた。

併しながら、英本國軍隊がかゝる目的にてこれら諸州を通過する場合、特に彼等の現在の感情、我々に對する反感に鑑み、住民諸君に少からざる、且つ重大なる迷惑を及ぼすに非ざるかを憂慮する次第である。故に余は進んで穩健公正な手段によつてなし得らるゝところを先づ試

みんと努力したのである。これら奥地諸州の住民諸君は最近通貨の不足を州會に訴へてゐたが、今や多額の金額を受領配分すべき機會が諸君に與へられたのである。何故なれば、この遠征軍に對する諸君の勤務は必ずや一百二十日間に互つて繼續するものと考へられるのであるが、然る時はこれら車馬の賃貸料は三萬ポンド以上に上るべく、しかもそれは金銀貨を以て支拂はれるのである。

而してその勤務は輕易且つ安樂なものであらう。何となれば軍隊は一日十二哩以上行軍することは稀であり、馬車、輸送馬は軍隊生活の必要品を運搬するものなるゆゑ軍と共に行進し、これより早く行進してはならないからである。又軍隊自身のために、行進中も、露營中も、常に最も安全な位置に置かれるのである。

もし諸君が余の信ずる如く眞に善良忠誠なる國王の臣民であるならば、今こそ諸君は王の最も嘉し給ふ御奉公を爲し、併せて自己の利益を計ることができるのである。耕作の都合上個々には一臺の馬車、四頭の馬、一人の馭者を提供し能はぬ人々も、數人協力すればできるのである。即ち一人は馬車を、一人は一頭或は二頭の馬を、又他の一人は馭者を提供し、賃料は適當の割合で分配すればよいのである。併しかやうに十分な報酬と穩當な條件が提出されるにも拘らず、諸君にして王と國家に對するこの御奉公を肯んじないならば、諸君の忠誠は甚だ疑はしいものとならう。國王の事務は爲されねばならない。諸君を守るために遙々と渡來したこの

多数の勇敢な軍隊は、當然爲すべきことに對する諸君の怠慢のために、無爲に時を過してゐることはできない。馬車と馬が必要なのである。それが得られなければ、恐らく強制的な手段を採ることとならう。その場合には諸君は賠償を求めて探し廻らねばならないが、恐らく諸君の訴へは同情もされず、取上げても貰へないであらう。

余はこの事に個人的利益を有する者ではない。善事をなすに努めたといふ自己満足の外には、余は骨を折つた報いとして、たゞくたびれるだけなのである。もしこの方法によつても車馬入手の見込みが立たなければ、十四日以内に余はその旨を將軍に報告しなければならぬ。然る時は、驃騎兵サー・ジョン・セントクレアは一隊の兵を率ゐて、徵發のために即刻州内に入り來るであらう。余は諸君の眞の友人であり、衷心より諸君の幸福を祈るものなるが故に、萬一にもかゝる事態に立ち到らんことを憂ふるのである。

ベンジャミン・フランクリン

私は前金として馬車の持主に支拂ふために、將車から約八百ポンドを受取つた。併しそれだけでは足りなかつたので、更に二百ポンド以上も私の金を立替へた。かくして二週間後には百五十臺の馬車と二百五十九頭の荷馬とが陣地に向つて進んでゐた。廣告には、馬車や馬が亡失した場合には、價格に應じ補償する旨約束してあつたが、持主たちは、ブラドック將軍を知らないし、その人の約束がどれだけ當になるか分らないのだから、私が支拂の保證をすべきだと主張するので、私は承知して保證を與へた。

或る晩陣中でダンバー大佐の聯隊の將校達と夕食を共にしたとき、大佐は下級將校等のことが心配だと私に打明けた。その話によると、彼等は概して貧乏で、給與もよくはないので、これから長い間荒野を進軍するには、途中では何も買へないのだから、今食糧品を十分買入れておかねばならないのそれが出来ないとのことであつた。私は彼等の状態が氣の毒になつたので、幾らかでも慰問品を集めてやらうと決心した。もちろん、大佐には自分の考へを話しはしなかつたが、翌朝州會の委員宛に手紙を出し、これらの將校の状態に同情するやうに熱心に勧告し、日用品や嗜好品の寄贈をなすやう提案した。彼等の手許には自由に處理出来る若干の公金があつたのである。私の息子は陣中生活の經驗があつて陣中で欲しいものも知つてゐるので、その表を作つてくれた。私はこれを手紙の中に同封した。委員會はこれに賛成して、熱心に奔走してくれたので、例の馬車などと同じ頃に、慰問品も、私の息子の管理の下に、陣中へ届いたのである。それは二十袋から成り、各袋には次のものが入つてゐた。

角砂糖	六ポンド	黑砂糖	六ポンド
緑茶	一ポンド	下等紅茶	一ポンド
粉コーヒー	六ポンド	チョコレート	六ポンド

極上白ビスケット	半箱	胡椒	半ポンド
白醋	一クオート <small>(四分一)</small> <small>(ガロン)</small>	グロスター・チーズ	一箇
上等バター	二十封度入一樽	マデイラ古酒	二打
ジャマイカ酒	二ガロン	芥子粉	一壘
煉製ハム	二箇	牛の舌の乾物	半打
米	六ポンド	乾葡萄	六ポンド

これらの袋はよく荷造りして同数の馬につけられてゐた。各袋はその馬とともに一人の將校への贈物だつたのである。將校等は非常に感謝してこれを受けた。兩聯隊長は最上級の言葉で厚意を感謝する旨の手紙を私によこした。將軍も亦馬車徵發のためにとつた私の處置に頗る満足し、私の立替金は早速拂つてくれ、感謝の言葉を繰返し、この上とも彼の軍隊への食糧補給に援助するやう懇請するのであつた。私はこの仕事をも引受け、忙しく奔走してゐるところへ、彼の敗戦の報知が來た。私はこの仕事のために自分の金を一千ポンド以上も立替へ、その勘定書を將軍に送つておいたが、幸なことに、それが戦ひの數日前に彼の手許に届いたので、彼は直ぐに主計宛てにかつきり千ポンドの支拂命令を返してよこし、残額は次の勘定に廻すことにした。これだけでも拂つてもらつたのは好運であつた。残りはとう／＼貰へなかつたのだから。このことはまた後で述べる。

この將軍は、私の考へでは、勇敢な人物で、ヨーロッパの戦争だつたら武名を揚げたかも知れない。併し彼は自信が強過ぎ、また正規軍の強さを過重に評價し、アメリカ人やインディアンの軍隊を見くびり過ぎてゐた。我々のインディアン通譯者ジョージ・クローガンは百名のインディアンと共に彼の行軍に加はつたが、彼等もし好遇されたら、案内や偵察には大いに役に立つたであらう。ところが將軍が彼等を見くびつて無視したので、次第に彼の許を去つたのである。或る日彼と話してゐると、彼は進軍の豫定に就いて話しはじめた。

「デュケーン (Dunroese, オハイオ河岸にある要塞、佛人の築いたもの)の要塞を奪つたら、」と彼は云つた、「私はナイヤガラに進むつもりだ。ナイヤガラを取つて尙ほ季候が許せば、フロンテナックに向ふつもりだが、多分さうなるだらうと思ふ。デュケーンで二三日以上手間どることはまづないであらうし、そこから先は、ナイヤガラまで、吾が軍の進軍を阻むものは全くないから。」

私は軍隊が森や藪を切り拓きながら非常に狭い道を行進するために長い列にならねばならないといふことや、以前イリノイスへ侵入した一千五百名のフランス軍が敗北したことに就いて讀んだことなど思ひめぐらし、この戦闘の結果には多少の疑惑と懸念を抱いてゐた。併し私は次のやうに述べただけであつた。

「確かに閣下が十分な砲を裝備するこの堂々たる軍隊を損傷することなく、デュケーンにお着きになれば、如何に要塞は堅固で、守備兵は頑強であらうと、とても長くは抵抗できませんまい。」

ただ行軍を阻む虞がありはせぬかと思ふのは、インディアンの伏兵だけです。彼等は不斷やりつけてゐるので、伏兵戦は巧妙です。閣下の軍隊は四哩近くも細長い行列を作つて行進されるわけですから、側面から奇襲を受け、絲のやうに方々を立ち切られる心配がありません。さうなると、距離が離れてゐるので、互に援けようとしても間にあひますまい。」

將軍は私の無知を笑ひながら答へた。

「なるほどこの野蠻人共は幼稚なアメリカの軍隊にとつては怒るべき敵でせうとも。併し、國王陛下の訓練ある正規軍にとつては、君、手應へがあつたと思はせることさへできませんよ。」

軍人と彼の専門の事で議論するのは當を得たことではないと考へたので、私はこれ以上は言はなかつた。併し敵は、私が懸念してゐたやうに、彼の軍隊が長い行列を作つて行進してゐるのに乗ずることはなく、要塞から九哩以内の處までは何等妨害も加へず進軍を許したのであるが、軍隊が川を渡つて全部隊の渡河を待つてゐた先頭部隊に加はり、一そう大集團となつた時に、そして今迄通つて来た何處よりも森の打開いた場所へ出た時に、木立や茂みの後から猛烈な砲火を浴びせて前衛部隊を攻撃したのである。これで初めて將軍は敵が間近にゐることに氣がついた。前衛隊が混亂に陥つたので、將軍は救援のため部隊を急派したが、馬車や荷物や家畜の間を通るので大混亂となつた。そしてたちまち敵の砲火はその側面に注がれた。將校は馬上なのですぐ目につき、敵の目標となつてばた／＼と倒れた。兵士等は一ツ處に集つてごつたかへし、命令するものもなく、又命令があつても聽かず、敵に狙ひ撃ちにされるままになり、三分の二は殺されてしまつた。すると残りのものは恐怖に襲はれ、算を亂して逃げ出した。

馭者達は馬車につけた馬の中一頭づつはづして逸走した。他の連中も早速これに倣つたので、馬車も糧食も砲もその他の軍需品もすつかり敵の手に残された。將軍は傷いたが、辛うじて運び去られた。彼の祕書シャーリ氏は、彼の側で戦死した。八十六人の將校中六十三名が死傷し、千百名の兵卒中七百十四人が戦死した。この一千百名は全軍からの選抜兵で、その他はダンバー大佐と共に後方に残り、一そう大量の軍需品、食糧、その他の荷物等とともにこれに従ふはずになつてゐたのである。逃走者たちは追跡を免れてダンバー大佐の陣地に着いたが、彼等のもたらした恐怖の情はたちまち大佐及びその部下の全員を捕へてしまつた。そして、大佐の軍は今は一人名を超えてゐたのに、ブラドック將軍を破つた敵軍はインディアンとフランス兵を合せて多くも四百名は超えてゐなかつたのだが、彼は進軍して失はれた名譽を多少でも回復しようとするところか、糧食、彈藥の類を全部破棄せよといふ命令を下した。といふのはイギリス植民地の方面へ逃走するのに便宜なやうに、馬はなるだけ多く、運搬すべき荷物はなるだけ少くしたのである。彼が植民地へ着くと、ヴァージニヤ、メリランド、ペンシルヴェニヤの知事から、軍を國境に配置して住民の保護に當てられたいと要求して來た。だが彼はフィラデルフィヤまで行けば町の住民が保護してくれるが、それまでは我が身が危いと考へて、その邊の土地は大急ぎで素通り

してしまつた。この事件があつてから初めて我々アメリカ人は、イギリスの正規軍は強いと自慢にしてゐたのが買被りではないかと疑ふやうになつたのである。

彼等が上陸してから植民地外に出るまでの最初の行進中にも、彼等は住民を劫掠し、そのために貧しい家々では全く立てなくなつたのさへあり、人々が苦情を云へば、凌辱、罵詈、監禁までしたのである。もし本當に保護してくれる者がいるとしても、こんなのは眞つ平だと私達が考へるやうになるにはこれだけで十分であつた。一七八一年に於ける吾が友軍フランス兵の行動はこれとは如何に異つてゐたことか。彼らはロード・アイランドからヴァージニアまで、我が國でも最も人口稠密の地方を、凡そ七百哩も進軍したのだが、その間豚一匹、鶏一羽、いや林檎一つ無くなつたといふ苦情さへ起らなかつたのである。

將軍の副官の一人であつたオーム大佐は重傷を受け將軍と共に助け出され、數日後に將軍が死ぬ時までずつとその傍にゐた。大佐が私に語つたところによると、將軍は最初の日は一日中黙りこんで、たゞ夜になつてから「誰がこんなことになるかと考へたらう。」と云つただけであつた。次の日もまた物も云はなかつたが、最後に「今度は奴等をどう扱つたらいいか分るのだが、」と云ひ、それから數分後に死んでしまつたさうである。

將軍の命令、訓令、通信と共に祕書の書類も敵軍の手に渡つたので、敵はその中の幾箇條かを選んで佛譯し、これを印刷に附し、イギリス政府は既に宣戰布告の以前に戰意を抱いてゐたことを立證した。その中には私が軍隊に盡した功績を賞讃し、私に目をかけるやうに勧めた大臣宛ての將軍の手紙が數通あつた。デーヴィッド・ヒューム David Hume (1711-1796. 英の) 史家、哲學者 はこの數年後にハーフォード卿が佛國公使になつた時その祕書となり、後コンウェー將軍の國務大臣時代にその祕書となつたのだが、彼も役所の公文書中にひどく私を褒めてゐるブラドックの手紙を見受けたさうである。併し遠征が失敗に終つたので、私にしたこともあまり認められなかつたやうである。といふのは、かうした推薦も結局私には何の役にも立たなかつたから。

私が報酬として將軍に求めたことはたつた一つで、それは私達が年間で雇つた奉公人は今後は軍隊にとらないやうにし、またすでに兵籍に入れたものは除隊させるといふ命令を部下の將校達に出して貰ふことであつた。彼は易々として承諾し、その結果私の申請によつて數名のものが主人のもとへ歸された。ダンバーに指揮權が委ねられてからは、前程寛大ではなくなつた。彼が退却、いや、むしろ逃亡といふべきだが、その途中フィラデルフィヤにあつた時、私は彼等が徴集したランカスター郡の三人の貧しい百姓の召使どもを除隊してくれるやうに申請し、この點に關する故將軍の命令を持ち出した。彼は二三日したらニュー・ヨークへの行軍の途中トレントンに立寄るから、そこへ主人達が出頭すれば奉公人は歸してやらうと約束した。そこで主人達は金と暇をかけてトレントンへ行かなければならなかつたのだが、さて行つてみると、彼は約束の履行を拒絶したので、彼等は大損をした上にひどく失望させられたのである。

馬車と馬がなくなつたことが、一般に知れ渡ると、持主達は私の處へ押かけて、私が保證した額を催促しだした。彼等に責められるには私もほと／＼當惑した。「金は軍の主計の所に用意してあるが、シャリー將軍からまづ支拂命令を貰はねばならない。私から請求してやつてはあつたが、何分將軍は遠くにゐるのでおいそれと返事は來ない。少し待つて貰はなくては、」と私は彼等に話したのだが、こんなことでおとなしくなるはずもなく、中には私を訴へるものも出て來た。最後にシャリー將軍が委員を任命して彼等の請求を取調べ支拂命令を出させたので、私はやつとこの恐しい状態から救はれた。その總額は二萬ポンド近くに達し、それを拂つたら私は破産してゐたであらう。

この敗北の報知が來る前のことだが、ボンド先生が御兩人で寄附金帳を持つて私の處にやつて來た。デューケーン要塞攻落の知らせが來たらその祝勝に大花火を上げるといふ考へで、その費用にあてるため金を集めに來たのである。私はむづかしい顔をして、祝ひの準備はいよいよ祝ひをする理由が分つてからで澤山だらうと云つた。私が早速彼等の提議に應じないのが二人には意外だつたらしい。

「何ですつて——。まさか要塞が落ちないと思つてゐるわけぢやありませんまいね。」と一人が云つた。

「要塞が落ちないかどうかは知りませんよ。併し戦争の結果といふものは、めつたに分るものぢやありませんからね。」私は自分が不安に思ふ理由を説明した。それでこの寄附計畫はおじやんになり、おかげで發起人達は、花火の準備をしてゐたらいい恥をかくところを免れたのである。ボンド先生はその後ある機會に、フランクリンの豫言は好きではないと云つた。